
東方流星録

銀の幻想

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方流星録

【Nコード】

N82360

【作者名】

銀の幻想

【あらすじ】

友人と遊びにいった色々あって幻想郷で暮らすようになって・・・それから彼女たちとも出会って・・・また色々なことがあって妖怪になった。お世話になっている彼女に恩返ししたいけど、俺ができることって？ほのぼのしたいけど、弾幕ごっこな毎日。

25話にあらすじを変えました。

ブログ

俺は今どこかわからない森の中にいる。

いきなり変なことを言う奴だな。とか思わないでほしい。俺はただ事実を言ったただけだ。

俺の名前は綾瀬霧夜。あやせ きりや普通の高校生だ。

なぜこういう状況になっているのかというと、少し時を遡ることになる……。

それは、学校から帰っている途中のことだ。

いつものように数少ない友人（全員オタク）と一緒に帰っているときのことだった。

「俺、昨日すごいところ見つけちゃったぜ！」

友人の1人がそう話はじめた。

友人の話によると昨日暇だった時間を利用し東の方へ向かって散歩をしていたところなにやら怪しい洞窟を見つけたらしい。

彼いわくその洞窟からはファンタジーな感じがしたので今日みんなで行って見ないか、ということだった。

もちろんオタク友人達（俺はいれないでほしい）はその誘いを受け今日の夕方5時に集合してそこへ行くことにした。

もちろん俺も。暇だったものだから、ついその友人達の誘いに乗ってしまったのだ。

今思えばそれが俺の人生の分かれ道だった。

洞窟の前には、立ち入り禁止の標識が立っていたが俺達はそんなものは気にも止めずに洞窟の中に入ってしまった。せつかくここまで来たのだから、立ち入り禁止です。はいそうですか帰りましょうなんて考えるやつは誰もいなかった。せいぜい立ち入り禁止のところに

行ったからと言っても少し注意されるだけだと考えたのだ。

洞窟の中はやっぱりというか暗かった。

俺の友人達は全員懐中電灯を持ってきていたが、俺は持ってきていなかった。友人達から離れないようにして歩いていた。

少し洞窟の中を行くとだんだんと頭上の壁の高さが低くなってきているのに気がついた。

さすがにこのまま進むことはできないであろうと思ったので、俺がみんなに「これ以上進むのはやめないか？」と言おうとした時に俺の目の前に切れ目が入った。

そしてそこから切れ目が大きくなっていった。

え？と言う暇もなくその切れ目が足元まで伸びていき切れ目の中に落ちていった。

その瞬間俺はなぜかわからないが気を失い、気付くと森の中にいたと、

まあこういうわけなんですよ。

しかし、あの切れ目というか隙間つばいのはなんだったのだろうか？

にしてもだ、あの洞窟の中からいきなり森の中に移動：家の近くに木がたくさんある公園は知っているが、こんな森があるなんて聞いたことがない。あの洞窟はこの森に通じていたということにしたいが周りを見ても洞窟なんてものはないし、あの意識を失う前に見た（落ちた）あの切れ目はなんだったのだろうか？

うーむ。考えれば考えるほどわけがわからなくなるな…。

とりあえず誰かが助けに来てくれるのを待つってのもいいが、俺親いないしな…。

それにあいつらが助けを呼んでくれるかどうかも怪しいし…。

「あいついきなりいなくなつたぞ！！」

「まさか神隠し！？」

「いいな畜生！俺も異世界行きたいぜ！」

なんてことを言っているかも知れない。

いや、そんなことはない…とはいいきれないけど救助を待つっての

も手の一つだ。

だが空も夕暮れになってきているし、夜になるまで待っていたら辺り一面暗くなつてなにも見えないだろうからとりあえずどこか適当に進んでみることにしよう。

もし、町の近くだったのならすぐにこの森から抜け出せるだろうしな。

ちなみにだが、俺は携帯なんて便利なものは持っていない。

なぜなら必要ないし、連絡するって言つてもあいつらだけだし、しゃべりたいことがあれば電話すればよかったしな。

今は携帯もっておけばよかった。と後悔してるけどね。

プロローグ（後書き）

次回

森に中を進んで行くとなにかがいる気配がした。
そこにいたのは・・・人形？

更新は、早くなるかもしれないです。
どんなに遅くても水曜には更新と

1話（前書き）

ブログを少し修正してみました。

感想アドバイスなどをしてくださる心優しい方は感想へ。

要望などがある人はメッセージに送信してくれるとうれしいな・・。
面倒だったら感想でいいです（どうせいないだろうし）

1話

夜の森？何これ怖い…。

ども、さっき洞窟の中で遊んでいたらいきな森の中にいて、迷子になっっている綾瀬霧夜です。

時間経つのは早いね。さっきまで夕方だったのに適当に森の中さまよってるだけで夜になっちゃった。というか暗闇コワイ。

夜になるまで歩き続けているのにまだ出口が見当たらない。というより森から抜け出せない。道間違えたかな？というか暗闇コワイ。ってそんな暢気なこと言っている場合じゃないな。とりあえず今日は最悪の場合家に帰れないかもしれない。ということを想定しておこう。

と言っても俺はなんにも持ってないし（あるのは腕時計のみ、しかも時計部分が光らないので時間がわからない）考えたって無駄かもしれないが。

野宿：？明らかに危険な気がする。あくまで気だけど。

徹夜で歩いていけば森も抜けれるかもしれない…。が確証はないし…。

とりあえず、少し休むとするか。

木に凭れ掛かにながら考える。

にしても、この森一体どこまで続いているんだ？
体力が持つ気がしない。俺って体力ないな…。

………？

少し先に明かりが見えたような気がするな…。

気のせいかもしれないが、行ってみるか。もしかしたら人がいるのかもしれないし…。

近付いていくとごちんまりとした洋館があった。

な、なぜこんな森の中に洋館なんだ？俺の予想ではあっても小屋とかだったんだが…。

とりあえず、中に誰かいないか確認…。

………！？

しようとしたが、あまりにも衝撃的なものを見て咄嗟に木の陰に隠れた。

待て、落ち着くんだ俺。なんかものすごくおかしなものをみた気がするぞ？

俺の目がおかしくなければ人形が動きまわっていたのをみた…。

もしかして最近の技術ではあんなのもなめらかに人形を動かせる技術が発達していたのか？

そうかそうか。ならあんな動きも納得…できる？

もう1回確認してみよう。

俺は洋館の窓から中を覗いて…木の陰に隠れた。

今度は人形達（複数いた）がお茶運んだり掃除してたりするのが見えた。

うん。もうこれ科学の進歩とか言ってなんないわ…。

ありえないだろあんなの…。

逃げるか？逃げたほうがいいよな？あんなわけわからんものがある

家と、ただ暗い森。

うん森の中に逃「そのあなた？何してるの？」げよ…。

……。

バレタ…ダト？

声のした方に振り向くと金髪のまるで人形のような女性（少女？）がいた。

「あなたはただの迷子？それとも、私になにか用かしら？」

どうやら敵対心はない…と思ってもいいのか？

「…ただの迷子…じゃないですけど迷子です。」

「？どういうこと？」

「気付いたらこの森にいたんです。おかしいでしょう？」

「…。もしかして、その前に変な隙間かなんかに落ちなかったかしら？」

隙間…。あの切れ目のことだろうか？

「なんか切れ目みたいなものには落ちました。」

「はぁ…またあいつか…。いいわ、今日一晩くらいなら泊めてあげてもいいけど？」

「本当ですか！？お世話になります。それと聞きたいことが…」

「色々聞きたいことはあると思うけど、一つだけ言っておくわ。ここはあなたがいた世界とは別の世界。幻想郷というところなのよ」

は？

何いきなり言っちゃってるんだ彼女は…？ここは俺がいた世界とは違う世界？

幻想郷？なんですかソレ？

「そういえば、まだ名乗ってなかったわね。私はアリス・マーガトロイドよ。立ち話もなんだから、家の中で話しましょ？」

「え？あ…綾瀬霧夜です。」

つてなに普通に返しているんだ俺は！

もうアリスさんは家中入っちゃったし、とりあえず入るしかないか。

家の中に入ると…うん。やっぱり人形が動いていた。

……。

なんかもうありえないことはないって思っていたほうが気楽に過ごせるかもしれないな。

「とりあえず、座ったら？」

アリスさんは椅子に座ってお茶を飲んでいる。（お茶を持ってきたのは人形だろう）

言われた通りにアリスさんと向かい合わせになるように座った。

「で？」

「で？ってなんでしよう？」

「なんか聞きたいことあるでしょ？」

とりあえずさっきアリスさんが言っていた幻想郷のことについて聞いてみるか。

「幻想郷ってなんですか？」

「おおまかに言うと人間と妖怪が共存している場所っていえばわかるかしら？」

聞き間違いか？妖怪ってなんだ！？

「妖怪っていいました？」

「ええ。他にも幽霊やら天狗やら例をあげたらきりがなくらいの種族がいるわ。私も人間じゃないし。」

「ちよつと待った！」

「なにかしら？」

「あなたが人間じゃない？」

「ええ、私魔法使いなのよ」

……魔法使いつて人間じゃね？

「私はもう老化しないし、その人形だって私が動かしてるのよ？」

「は……？本当デスか？」

「ええ、そうよ。私が動かしてなかったらなにで動いてると思ったのよ？」

「全自動人形だと思っていました。」

「まあ仕方ないわね。外からきた人間だものね。」

なんだろう……。この対応のよさは……もしかして俺みたいな人たちがいるのだろうか？

……そういえばさっきから俺疑問しかもってねえな。

「さっきアリスさんは人間と妖怪と共存って言いましたよね？人間だけが住んでる場所ってあるんですか？」

「ええ。人間の里って言うってちゃんと人が暮らす土地もあるわ。明日連れて行ってあげましょうか？」

「え？でもそこまでアリスさんに迷惑かけられないですよ。その、人間の里までの方向さえ教えてもらえれば……」

「一つ言っておくけど妖怪に会ったら死を覚悟したほうがいいわよ。」

「

「え？」

「あなたはなんの力もないただの人間。そんな人間が妖怪に会った
らすぐに食べられるわよ？」

ナンダッテ？

「で、でもさっきアリスさんは人間と妖怪が共存してるって言った
じゃないですか。」

「ええ。でもそれは人里の話。人里からでたら妖怪に襲われても文
句はいえないことになってるの。」

「泣ける…。」

「で？どうするの？」

「お世話になります…。」

俺は頭を下げた。

展開が早くて少し頭の働きの遅れたが理解できた。ここ幻想郷は危
険なところ…らしい。

「そつえば、あなたよく平気ね。」

「？なにがですか？」

「この森は魔法の森って言うんだけど、普通の人間なら息をするだ
けで体調を崩すような茸の胞子が飛んでるの。あなたは大丈夫なの
ね。」

「え？」

なにそれ？もしかしたら俺体調崩して動けなくなったりしてたのか？
幻想郷って怖…。

「あと聞きたいことはある？」

「俺って元の世界に戻るんですか？」

「戻るわよ？博麗神社っていうところに住んでいる巫女に頼めばもどれるはずよ。」

じゃあ、人里よりそっちに連れて行ってもらったほうがいいのか？
…？

「私としては、人里と神社だったら人里のほうが近いから案内するのは人里までのほうがいいんだけど…」

「あ！はい！全然いいです！むしろ人里に連れて行ってください！」

これ以上迷惑なんてかけられないし、世話になりっぱなしだな。

「そう？じゃあ明日は人里まで案内するわ。食事はいるかしら？」

「えっと…お願いします。」

料理をしていたのも人形だった。

どれだけ手先が器用なんだろうか…。

1話（後書き）

水曜更新する内容は主人公紹介になるかも知れませんが
許してくれたらうれしいな・・・。

主人公紹介（前書き）

今回は予告通りの主人公紹介になります。

主人公紹介

主人公

名前 綾瀬^{あやせ} 霧夜^{きりや}

年齢 18歳

種族 人間

身長 170くらい

詳細 この物語の一応主人公。幻想入り（彼は幻想入りなんて言葉は知らない）する前は自分の家で一人暮らしをしていた。というより親がいなかっただけ。

普段はオタク友人とともに過ごしたりたまに出かけたり、もしくは家でゲームしたり。

本人は否定しているが、彼も若干オタクっぽいかもしれない。

友人達と洞窟の中に遊びに行ったときに謎の切れ目に落ちて幻想入り。

まあ犯人はわかってると思うけど・・・。

性格はおもしろそうながあったらなにかと首を突っ込みたがる。たまに我慢するが。

特技、趣味は特になし。

喧嘩などの経験はほとんどない。あつたとしても話し合いで解決し

てきたので強いかどうかわからない。

能力 今のところなし・・・。

といたいところだが実は持っている。本編ではまだででないが、
楽しみにしていてほしい。

主人公紹介（後書き）

追加してほしいことがあったら感想でお知らせ下さい。

2話（前書き）

どもども更新ですよ

来週はモンハン発売だっけ？みんな買うのかい？

1話投稿するたびにお気に入りが増えるから少し期待わくわく

2話

ん？

俺ってなにしてたんだっけ？

ああ、そうだった。友人達と遊びに行ってからなんか知らない場所に行って…。

「あら、起きたの？」

俺が目を開けるとアリスさんの顔が見えた。朝起きて1番最初に見るのが女の人なんて初めての体験だな。

って俺横になってるのになんで顔がいきなり見えるのだろうか…。頭にもなんだか柔らかい感触もあるし、これは…？

「私の膝枕の寝心地はいかがかしら？」

「最高です…ってオイオイ。」

俺なに言ってるのさ、それを言う前になんか言つことあるだろ。えーと。

頭が覚醒してないな。言葉がでてこない。あー…。

「なぜ私が膝枕してるか…かしら？」

「そうそれ…って体になんか乗ってるし…」

足の方を見るとアリスさんの人形たちが膝の上に乗っていた。可愛いから許す。可愛くなくても許したけどね。

「昨日貴方と食事した後のこと覚えてる？」

「…覚えてないですね。」

「安心したのか知らないけれどイスに座ったままぐっすり寝てたわよ？ 起こすのもかわいそうなくらいにね。」

「ごめんなさい…」

「謝らなくてもいいわよ。起こさなかったのも私だしね。」

「それで、なんで俺こんなことになってるんですか？」

「普段ならこんなことしないのだけれど、貴方の寝顔があまりにも可愛かったから…つい。」

女の人に可愛いって言われるって…。なんか複雑だな。でも、これは褒められてるんだよね…？

気持ちの悪い男に対して可愛いとは言わないだろうからな。うん。褒められていると思うっておこう！

「って一晩中してくれてたんですか！？」

「ええ。もともと私は魔法使い。別に寝なくても平気なの。いつもは寝てるけどね。さて、そろそろ行きましようか？」

「ああ…えっと人里でしたっけ？」

「ええ。」

アリスさんは（アリスさんが本当にやっているかは怪しいが）俺に乗っていた人形をどけてくれたので俺も起き上った。

「じゃあ案内するわ。ついてきて。」

アリスさんが部屋の外にでたので俺も後ろについて行った。

外は明るくなっていて視界も良好。道さえ教えてもらえば人里に1人で行きたいが妖怪？

などに襲われることがあるらしいから恐ろしい。でも見てみたい気もする。興味と命。

犠牲にするならどちらか…といわれたらやっぱり命だよ…。俺は

臆病者か？でもこれが普通だと思う。

アリスさんは妖怪にあっても大丈夫なのだろうか？魔法使いと言っていたが、昨日の料理の時だって普通に料理していたし、少し手から火が出る！

なんてことを少し期待していたのだが…。

でも人形操っている（本当に手先が器用だ）し…。あれは魔法使っているのだろうか？

「アリスさん。」

「何かしら？」

「アリスさんの人形って魔法で操ってるんですか？」

「この人形？この人形は私の能力で操っているのよ。」

「能力？」

「ええ。私の人形を操る程度の能力でね。幻想郷にはなにかしらの能力を持った奴らがいるのよ。」

「人間も持っているんですか？」

「ええ。確か…時を止めたりしている人がいたはずよ。」

時を止める…？

なんだそれは…。妖怪にも勝てそうな能力だな…。

「もちろん持っていない人間の方が多いけどね。貴方はどうかしら？」

「え？俺ですか？」

「幻想入りした外来人が能力を覚醒させることも少なくはないわよ。今なにか感じる？」

「まったく感じませんね。」

「まあ、それが普通でしょうね。」

そんな簡単に能力？が発揮されたらすごいけどな。幻想郷についての知識が少しあがった気がする。

「他になにかないんですか？」

「何かって？」

「えーと。外とは違うこと？」

「さあ？私はそんなに外のことは知らないからわからないわ。」

「…ですよね。」

この世界の彼女にそんなことを聞いてもわからなくて当たり前…なのかな？

そういうことに詳しい人もどこかにいそうな気がするが。

森の中を歩いて30分くらいたつたが、まだ人里というところにつかないのだろうか？

「アリスさん。人里ってこんなに遠いんですか？」

「私1人なら飛んで行けばすぐにつくのだけれど…？」

「飛ぶ！？アリスさん空飛べるんですか！？」

「ええ。空飛んだら10分もかからないわ。でも貴方は飛べないでしょう？」

「本当にごめんなさい。」

「別にいいわよ、それくらい。もうすぐ着くわよ。」

そう言つて会話が途切れた。にしてもな。

空飛べるのか…。見てみたいな。

「ここが人里よ。」

アリスさんに案内され着いた場所には人がいた。

うん。やっぱり普通の人がたくさんいると安心するよ。さっきこ

に来る前に門番の人に少し睨まれたが気にしなくても…大丈夫かな？
にしても他の人が着ているものを見ていたら幻想郷^{こじ}って外の世界よりも文化が遅れているような気がした。
なぜなら、日本にはあんなに着物を着ている人なんて滅多にみたことないし、見たとしてもテレビとかだ。
本当に帰れるのだろうか？

「さて、私は行きたいところがあるからここで別れましょ。」

「あ、はい。色々ありがとうございました。」

「ええ。また縁があつたら会いましょ。」

そういつてアリスさんはどこかへ向かう。

今までアリスさんにお世話になつてばかりだったからこれからは1人でなんとかしようと思うが、…無理？

こんな見知らぬ土地で1人でなんとかしろ。なんて言われたつてできませんわ。ええ、へたれだのなんだの言う方がいいさ。

とりあえず、誰かにえつと博麗神社だつけ？

そこまでの道を聞こう。でも、行く途中で妖怪に襲われることがあるから行くな。

とかそういう落ちはないよな…？

とりあえず、近くににいる人に話しかけてみようか。知らない人に話しかけるなんて苦手なんだがな…。

「すみません。」

「……」

あの…無視されるのつてもものすごく辛いのですが…。

「もしもし？私の声が聞こえていたら返事してくれませんか？」

「ん？俺のことかい？」

おお。聞こえてたのか。

振り返ってくれたのは見た目20代くらいの男の人だった。

「あの聞きたいことがあるんですけど…」

「おお。いいぜ。その前に俺も聞きたいことがあるんだが、お前外来人か？」

「ガイライジン？」

「外から来た人間のことだ。」

「あ…そうです。でも、よくわかりましたね。」

「まあな。そんな服装してる奴なんざここにはいないからな。」

確かに俺みたいな服装をしている人は見当たらない。

ちなみに俺の服装はGパンに長袖。と、どこにでもいそうな（外の世界では）恰好である。

「そうか！そうか！よく人里まで来れたな。ここに来る途中妖怪に会わなかったか？」

「魔法使いには会いました。それで聞きたいことが…」

「魔法使い？…白黒の？」

「？…アリスさんっていう人に連れてきてもらいましたが…」

「ほう…あの七色の人形遣いか。兄ちゃんよく逃げなかったな。」

「（逃げなかった？）あのですから聞きた「兄ちゃん気に入ったぜ！少し付き合いな！」ちょ！」

人の話を聞いてくれ…。話かける人間違えたかな…。

男に連れて来させられたところは1つ小屋だった。

周りには、『あなたが見たい夢みさせます』という看板があった。なんじゃこりゃ。

男は部屋に入りお茶を出してくれた。うん。おいしいんだけどさ、いきなりの展開に俺ついていけないんだけど…。

「俺も元々外来人なんだよ。」

不意に男が言った。って

「はい!？」

「今から20年くらい前にここに来た。」

「ってとりあえず訳わからないですけど、名乗っておきますよ?いつまでも兄ちゃんいわないでくださいよ。俺の名前は綾瀬霧夜です。」

「俺は名乗るほどの者じゃあねえ。」

「名乗れよ!!」

思わず叫んでしまった。

「おっちゃんとも呼んでくれ。」

「そんな歳でおっちゃんって…」

「実際そうだぜ?こうみえても40代だ。」

「嘘だ!!」

「ほんとほんと、で聞きたいことがあるんだが、お前は元の世界に帰るのか?」

「…ええ。もうすぐにも帰りたいですよ。」

「そうか。」

「あんたは帰らなくていいのか?」

「(さつきまでの敬語なくなりやがったぜ)まあな。あの世界にいても楽しくないし、美人さんもいないしな。」

「おい…」

女目的でこの世界にいるって…。まあいいけどさ。
にしても外来人がこの世界に残ってもいいんだな。
てつきり外来人はみんな元の世界に戻らなきゃいけないのかと思っ
てもいたが、別に残ってもいいんだな。

「能力もあつたしな。」

「！それはすごいな。どんな力なんだ？」

「夢を操る程度の能力。」

「夢？」

「ああ、その人が見たい夢を観させることができる。まあ戦闘には
向かないがいい力だぜ。」

「そりゃあ…すごいな。」

この能力があれば夢の中だが好きなことができるな。たとえば、足
の不自由な人に歩く夢を観させたり、目が不自由な人には目が見え
る夢を観させることができる。うん。素晴らしい力じゃないか。

「ちなみに、正夢、予知夢も観れるぜ。」

正直いつて正夢と予知夢の違いがあまりわからんのだが…。

「いつもなら、金か物をもらうんだが、お前は初回サービスで無料
だ。で今日お前は正夢を見る…！」

「いや頼んでないし！」

「ガハハハ！もう遅いわ…！」

「ちょ！あんた何すんのさ！」

「まあまあ、落ち着きな兄ちゃん。」

「あんたがこうさせたんだろうが…！」

なんなんだこの人は…。

「って、俺は博麗神社に行きたいんだ。道を教えてくれ。」

「博麗神社かい？あそこに行くまでには昼だったら妖精に邪魔されるぜ？」

「っ！なら夜い「夜だったら金髪少女の嬢ちゃんに喰われるぜ？」

…」

少女に喰われる？妖怪だから別にありえなくはないのだろうが、少女に喰われるのはなんか…いやだな。

せめてまともな奴に喰われたいな。

喰われるならだからな？俺が妖怪に喰われたいと思ってるなんて思うなよ？

「じゃあ、どうすりゃあいんだよ？」

「どうだな、とりあえずその妖怪や妖精とかのことを知っておいたほうがいい。と俺は思うぜ。」

「ってかなんで知ってたんだよ。」

「実際喰われかけたからな。」

…。つまり、その頃から姿形変わってないのね。妖怪って恐ろしい…。

「じゃあよ幻想郷縁起でも見せてもらいに行つてこいよ。」

「なにそれ？」

「人里にいる稗田阿求っていう奴のところに行つたらたぶん見せてもらえるぜ。」

「いや、だからさ…」

「氣い付けてな」

「もついいよ…。」

とりあえず、俺は稗田阿求という人のところに行ってみようと思った。

これ以上この人と話しても何も情報を得られる気もしないし。この人よりは話を聞いてくれればいいな…。などと思いながら俺はさっきいた場所まで戻ることにした。

2 話（後書き）

感想アドバイスはいつでも受け付けます。

少しキーワードをいぢって見ましたが・・・

反省はしてないが、後悔している！

3話（前書き）

モンハン発売。
でも更新。

3話

さて、おっちゃん（名前不明）によると稗田阿求さんっていう人に幻想録記をみさせてもらえばなにか情報を得られるらしい。

つか。なにがわかるのかくらい教えてくれたっていいじゃないか。まったくあの変な人は本当に人の話を聞いてくれない人だぜ。

さて、最初にいた場所まで戻ってきたが今度は話しかける人を間違わないようにしよう。

といってもそんなものは運だけだね。

どの人に聞いてみようかな？できれば優しそうな人がいいな…。

道を尋ねて見たがだいぶ遠い場所に住んでいるらしい。

道順を間違わないようにしなければ…。

とりあえず着いた。たぶんここであっているはず。あんまり自信はないが…。

アリスさんの家は洋風だったが、この家は和風といった感じだろうか。

玄関にインターホンなんてものはついてなかったのでノックしてみた。

…。留守かな？

もう一回くらいしてみてもいいかもしれない。もしかしたら気付いてないだけかもしれないし。

…。留守だな。

どうしようかなー。俺はその阿求という人の顔もわからないから探しに行っても意味ない。

だがここでじつと待っているというのも…暇だしな。

！少しこの里の地形でも見に行ってみるか。待っているだけでも暇だし、少したったらまたここに来るか？

でもこんなことしてるのなら博麗神社の場所を聞いて行くか？危険だけど。

だいたい、その幻想録記を見てわかる情報のこともわからないし、もしかしたら無駄足になるかもしれない。

たぶん、おっちゃんの話からすると妖怪の情報が載っていると思うのだが、妖怪の情報知ってただの人間がなんとかなるのか。という疑問がある。

その妖怪の情報を知ったからと言って確実にそこから逃げれる、ということはないと思う。

でもな…俺基本ヘタレだし、妖怪にあつたら腰を抜かして食べられる…なんていうこともありえないと思うから運にまかせて行ってみるか、博麗じ「なにか、お困りかしら？」ありや？

「…？」

おかしいな…。俺一人だったはずなんだがな…まさか妖怪さんかい？でも人里では人間が妖怪に襲われるってことはないよな？

「幻聴？」

「違いますわ。」

後ろから声が聞こえたので振り返ると傘を持った金髪の女性が立っていた。いつの間に來たんだ？気付かなかった。

「どちらさまで？」

「八雲紫。あなたを幻想入りさせたのも私。」

「へ？」

今なんて言った？この人が俺を幻想入りさせたって？

させることができるなら、戻すこともできるんじゃないだろうか？

「俺を元の世界に戻してくれませんか？」

「その前に名前を聞きたいのだけれど。」

「綾瀬霧夜。（俺の名前は知らないのか）」

「キリヤね。覚えておくわ。それで今あなたを元の世界に戻すことはできないわ。」

「……。」

そりゃあこの人（人？）が俺を幻想郷に連れてきたのだから戻してくれるわけは……ないのか？

「なぜだか、聞きたい？」

「まあ……一応。」

「じゃあ教えてあげない」

「……。」

「冗談よ。それはね、あなたはこのままだとこの星を滅ぼしてしまう可能性があるから。」

「え？」

滅ぼす？俺が？どうやって？しかも世界ならまだしも、この星を？

「嘘じゃないわ。貴方は星を滅ぼすような危険な能力ちからを持っている。でもまだ使えてないみたいだけど。」

いや、使ってたらかの星滅ぶんでしょ？使っていないに決まってるじゃない。

いまいち理解ができないんだが、話を聞いておこう。

「そ、それでなぜここに連れてきたんですか？」

「それは向こうの世界なら私は手出ししづらいけど、ここなら私も万が一貴方が暴走したときに止められるから。」

「一ついいですか？」

「ええ。それと普通に話していいわよ。」

「わかりました。それで本当に俺がそんな危険な能力を持っているとするならなぜ殺さないんだ？」

「どういうことかしら。」

「そんな危険な能力ちからを持っている俺をここに連れてくるより、殺したほうが早いんじゃないのか？」

「まあ…そうなるわ。」

じゃあなんでそうしないんだ？俺一人の命でこの星が助かるならそうするのが普通だと思う。普通ではないが。

「だけれど、その能力が発生していないのになぜ貴方を殺さなければいけないのかしら？」

「それは…」

「能力が覚醒しなければそれでいい。覚醒したとしてもコントロールできればそれでいいじゃない？例えば星を滅ぼす様な能力ちからでも。」

「そう…なのか？」

「ええ。でも、暴走したときは…」

「わかり…わかった。覚悟しておく。」

「それでいいわ。」

俺はあんまりよくないけどな。でも紫さんが言ってることは本当なのだろう。なぜかわからないがそんな気がする。

…でも能力が覚醒しなかったら一生をここで終えるのだろうか。

「紫さん。」

「何かしら？」

「外の世界の友人に別れを言いに行ってもいいですか？」

「あら？戻る気はないのかしら？」

「もし、俺の能力が覚醒しないのだとしたら、ずっと幻想郷^{ニホ}に住むことになると思うので今のうちに言っておきたいなと。」

「わかったわ。じゃあ行きましようか。」

「え？」

俺の足元に切れ目ができてまた、俺は切れ目の中に落ちて行った。

またかよ。

前と違うことは気を失っていないことと、切れ目の中に複数の目があることくらいだ。って

「目！？」

なんじゃこの黄色い目は！？俺が幻想郷に来たときもこんなものがあつたのだろうか？

「だ！」

そんなことを思っているうちに目的地についたようだ。着地に失敗して尻餅をついてしまったが。

で、ここはどこだろうか。この前と落ちた洞窟の中というわけでもないさ。「あら？」ぐはあ……。

紫さんが上から降ってきて俺の上に着地した。なにするんですか…。

「貴方が早く起き上らないから踏んじやったじゃない。」

「わかりましたから、よけて…。」

そう俺が言ったら紫さんは立ち合って俺の隣に立ったので俺も起き上った。

「ここはどこなんだ？」

「貴方を落とした近くの森よ。少し歩けば森を出られるはずよ。」

そう言われたので歩くことにする。
って紫さんもついてくるのかい…。

「あら？こんな美女と歩いてうれしくないのかしら？」

「いや、うれしいはうれしいが目立つのはあんまり好きじゃないんだ。」

「気にしなければ大丈夫よ」

「…はあ。」

そういつて紫さんは俺の腕に手を絡めてきた。いや、うれしいけど俺の友人に会いに行くのにこんなことしていたらどんな目でみられるか…。

考えるだけ恐ろしい…。

そういえば、今はだいたいお昼の時間だから学校に行っているのではないだろうか。

「紫さん。」

「なにかしら？」

「別れを言う方法変えていいですか？」

「どうするのかしら？」

「俺の友人の家に手紙を入れるだけにしたい。」

「直接会いに行かなくていいの？」

「ええ。会ったら戻りたくなくなりそうなので。」

「紙は持つてる？」

「自分の家です。」「
わかったわ。」

そのあと俺は自分の家で友人たち全員に手紙を書き家に届けてから
幻想郷へと戻った。

4話（前書き）

今回は少し短いかな？

4話

あいつらに手紙を出して幻想郷へと戻ってきた。

紫さんの隙間（さつきそう呼んでくれと言われた）を通ってついたところは阿求さんの家の前ではなくなっていた。

「ここは？」

「私の家よ。貴方は今日から幻想郷に住むことになったけど住む場所ないでしょ？」

「ええ。あるわけないでしょ。」

というより幻想入りして2日目で家なんか持っているほうがおかしい。

「それならしばらく私の家に泊めておいてあげる。」

「本当？ありがとうございます。」

「色々と説明したいこともあるから。」

そう言つて紫さんは家の中に入っていった。説明したいこと。

ここの決まりとかだろうか。まあなんでもいいけど。

「藍。どこにいるの？」

「ここにいますよ。」

「あ、いたいた。あなたに紹介しておきたい人がいるの。」
「……………」

紫さんの呼んだきたのは後ろになにやらもふもふした尻尾（であつてるのだろうか？）がある女性だった。

きつと妖怪なのだろう。あの尻尾触ってみたいな…。

「どうかしたのかしら？」

「へ…。あ！綾瀬霧夜です！え、えーとよろしくお願いします！」

「ああ。私は八雲藍。紫様の式神で九尾の狐だ。」

九尾？つまり尻尾が9本あるということだろうか。って九尾でかなり強そうなイメージがあるのだが、それを従えている紫さんって何者？

まあどうでもいいことなだけどね。

「それで、貴方に説明したいことというのはこの幻想郷の決闘ルールについてよ。」

決闘ね。妖怪と妖怪のかい？人間対妖怪なら妖怪さんが人間パクリ。はい終了。って感じが。

「食べないわよ。」

心読まないでくださいよ。

「決闘ルールはスペルカードルールと言って、まずはあらかじめ技の名前をいくつか考えておくの。」

「技？」

「必殺技みたいなものだと思ってくれていいわ。」

「ん。」

「それで、対決の際には、決闘を始める前に決闘内での技の使用回数を提示し、あとは勝った時の報酬などを決めてから勝負を始める。技を使う際には「カード宣言」をするの。」

宣言？宣言ということはカードを出して名前を叫ぶのか？

それってなんか恥ずかしくないのだろうか？幻想郷にしたら当たり前のことなのかもしれないが、俺にとってはなんかいやだな。

「スペルカードを使うときは宣言が必要とされるから、不意打ちによる攻撃は来ないから安心して大丈夫よ。」

それはいいな。不意打ちされることがなければいきなり攻撃をくらうなんてことはないだろうし。

「それで、勝敗のつけ方だけれど、相手の体力が尽きるかすべての技が相手に攻略された場合は負けとなるわ。たとえ余力が残っていても、すべての技を攻略されたら、負けを認めなくてはならないの。」

つまり攻略すれば勝ち。ということなのだろうか？
でも人間と妖怪の体力に差はないのだろうか。俺的には妖怪の方が体力が多いような気がするけど…。

「これくらいかしらね。それと妖怪と人間じゃあ体力が違うから制限時間をつけて勝負することが多いわ。」

なるほど、制限時間があれば人間も不利にならないということか。

「説明を聞くより実際にやってみた方がいいわね。藍。相手してあげて。」

「わかりました。」

「え！？ちょ、ちよつと待って！！俺を殺す気ですか！？」

いや、殺されても文句は言えないような能力があるらしいけどさ。

「大丈夫よ。ちゃんと藍にも手加減させるし、カードも1枚だけにさせるから。」

「…。」

「藍。スペルカードは1枚で1番弱いやつでやってあげて。」

「わかりました。」

でも絶対勝てない気がする。だって俺初めてだし、相手は九尾だし。勝てる気がしない…。

「それじゃあ。2人とも報酬を決めておいたら？」

ちよー！こんなとこまで決めなくても…。無理なこと言われても無理だぜ？

なんか言っていることが無茶苦茶だが気にしないでくれ。

「それでは…私が勝ったら霧夜さんに掃除でも手伝ってもらいましょうか。」

それなら俺にもできそうだな。安心だな。

俺はどうしようか。きつと勝てないだろうし…。あのもふもふしたのを触りたい。よし！

「俺が勝ったらその尻尾を触らせてもらっていいですか!？」

「!？」

「あらあら。」

藍さんは驚いて、紫さんは楽しそうに笑っていた。

「いいでしょう。私が負けたら触らせてあげます!」

藍さんが了解してくれた。やった。

「それじゃあ。2人ともいいわね？結界張っておいたから本気でや
っていいわよ。」

だから俺を殺す気ですかい？本気とか俺を殺す気なんだろうか。

「では、霧夜さんは飛べないと思うので地上でやりましょう。」

そう言っただけで俺と藍さんは少し離れて向かい合った。

「行きます！式神『仙狐思念』！」

うわ。予想通りに宣言したよ。やっぱりここではこれが普通なのか
…。

藍さんが宣言したあとに大きい球のようなものが迫ってきて俺の近
くで破裂した。

そこから細かい弾みたいなものがまわりにばら撒かれた。

とりあえず目の前から弾が迫ってきたので横に移動してよけるが斜
めからも弾が迫ってきている。

「無理だろ！」

思わず叫んでしまった。

そして藍さんはまた大きい弾を発射している。

それも今度は発射間隔を短くしている。

…。こんなの避けれるか。
ピチューン。

「紫様。本当にこんな人間が危険な力を持っていると？」

霧夜を倒した藍が紫に話を聞きに行く。彼女は先ほどの戦いをしてこの男が危険な力を持っているとは思えなかったらしい。

「ええ。ものすごく危険よ。覚醒したら私でも止められないかもしれない。」

「なら！」

「藍。あなたが言いたいことはわかるわ。でもなぜかしたくないのよ。」

「…後悔しても知りませんよ。」

「その時はその時よ」

…。
は！

なんかものすごい数の弾を食らった記憶があるぞ。藍さんやあんなに多い弾なのに最弱の攻撃なんですか？

ってここどこだ？さっきいた場所じゃないし、紫さんの家の中だろうか。

部屋の中で横になっていたみたいで、起き上ってみると少し立ちくらみがした。

「お、起きたか。」
「？」

声のした方には藍さんが立っていた。

「まったくあれでも手加減していたんだが、そんなんでも気を失うのだな。」

「…。ごめんなさい。」

幻想郷の手加減^{こじ}ってどれだけハードなんだよ。というか手加減されてなかったら永遠に眠ることになったんじゃないのか？

一応傷もないし大したことはないようだけれど…。

「まあいい。夜ご飯ができたから呼びに来たんだ。」

「へ？もう夜？」

「ああ。お前が気を失ってからもう6時間くらいだ。」

「え…？」

「そついうわけだ。行くぞ。（少し本気をだしたから当たり前だがな）」

「はい。」

藍さんが部屋をでたのでそのあとをついて行った。

「どうぞ、召し上がれ。」

「いただきます。」

藍さんの料理をいただく。うまいうまい。というか俺ここにきてからごちそうにしかなくてないな。

お？そういえば、紫さんがいないな。

「藍さん。紫さんは？」

「紫様は今寝ています。きっと明日の昼くらいまで寝てると思います。」

どれだけ寝るんだあの人は。そんなだらけてるような人には見えなかったんだがな…。

にしてもご飯おいしいな。うまい。

「そういえば掃除手伝ってないですね。」

「明日お願いするよ。」

「そうですか。」

そのあとは食事の片づけをしたあとに寝室に案内してもらった。

…。寝ていた？たぶん気絶でいいと思うんだけどしていたせいかもしれない。眠くならない。

困ったな。別に寝なくてもあんまり困りはしないと思うが、ここは俺のいた場所じゃないから暇つぶしの物もないし。

それにこの家にいる紫さんや藍さんに迷惑をかけているわけだから、散歩しに行つて妖怪に襲われたなんてことがあつても困る。

うーん。別に庭に出るくらいなら大丈夫だよな？

というわけで庭にでてみた。

月と星がきれいに光っている。俺の住んでいるところもきれいに見えていたが、幻想郷のほうがきれいに見える気がする。

まさに幻想的？なんてな。

今は夏が少しすぎたくらいなので外の温度は暑くもないし、寒くもないといったところだろうか。
いい季節だ。

「何をしているんだ？」

「あ、藍さん。」

いつの間にか藍さんが隣に来ていた。

やはり尻尾が気になってしまい、そっちに目が行ってしまう。

「なんだ。気になるのか？」

「はい。俺のいたところにはそんな尻尾つけて歩いている人なんていませんでしたから。」

「触りたいか？」

「少し。」

「なら、また勝負でもするか？」

「遠慮しておきます。」

でも俺だけ弾を出せないというのもなんというかな。ハンデがありすぎるといつか。

俺にもあの弾みたいなものを出すことができないのだろうか。

「藍さん。俺は弾幕は出せないんですか？」

「どうだろうな。弾幕を撃つには妖力、魔力、霊力かなにか能力があればだせると思うが能力は今のところないんだろう?」

「能力はないですね。他はわからないですけど。なにか試す方法はないんですか?」

「そうだな。手をかざしてなにか出すイメージをしてみるといい。イメージが大事だからな。」

「わかりました。」

俺は空に手を向けてなにか弾がでるようなイメージをする。

「おお。光は弱いが出ているぞ弾幕が。」

「え?... 本当だ。」

少し大きさは小さいが弾みたいなのが手からでていた。

「ふむ。お前の力はどうやら魔力らしいな。明日でも魔法の森にでも籠って見たらどうだ?」

「どういうことですか?」

「魔法の森に生えている茸の効果で魔力を高める作用があるからな。霧夜は森の中でも平気だったんだろう?」

「そうです。」

藍さんなんだか俺の呼び方がどんどん変わって言うてるな。

最初は霧夜さんで次がお前。その次に呼び捨てか。別にいいけど変わりすぎだな。

「私のことも呼び捨てにしてもいいぞ?」

「はあ...。」

どうやらここにいる人たちは俺の心の中が読めるみたいなんだな...。

「まあ今日は寝ておくんだな。」

「わかりました。お休みなさい。」

「ああ。お休み。」

そのあと部屋に戻ったがやはり眠れなかった…。

4話（後書き）

弾幕勝負のルールってこれでいいのかな？

確かこんな感じだったなーって感じで書いたので間違っているところがあったら教えてください。

5 話（前書き）

この作品のヒロインは誰になるのだろうか・・・。
ではでは本編をどうぞ

5話

「昨日はよく寝れ…なかったようだな。」

「…はい」

あれからどうに寝ようと、ずっと布団の中にうずくまっていたのが結局寝ることができなかった。

理由は…まあわかってるんだけどな。

「環境が変わって寝れなかったのか？わからないでもないが、ちゃんと寝ておかないと倒れても知らんからな。」

「はい。」

今日も昨日と同じく藍さんの手料理をいただいているが、紫さんはまだ起きてないのか？

そういえばあのおっさんの能力意味がなかったな。寝なかったし、なんだつけ？予知夢？正夢？

どちらでもいいけどな。

「藍さん。紫さんは？」

「紫様はまだ寝ていると思うぞ。それと呼び捨てで構わんといったはずだが？」

「あー…そういえばそうだったな。」

にしても紫さんはいつまで寝てる気だよ。妖怪っていうのは夜に強いイメージもあったが昼の行動してるし、夜は寝ているわ。俺のイメージとはまったく違うな。

「それで、今日はどうするんだ？」

「どうするって？」

「どこかに行ったりしないのか？」

「掃除手伝わなくていいんですか？」

「ああ、そういえばそんなこともあったな。」

「言わなきゃよかったかも。でもそういうことになっていたし仕方のないことだ。」

「まあ、今回はいい。どこかに散歩でもしてきたらどうだ？まだあまり幻想郷の地形は理解できてないだろ？」

「え？なんでいいの？」

「あの時は初めてやったのだから霧夜が負けるのは当たり前だ。それなのに私がこき使うのも嫌な気がする。だから今回はいい。」

「そうか。ありがとう。でも散歩と言っても俺は地形も理解できていないからここに帰って来れるかもわからないぜ？」

「安心しろ。それくらいのことにはわかっている。お前に橙でも連れて行かせる。」

「橙？」

「少し待ってろ。」

そういつて藍は外に出て行った。

おっとまだ食事をしている途中だったんだ。藍が来るまでに食べておくしよう。

「またせたな。」

「そんなに待ってないよ。」

藍が戻ってくるころには俺は食事を終え一休みしているところだった。

つて！俺だらけすぎじゃねえか！働けよ！これだったらただお世話されているだけじゃないか！

「ほら橙。この間紫様が連れてきた男だ。」

「初めまして！橙といいます！」

ペコリと俺の前に来てお辞儀をする目の前の少女。1尻尾が2本あり猫みたいな感じがする。

俺の予想があつていれば化け猫。といった感じだろう。

「俺は綾瀬霧夜。よろしくな橙さん。」

「橙でいいよ！」

そつえばここに来てから自己紹介したのは何回目なのだろうか。どうでもいいことだけだね。

「じゃあ行ってきます。」

「ああ。どこに行くつもりかは知らんがあまり遅くなる前に帰ってこいよ。」

「はい。」

「わかりました。」

俺と橙は藍に返事をして家から出た。

「それでどこに行くの？」

「どうだな……。とりあえず里にでも。」

「わかった。飛ぶよ。」

「え?...うお!？」

すぐ隣いたはずの橙が空に上がっていた。すげー。幻想郷の人たちは全員空飛んだりワープみたいなことができるのだろうか...

「はやく来てよー。」

「おう!」

俺もそういつて空高く飛たつ...

ことができるわけなかった。

「もう!飛べないなら先に行つてよ!」

「いや、普通飛べないから。」

空に向かってジャンプしてみたが元の場所にいるときと全く変わらず普通にジャンプするだけで終わった。

なんか俺に必殺技みたいの無いのかな?そりゃあ昨日みたく手から小さい弾を撃つことができたし、他の一般人から見ると十分変わっていると思うけどさ。

紫さんみたいにワープしてみたり藍みたいに大量の弾を出してみたりしたいじゃん。橙はなにできるかしらないけど。

「じゃあ手に掴まって。」

「おう。」

橙から差し出された手を握る。おや人間の手の感触と全然変わらねえな。少し期待していたのに…。

いや、実際は手を見た時に気付いていたよ？人間の手と同じ感じがするなって。でも！でも！少しぷにぷにとしている感触があると信じていたかったんだ！

？と少し熱くなっているうちに空を飛んでいるようだ。浮遊感がすごくある。

「つて空飛んでる！？」

「飛んでるよ？」

なんてこった。俺高所恐怖症というわけでもないが高いところは少し苦手なんだ。

だから上を見ていようと思ったんだが…。

俺は今橙と手を繋いでいる状態なんだが、位置的にいうと橙が上の方を飛んで少し下に俺がいるという感じなんだが。

「？」

「…」

橙のひらひらとしたもの…まあスカートなんだが目の前でひらひらしていて正直気になる。

いや中が見えそうということはないのだが。さすがに目の前でひらひらしているのを見ているというのもなんか嫌だし。

「っ！！」

仕方ない。ここは少々不安だが目を瞑って到着するのを待つしかないか…。

「着いたよ。」

「おう…。」

正直に言っただけだった…。

飛行状態はたぶん5分くらいだったと思うけどすごく不安だった！

「じゃあ行こうか！」

「あいあいさー」

ちなみに空から降りたのは里の少し手前へんのところ。なんでも人里に直接降りるのはあまりしたくないと。なにかあるのだろうか。じゃあ…。最初はおっさんのところに行ってみるか。暇そうだし。1番の理由は里の知り合いがあの人しかいないからなんだけどね。

「よつす。」

おっさんを見つけたので声をかけてみる。見つけたといっても家にいただけだが。

あと俺の後に橙もついてきている。別にここまで来てくれなくてもいいと思うが。

「よう！いい夢見れたか？」

「ああ…今日寝てないから見てないんだよね。」

「なん…だと!？」

「ははははは！俺は未来など知らなくてもいいのだよ！」

「おのれ…！ならば今日お前が寝たとしたら…なんの夢が見たい？」
「いや得にこれというものはないが…」

「よろしい。ならば今日お前がみる夢は未来に恋人になる可能性がある女性をみる！」

「あんた最低だ…！あとあんたの能力反則だ…！」

「何言っている？俺の能力は夢を操る。たとえどんな夢もみさせることができる！」

「それって自分で見たりしないのか？」

「あくまで夢は夢だ…！！」

「おい…！」

つまりひどい未来ということか…。はぁ…余計なことされた。泣けるぜ。

あれ橙どこ行つた？

「で、何しに来たんだ？」

「ああ、俺幻想郷に住むことになったんだ。それで今友人（でいいのか？）に案内してもらってるんだが、どこ行けばいいと思う？」

「いや、それはその友人が決めるべきじゃないのか？」

「…それもそうか。おっさんのくせにまともなこと言ってる…。」

「ひどいなおい！」

「じゃ！世話になった！可愛い子が夢に出てきたら教えるよ！」

「あんた鬼か！？」

あーあー聞こえない聞こえない。

橙どこに行つたのかなー。仕方ない探すか。たぶん里にいると思うし。

「いたいた。どこ行つてたんだ？」

「あ、霧夜様。」

「まで、なんだ様って」

「え？だめなの？」

「だめだ！俺のことは呼び捨てでいい！」

「じゃあせめて霧夜さんで。」

「おう。」

「それでどうしたの？次に行くところ決めた？」

「いや、俺まだ幻想郷（こへんきょう）のことあまりわからないから橙（たち）が行きたい所を案内してくれないか？」

「うん。わかった。じゃあマヨヒガに行こう！」

マヨヒガ？

マヨヒガ。

俺はまたの名を猫天国と呼ぼうと思う。

「にゃー」

「にゃー」

「にゃーにゃー」

「マタタビほしいのはこっち来ーい！」

橙がマタタビを持って走り回っている。……。橙：お前が猫の餌になつてないか？

お前の方が噛まれている気がするの俺の気のせいかな？

「にゃー」

「お？」

俺の脚に頭をこすりつけてくる猫がいる。こいつらも全て化け猫なのだろうか。まあ可愛いからどうでもいいけど。

「よしよし。」

なでなで。おおもふもふ！。俺に懐いてきてくれるこの猫は白猫みたいだ。

尻尾は1本だな。橙みたいになん本という感じではないのね。

「にゃー」

「うお！」

急に動いて器用に俺の手をつたって頭の上に登り頭の上で丸くなった。

これって頭から下ろしたら引っかかれたりするのかな…。

まあ橙が戻って来るまでだし放っておいてもいいか…。

5 話（後書き）

今回は前回よりも短いのかな？
まあいいや。

この作品に意見感想要望があるかたは遠慮なくどうぞ

6 話（前書き）

急いで書いたので誤字があるかもしれません。
あとで誤字があったら訂正するので許してください

6話

「橙」

「うん。言いたいことはわかってるよ。」

「どうにかならないのか？こいつ……」

橙が猫たちに餌をやっている間ずっと俺の頭に張り付いているこの白猫、ハクというらしいが一向に俺の頭から離れようとしなない。

困ったものだ。藍に夕食までには帰って来いと言われているからそれまでには帰りたいがこいつも連れて行ってもいいかな？

離れる気ないみたいだし。橙に頼んで引つ張ってもらったが前足で俺の頭を掴んで離れないし、なにより猫可愛い。

「じゃあ、戻るか。連れて行ってくれ。」

「わかつた。」

ここに來たときと変わらず橙と手をつないで空を飛ぶ。いつか空を飛ぶ方法を教えてもらいたいものだ。・・・飛べる素質があるかはわからないが。

魔力があるらしいからきつとできると思うのだが…。

スペルカードだかなんだかは俺も作れるのだろうか？きつと宣言とかしなきゃいけないんだと思うけど、できればしたくないな。

でも紫さんによると宣言しなきゃいけないらしいし、まあそのおかげで不意打ちはないらしいが。

「つ雨降ってきた！」

「ん？これくらいなら大丈夫じゃないか？」

「私は濡れると式が解けちゃうから濡れたらダメなんだよね」

「…雨宿りさせてもらえるところ行こう。とりあえず森の中に降り

て見ようか。」

下を見ると丁度森（きつと俺がいた森だろうから魔法の森だな）があったのでその降りることにする。

空を飛んでいるよりは濡れないだろうしアリスさんみたいにどこかに住んでいる人？もいるかもしれない。

妖怪だった場合は逃げよう。

さて、森の中といっても雨はやはり当たってしまうのでどうしようか。

「少しくらいなら大丈夫だと思うけど…」

と困った顔をしながら言ってくる橙。いや、そんな目で見られてもね。

なにもできることは・・・上着でも貸してやるか。

「ほら。」

「わっ！」

「頭から被ってたら少しは防げるだろ？」

「う、うん…」

上着と言っても薄いのでそんなに効果はないと思うが、ないよりはましであろう。上着の下は半袖だったため寒い…。

ともあれこれで少しは雨が防げるので森の中を歩く。

ここから紫さんの家まで歩いてどれくらいかかるのだろうか？飛んでも結構時間が掛かったので大分遅くなりそうだ。

雨やまないかな…。

しばらく歩くと森の端まで来たようで今まで雨を防いでくれていた木が途切れてしまった。

雨は若干降りが弱まった感じがするがそれでも降っている。

…少し先に建物が見えるが、なんというか不気味？
なにがでるか分からないが…どうするか。

「橙。あの家？みたいな所に行ってみるか？」

「うん。あそこは香霖堂って所だったはずだよ。前紫様が行ったこともあった気がする。」

香霖堂ね…。なんかのお店だろうか？

紫さんが行っているから危険では無い。と言いたところだがあの
人だし危険なところかもしれないので一応注意しておくべきか。

とりあえず店？の前に立ってノックしてみた。普通の家だしたら
いきなり入ったら失礼だろうし。

「こんにちはー」

「ってうおい！」

橙は俺の心の中で考えていることとは逆に普通に店の中に入っ
った。いいのか？

「お邪魔します…」

とりあえず俺の橙に付いて行くことにした。これで人のことは言え
なくなっただな。

「誰もいないのか？」

「どうだろう？」

家…ではなさそうだな。品物らしきものが散らばっている。店で合

っているであろう。

俺の頭に乗っかっている猫は相変わらずしがみついている。そろそろ降りてほしいのだが…。

「おや？ 見ない顔だね。こんな店に何の用だい？」

「雨宿りさせてください。」

「雨宿りさせてください。」

いきなり声が聞こえて驚いたが俺と橙はすぐに用件を言った。それもほぼ同時に。

どうやら店の奥に店主がいたようで今まで気付かなかった。

「僕は森近霖之助。君たちは？」

「綾瀬霧夜です。外来人です。」

「橙といます！」

「外来人？ それは貴重なお客様だな。雨で冷えただろ？ 今お茶を持ってくるよ。」

「え？ ありがとうございます。」

そういつて霖之助さんはまた店の奥に入っていった。参ったなお金なんて持っていないのだが。

店の中をよく見ると本やらストーブやらパソコンなどがある…パソコン？

幻想郷にパソコンなんてものがあるのか？ しかもこれが売り物ね…。売れるのか？

他にも本などが色々とあるが勝手に見てはいけないうちやめておく。

「お待たせ。」

「ありがとうございます。」

お茶を持ってきてくれたのでお礼を言う。

「あの、ここにあるものみていいですか？」

「自由に見ていいよ。」

「どうも。」

許可をもらったので本を読んでみよう。何か面白そうなものがあるかな…。

と、その前にこの頭に乗っているハク君を下ろして…降りてくれたか。よし見てみよう。

「そういえば外の世界から来たんだよね？」

「ええ、そうですよ。」

「じゃあこれの使い方わかるかい？」

そのこれという物を指さしながら言う。

その物とはパソコンのことだった。え？

「置いてあるのに使い方が分からないんですか？」

「僕的能力は『未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力』なんだけれど使い方がわからないんだよね。」

「あら…名前と用途がわかってても使い方が分からなかったら意味ないですね。私もあんまりパソコンとかは使わなかったから詳しいことはわかりませんよ？」

「それで構わないよ。」

霖之助さんにパソコンの電源のつけ方だけでも教えてあげたかったが幻想郷には電気なんてものは無かったので電源すら入らない。困ったな。俺の少しある魔力で雷とか作れないかな…。

作れたとしてもそんなに詳しくないからどこにどれくらいの力電気を流せばいいかとかもわからないけど…。

「すみません。霖之助さん。このパソコン電気がないんで動きません。」

「電気？」

「エネルギーの一種です。そこにあるストーブを使う燃料みたいな感じですよ…たぶん。」

「そうか…残念だな。」

そういつて霖之助さんは何か考え始めたので声をかけないでおこう。俺は何か考えている時に話しかけられるのはあまり好きじゃないので。

さて、本を見せてもらおうとしてなにも見てないな…。そういえば橙は何してるんだ？

「橙？」

「…」

返事が無い。まだ雨も降っているし外に出たということはないだろう。

「にゃ〜」

お、この鳴き声はハクだな。そこにいるのか橙は。

鳴き声が聞こえた方に向かうと橙が丸くなって寝ていた。猫かお前は…。いや猫だけどさ。

雨はまだやまないし放っておいていいかな？いや、霖之助さんに毛布が布団貸してもらおう。

橙を持ち上げ、まあお姫様抱っこだが橙は軽くて持っても苦では無

かった。

「霖之助さん。」

「なんだい…おや。」

「橙が寝てしまったので布団が何か貸してもらっていいですか？」

「構わないよ。こつちに連れてきて。」

霖之助さんの後を付いて行つて橙を置いて来てまた店内に戻つてきた。

自分の腕に付けている腕時計を見ると午後4時…夕食何時からだろう。

「それは？」

俺の腕時計を見て霖之助さんは興味を示したらしく目を輝かせながら聞いてきた。

「これは腕時計と言って1日の時間がわかるんです。」

「それはすごいな見せてもらっていいかい？」

「いいですよ。」

そう言つて俺は腕時計をはずし霖之助さんに渡した。

霖之助さんが時計に夢中になっている間に店内を今度こそ見渡す。

本、傘、パソコン、コーヒークップまである。ん？

あれは剣？

気になったので剣を手にとってみた。なんというか伝説の剣！みたいな？

「それが気になるのかい？」

「ええ。なんとなくですが、なんとかの剣って感じですか？この剣。

「よく知っているね。それは草薙の剣っていうものらしい。まあ希少な品だね。」

「これも売っているんですか？」

「いや、非売品にしているよ。」

なら飾っておくな。と言いたい所だが言わないでおく。

しかし、草薙の剣ね。弾幕ですら斬れそうな気がする。かつこいい！でもこんなものがなぜ…？

「その剣はあげれないけど、隣にある剣なら持って行ってもいいよ。」

「ほえ？」

不意に霖之助さんがそんなことを言ったので変な声がでてしまった。草薙の剣の横にもう一つ剣があったようだ。草薙の剣が目に行っていて目に入ってなかったみたいだな。

「その剣は別に特別な力とかはないと思うけどほしいなら持って行ってくれて構わない。」

「えーと、ありがとうございます？」

「別にいいよ。」

「お返しと言ってはなんだけど、その時計欲しいならあげますよ？」

「え？本当かい？」

「私も剣を無料ただでもらうの気が引けるんで（本当はお金ないただけだ）。」

「そういうことなら僕も貰っておくよ。」

そういつて霖之助さんは微笑んだ。

「やっと見つけたわ。」

「!？」

「紫さんじゃないか。久しぶりだね。」

「お久しぶり、今日は私の連れを連れ戻しに来たわ。」

いきなり後ろから声が聞こえたかと思ったら紫さんだった。隙間から移動してきたのだろうが驚かさないでほしい。

「さ、帰るわよ。橙はもう連れて行つたからあとは貴方だけよ。」

「い、いつの間に…霖之助さん色々お世話になりました。」

「いや、僕も楽しかったよ、はいこれ。また来てくれ。」

「わかりました。」

霖之助さんから剣を受け取った。

足下にハクがよって来たので抱きかかえる。

「じゃあ行くわよ。」

足元に隙間ができ、また落ちて行つた。
だから落とさないでくれよ…。

7話（前書き）

前回の草薙の剣をただの剣に訂正しました。

少し早いですが7話目をどうぞ

7話

「ぐは！」

相変わらず着地には慣れないな…と思いつつ地面に尻から落ちてしまった。

着いた場所は紫さんの家の庭。

空を見るとだいぶ日も暮れてきたようで夕焼けが綺麗だった。

「霧夜。」

「はい、なんですか？」

紫さんに話しかけられ、振り向くと紫さんの姿があった。隙間から話かけられているのかとも思ったが違ったらしい。

そしてなぜだかは、わからないが紫さんの表情が硬い。なにかあったのだろうか。

いつもとは雰囲気が違うのに違和感を持ちながら紫さんが何かを言うのを待つ。

「悪いけれど…死んでもらうわ。」

「は？」

その言葉と共に空が少し紫に染まり、紫の弾が飛んできた。身を横にねじらせ、ギリギリ交わすことができた。

「ちょっとどういうことだよ！俺を殺すことになるのは能力が暴走してからじゃなかったのか！？」

「……」

「無視か！？」

こうなったら誰かに助けを求めるしか…。藍は紫さんの式って言ってたし、橙も藍さんと仲良さげだったから味方になってくれる確率は低いだろう。

「助けを待っても無駄よ。今ここに結界を張っているわ。貴方の力では逃げることはできないわ。」

「人間相手にそこまでやる必要があるのか？」

くそ、このままじゃ蜂の巣にされるぜ。どうするべきか…。霖之助さんから貰ったこの剣…使えるか？

「にゃ〜」

ハク？おお、俺には味方がいた。この白猫さんだが…。

「危ないからお前は下がってろ。」

「にゃ。」

そういうとハクは俺の後ろに下がっていった。正直言ってもいなくても変わらないなアレ。

「こうなったら自分でなんとかするしかないのか。」

「なんとかありませんけれど。」

「！？」

声が上から聞こえてきたので驚いて空を見上げると紫さんが空を飛んでいた。

幻想郷ではやはり空を飛べない方がおかしいのだろうか…。

と、どうでもいいことを考えている内に紫さんが攻撃を仕掛けてきた。紫色の弾がさつきとは比べほどにはならないほどに降ってくる。横に移動しながら考えるが俺は飛べないわけで紫さんのあの高さまで行けないわけであり、この剣じゃあ紫さんに攻撃できないな…。となると、昨日出せたあの米粒みたいな弾でなんとかするしかないのか。

「は！」

昨日と同じようにイメージし、弾を数発だしてみたが紫さんの弾1発消すのに俺は5発かかるらしい。

俺のこんな弾では紫さんに届くことすらないだろう。と、いきなり弾幕がやんだ。

「中々当たらないわね。潔く死ぬんじゃないかなかったのかしら？」

「能力が暴走もしてないのに殺されるって言うのは納得いかない。」

「あら？この前殺されても文句はないって言うてたじゃない。」

「抵抗しないとは言ってないぜ。」

「そう…。ならこれで終わりよ。『深弾幕結界 - 夢幻泡影 - 』」

紫さんの姿が消えた。隙間の中に潜ったのだろうか。不意を衝くつもりか？

「っ！」

突然後ろから衝撃が来て前に吹き飛ばされた。その衝撃で持っていた剣も前に転がってしまった。

弾幕が後ろからきた？

いや、これは後ろからだけじゃないな…全方位から来てる…！
こりゃあかわせる気がしないな…。

仕方ない。これじゃあ受けるしかないか。

体制を整えたいところだがさっきの弾幕を食らった衝撃で体制を整えることすらできない。

「くそ！」

次に来る弾幕の衝撃を覚悟しながら目を瞑った。

…ん？衝撃が来ないぞ？恐る恐る目を開けてみたが普通に弾幕が迫ってきている。

が、俺に当たる直前に消えてなくなっていく。

もしや、これが俺の能力か？

「今になって能力が発動したのかしら？（いい感じね）」

紫さんがなんか言っている。てかどこにいるんだよ。

能力ね…なんていう名前だ？打ち消す能力？

とは言っても打ち消すだけじゃ勝てるわけがない。今これに時間制限があると思えないし…。

パチパチパチ…

へ？

俺の手がなぜかパチパチ音が聞こえるんだけど…。

パチパチ…拍手？いやいや俺そんなことしてないしな…

！

光った！？俺の手のひらでなんか光ったぞ！？まさか…雷か？

でもこの程度なら静電気くらいな感じしかないが…。これも弾幕として飛ばせるのか？

やるしかない！

手を前に出して電撃が手からでる感じをイメージすると手から電撃が走る。

「これは…すごいな。」

手をかざしている間はずっと電撃を放出していられるらしい。これを周り一面に放出したら結界破れるのではないだろうか。

そう思ったら即実行。俺はその場で手をかざしたまま1回転した。

そうしたら紫色に染まっていた空の色が元の夕暮れに戻った。

「ふう…」

つて一息ついている場合じゃない！紫さんがまだなんかしてくるかも「霧夜！後ろ！！」へ？

紫さんの声が聞こえた。後ろ？

畏か？とも思ってたが後ろを向くとそこには…

「ハク？」

先ほどまではどこかにいそうな感じの白猫だったハクが変化していた。

爪が小さく可愛かったものが鉤爪のようになっていて、口から牙が生えていた。

なにより驚いたのが、俺に飛びかかってきている。しかも、もう鉤爪のようなものを振りかぶっている。

咄嗟に左手で身を守るが左手に爪で挟られてしまった。

「っ！」

腕の痛みに耐えながらハクの方を見るとさらに俺の噛みつきうとしている。

自然と後ろに倒れてしまう。

「霧夜！！」

と後ろから紫さんが俺を支えながらハクを俺の時の数倍の弾幕で吹き飛ばした。

…さっきのは全然本気じゃなかったんですね。

「…紫さん俺を殺すつもりじゃなかったんですか？」

「後で説明するわ。藍！」

な、なんか意識が朦朧としてきた…なんでだ？

「ちょ、ちょっと！？霧夜！？まさか…毒でもあったのかしら？仕方ない…」

そこで俺の意識は途絶えた。

7 話（後書き）

オリキャラ設定

名前 ハク？

種族 化け猫？

能力 妖気を隠す程度の能力

特徴 魔力を感じると襲い掛かってくる。一般人にはなにも害はないが魔力がある人は注意。

8話（前書き）

今回も短いけど・・・ゆっくりしていったね！

.....
?

8
話

ん？なんか夢見てたな。なにがあつたか全く覚えてないけどなんか見ていた気がする。

まあ夢のことは置いといて、俺はどうなつたんだ？

俺は確かあの後ハクに斬られた…あの場合は引つ搔かれたか？まあどっちでもいいがその後には確か気を失つて…。

今はどういう状況？

なぜか体がだるくて体を動かすことすら嫌になる。

だが、今の俺の状況も知っておきたいのでだるい体を動かすことにしよう。紫さんの行動とかも気になるし…って。

動けない。

アレ？今気付いたけれどなんか拘束されているような感じがする…。手もうまく動かせないし。

どういうことだろうか。顔はまあ動かせるから周りを見て…

ゆゆゆゆゆゆゆ、ゆ！！？

え、何？ちよつと待って？

え？なんでこんな近くに紫さんの顔が！？

…もしかして俺抱き枕にされてるの？

こ、これは逃げるしかない。最後に紫さんに助けられたとはいえ、最初は命狙われていたんだ。

何されるかはわからないし、とりあえず距離を取って…取って…。

無理だ！？

どういうことだ！？俺が今だせる最大の力で紫さんの腕から離れよ

うとしてもビクともしないんですけど!?

今俺が弱っているからなのだろうか。と言えども、女性の紫さんの力に負けるってなんだかへこむな・・・。

もしかして紫さんは妖怪だった!みたいな?

ああ・・・多分そうだ。じゃなきゃ九尾なんて従えていなさそうだし・・・。

諦めよう。きつとここから抜け出したとしてもあの隙間に吸い込まれて連れ戻されそうだし、寝よう。

紫さんの近くにいとると温かいし、なんかいい匂いがする・・・。

・・・よく寝た。

さて、そろそろ紫さんも起きて「あら起きたの?」たね。

「おはよーございまふ?」

「うーん・・・薬の効きすぎかしら?まだ寝たりないようね。」

あれ?呂律が回らない?おかしいな。意識ははっきりしていると思うんだけどな・・・

「食事を取れば治るかしら?おいでなさいな。」

「あい・・・」

立ち上がるが少しよろけてしまう。本当にどうしたんだ俺・・・。

「あらあら、本当に効きすぎね。永琳にもう少し薬の量を減らしてもらおうように言っておけばよかったかしら?」

「知りませんよ…。」

というより永琳さんって誰？薬と言っていたから俺の傷の手当でもしてくれた人だろうか。

「ほら？まっで。」

紫さんが差し出した手に素直に？まった。その後は昨日食事を食べた場所に移動した。

「おはようございます紫様。それと…お前はなんという格好をしているんだ？」

ん？なんか変か？

「少し待っている。」

そういつて藍はどこかへと向かった。どうしたんだ？

「座って待っていきましょうか。」

紫さんがそういうのでとりあえず椅子に座って待っていることにした。

「ほら、そんな半袖1枚じゃ寒いだろ？」

「わ！」

藍が持ってきてくれたのは半纏のようだ。にしてもいきなり頭の上に落とさなくてもいいじゃないか。

…もふもふしてて気持ちいいなこれ。

って和んでる場合でもないような気がするけど。

「紫さんきの「とりあえず食べてからにしましょう?」「…はい。」

なぜ紫さんに従ってしまっただ?…謎だ。

まあ昨日みたいな変な感じはしないし多分大丈夫だろう。

「それで、昨日はどういうことなんですか?」

「昨日?ずっと寝てたじゃない。」

はえ?

「貴方が倒れたのは3日前よ。」

「なんだって!?!」

「ずっと寝てたんだからわからなくても無理ないわ。」

まさかそんなに寝ているとは…いつもより腹が減っている気がしたのは気のせいじゃなかったのか…。

「それはともかく、俺をなんで殺そうとしたんだ?」

「殺そうとはしてないわよ。…やっても1歩手前までね。」

「おいおいおい…。死んでもらうわとか言ってたじゃないですか…。」

「あれは演技よ。演技。」

「なんでそんなことを…」

「能力を覚醒してもらったためよ。それで能力を制御できるようになったらよかったんだけど…魔法の方が目覚めてしまったのね。」

「死にそうになったら能力が覚醒すると？」

「ええ。稀にそういうことが起きるのだけれど、貴方は能力じゃなくて魔法の方が目覚めてしまった。」

なんだよそれ。魔法が目覚めたら悪いみたいな感じは…。

「もう少しやったら能力も目覚めたかもしれないのに…。あの化け猫のせいで…」

「化け猫？ハクのことですか？」

「ええ。あれはただの猫じゃなかったみたいね。もう追い払ったけれど。」

「ごめんなさい。」

「いいわ。被害にあったのは貴方1人ですし、毒が少し厄介でしたが。」

毒！？

まさかそれでこんなにフラフラしたりするの？

「まあそのことは置いて。どうします？」

「何がですか？」

「貴方が望むなら能力が覚醒するまで私が相手になりますけど？」

これはどう言ったほうがいいのかだろうか。

紫さんには本当に迷惑ばかりかけているしこれ以上俺の所為で迷惑はかけたくはないが、能力が覚醒していないこの不安定な時が1番迷惑をかけているのではないだろうか。

こうなったら…

「紫さん、お願いします！」

しかし、この時の選択があのだ獄のような日々に変わるなんてことはこの時の俺には考えもしていなかった。

8話（後書き）

いい匂い？

それって少女し（ピチューン

？話（前書き）

あけまして～おめでとう？

なんと？話にチルノだせました！狙ったわけではないのだが…

？話

3ヶ月経った。

紫さんの修行は修行とは言わないと思う。

あれはただの虐めだ。どういう流れでやっていたか。

その過程は思い出したくもないのだが、ここにいるみんなにこの過酷さを知ってもらう為に思い出して行くとしよう。

…みんなって誰だ？

とそんなことはどうでもいいか。

修行と言っても、ボコボコにされる（死ぬ1歩手前？）。なにかわからない怪しい薬を飲む。

傷が治る。ボコボコにされる。以下略。

と、修行と言うか虐め。よく俺死ななかったな。

そういえば、能力が覚醒したのは虐められ…おっと。修行始めてから3日くらいだった。

能力名は『次元に引きずり込む程度の能力』。うん、何が危険なんだ？って紫さんに聞いたら吹き飛ばされたよ（文字通り）。

この能力はちからどういうことに使えるかという、まず空間に穴を開ける。

穴の大きさは自分で決めれるが、コントロールが難しく穴と言っても指1本通るか通らないかくらいの大きさだが。

それで、その穴に俺が指定した物が引きずり込まれる。

とこんな感じだ。

なにが危険かと後々聞かされたのだが、穴に吸い込みきれるものだったら問題ないが能力ちからのコントロールができず、宇宙にある月や星、色々な物を吸い寄せてしまうとする。もちろんこの穴にそんな物をすべて引きずり込むなんて無理だからそのまま地球に落ちる。

世界崩壊のお知らせ。

らしい。確かにこの力で穴に全てを引きずり込むとしたら…できて
ビー玉くらいかな？

まあ吸い込む力はかなり強力なので色々と使えるだろう。
面白そうなことも色々ありそうだし。

とりあえず無事にコントロールできるようになったし、元の世界に
戻ろうかと思っただけだ！

俺が幻想郷^{こゝろ}に来てから約3ヶ月。来る前は大体11月の前半だった
わけだが、俺高校3年生なんです。

つまり今は2月くらいなわけで、今戻ったとしても高校はまず3ヶ
月無断欠勤しているわけでその間に大事なテストとかあっただろう。
ちなみに俺は頭は正直言っただけかなり悪い方で順位は逆から数えた方
が早いという悲しい成績であつたりして…つまり、何が言いたいか
と言つと…

多分退学になつてゐるだろう！

全く自慢できないぞこれは…。

折角高卒で就職が何かしようと思つていたがもう無理だろう。

幻想郷^{こゝろ}にいた方が多分働くのは楽…言い方が悪かつたな。就職は楽
だろう。元の世界は就職難だつて言つていたし中卒となつてしまつ
た俺を雇ってくれるところもないだろうしな。

と、紫さんにこのことを言つたところ働かなくてもここにいてもい
いと言われたがさすがにそれは悪いので人里に行つて何かしようと思
う。

ああ、そうだ。

他にも話たいことがあるからこれらの話は一旦置いておく。

実は修行事態は1ヶ月で終わつてゐるんだ。残りの2ヶ月は何して
いたかと言つと、この間霖之助さんからもらった剣があつたろ？

剣を買つたはいいが、使い方を全く知らないで、ずっと放置して
いたのだが紫さんに…えーと確か白玉楼の庭師さん？

正しく言つと西行寺家の庭師さんになるのか？

どっちでもいいが、その庭師さんの魂魄妖夢さんのところに連れて行かれ剣の使い方を教えてもらえといきなり言われた。

あの時のことは今でも鮮明に思い出せるね。いきなり隙間に吸い込まれ着いた所は綺麗な庭とかなり大きい屋敷。

屋敷にいたのは人魂みたいなか白いの（後に半霊と教えられた）を纏わせている少女とピンク色の髪の毛で紫さんと同じくらいの背の女性がいた。

そのあとに紫さんが来てお互いに自己紹介をして、ピンクの彼女は西行寺幽々子さんと言う人：じゃなかった幽霊だった。

それから妖夢さんに剣の振り方などを教えてもらった。

あとと思うが紫さんと幽々子さんはかなり仲が良いと思う。紫さんの友人はあまり見たことがないので貴重だった。

ちなみに剣の扱い方を習っていた時間も能力と同じく1ヶ月だ。

残りの1ヶ月は藍のお手伝いとかしてたら過ぎてしまった。

料理の腕は元の世界にいた時よりもかなり上達したと思う。藍料理うますぎだつて…。

それと幻想郷のことについても色々と教えてもらった。

「霧夜。何してるんだ？」

「藍：別に何も。前までのことを思い出してただけ。」

「そうか：今日はどこか出かけるのか？」

「ああ、少し散歩に：人里でも行っ見て見るわ。」

「わかった。遅くなってもいいが、飯は無しだからな？」

「了解です。」

「それと忘れ物だ。」

そういつて藍は俺に剣を渡してきた。あ：忘れてた。

「ありがとう。藍。」

「気にするな。気を付けて行けよ？」
「わかってる。」

家を出ようとしていた俺に藍はそういつて部屋の中に戻っていった。今はさっき言ったように2月くらいなので雪が積もっている。…俺こんな量の雪初めて見た。

外は基本的にマイナス気温くらいだと思うが、俺には関係ない。火の魔法を使って体に薄く纏わさせておけば暖かいまま。

足の方に風の魔法で空を飛ぶ。(とは言っても空高く行くと怖いので飛んで10cmくらいだが)

飛んだ方が歩くより5倍程速いので移動はいつも空を飛ぶようになった。

さて、人里はいいが1人で行くのは初めてなのでいつもとは違うルートで行ってみるとしよう。

確か湖があるんだっけ？行って見よう！

多分今の俺の力だったらそこにどんな奴がいようが逃げ切れるはずだから。…能力を無効化する程度の能力とか持つてる奴だったら逃げられないけど…。

霧の濃いところだな…。湖があるのはわかるが、それ以外は全くわからない。

ここどうなってるの？

ま、いいか。湖は霧が濃いと。

それだけわかっただけでじゅう「あんた、あたいのナワバリで何してんの？」おや？

声のした方を向くとそこには……

氷？の羽を持った女の子がいた。妖精さんかいな？

「何もしてない。邪魔ならすぐに出ていくが？」

「あんた：少しは驚きなさいよ、目の前に強敵がいるのよ？」

「別に戦う気はないのだが：。」

「いいから少し付き合いなさい！」

「えー。」

そう言うのと妖精さん（仮）は氷を飛ばしてきた。氷精さんか？少し身を横に移動させ氷をかわす。

「凍符『パーフェクトフリーズ』！」

スペルカード宣言か。確か時間たつのを待ってもいいはずだったな。避ける避ける。凍った。動いた。

「ちょ！ちょっと！なんで攻撃してこないのよ！」

「俺は女の子を傷つける趣味はないので。」

「んな！？」

だつてね？あんな小さな氷精さんを傷つける何てことは俺にはできない。

可愛いすぎて防御しかできない…！

「っ！わかったわよ！さっさとどっか行きなさい！」

どうやらもう弾幕勝負をする気はなくなってくれたらしい。

「おう。一つ聞くんが名前前は？」

「……チルノ。」

「そうか。俺は綾瀬霧夜、人間だ。俺と友達にならないか？」

「……いやだ。」

「そりゃ残念。じゃあな。」

俺は人里に向かって飛ぼうとし「や、やっぱりなってあげてもいいわよ!」おや?

「そうか。じゃあまたな。」

「う、うん……」

そう言っただ俺は人里のおっさん(まだ名前教えてくれない)のところに向かう。

「おっさん?」

いつも通りおっさんのお店に来たのだが、何やら女性の声が聞こえる…。

「まさか、おっさんの彼女?」

「違う!」

「違う!」

何となく声に出したことに店の中にいる2人?が反応した。

？話（後書き）

戦闘短か！！

10話（前書き）

疑問に思ったのだが咲夜さんって何の力を使って空を飛んでいるの
だろうか…。

謎だ…

10話

ふざけて言ってみたがまさか家に入ってもいないので反応されとは思わなかったな…。

と、店の外まで声が聞こえる程なにを言い合っているのだろうか？
おっさんの所に女性が来るなんてくがあるとは…誰なんだろうか
とりあえず、家の前で考えても仕方ないので店の中に入って…見ても大丈夫か？

折角ここまで来たんだし行ってみてもいいよね？

いつものように店の中に行くのと店の前には、ぼ、帽子…なのか？
みたいなものを頭に乘せて青髪…いや白？の長髪の女性がいた。
言わなくてもいいと思うがかなりの美人さんである。

「おっさん？なんとなく来てみたが邪魔か？」

「おお！霧夜！いいところに来た！！この先生をどうにかしてくれ
！」

「どうにかって…ども綾瀬霧夜です。あなたは？」

「うん？私は上白沢 慧音。寺子屋の教師をやっている。」

先生ね…。ところで、寺子屋ってどこ？

「ところで、お前見ない顔だな。どこに住んでいるんだ？」

「あー私は外来人なんです。今住んで居る所は八雲家ですね。居候？」

「あの妖怪の所か…。大丈夫なのか？」

「ええ。毎日良くしてもらってます。」

「で？おっさんどういことなんだ？」

「ああ、この先生が俺に先生になれって言っただ！！」

は…？

このおっさんが先生？

少年想像中…

「い、いいんじゃないか？」

「なんだってー！！」

「と、いうのは冗談で。慧音さん？なんでこの人に？」

「もちろん理由はある。外来人である翔真しょうまに外の歴史のことを私の生徒に教えてもらいたいんだ。」

翔真と言う名前だったのか…初めて知った…。

はて、歴史ね…。慧音さんは幻想郷の人だから先生と言っても外のこととはあんまり詳しくないのだろうか。

「だから俺は勉強が大っ嫌いなんだよ！」

「いいではないか！お前が勉強するわけではないのだから！」

「というか外の歴史なんて忘れたわ！」

「嘘をつくな！一昨日里の大人たちに外のことを詳しく教えている所を見ていたんだぞ！」

「そりゃあ外の話くらいできるし…」

「う…。なあ…頼むよ最近の子供達も増えて私だけだと色々辛いんだ…。」

「うぐ！」

慧音先生の上目使い攻撃！

おっさ…翔真の意思は揺らいだ！

「歴史以外の教科でもいいから…な？頼むよ…」

「…わかったよ！やってやろうじゃないの！ただ俺の教え方が変でも責任は取らないぜ？」

「そうか！やってくれるか！安心しろ！教え方なら私が手取り足取り教えてやるからな！」

「はあ…面倒なこと引き受けちまったぜ。そういうわけだから霧夜しばらく留守にする時が多くなるかもしれないわ。」

「あ、ああ…」

そついいながらおつさ…翔真は慧音さんとどこかへ…多分寺子屋という所に向かった。

暇になるな…。人里に行く1番の用事はおっさんの…もうおっさんでいいや。所だったし行く場所なんて他にないな…。

藍が教えてくれた場所でも行ってみるか…。

迷いの竹林。その名の通り迷いやすい竹林。

迷って夕飯に間に合わなかった嫌なので違う場所だな。

太陽の…なんだっけ？墓だっけ？

そこにはかなり強い妖怪いるいて花を傷つけたら蜂の巣にされるだとか…。ここにも行きたくないな…。

魔法の森。俺には害はないが（本当に害はないのだろうか…）他の人は茸の胞子にやられてしまうと。

自身の魔力は少しずつ上がるらしいが1人で行くしかないんだよね…。他にはなんかないかな？

紅魔館。吸血鬼姉妹とメイドさんが住んでいる屋敷。運命を操る吸血鬼とありとあらゆるものを破壊する吸血鬼と時を操るメイドさん

という最強クラスの人と妖怪が住んで居る所。
中に入ったら間違いなく生きて帰れなさそうな所。論外。

冥界。幽霊さんがいっぱい居る所。幽々子さんと妖夢さんがいる。
昨日紫さんに行ったから今日はお邪魔しない方がいい気がする。

妖怪の山。その名の通り妖怪がたくさんいるところ。

俺はまだ食べられたくなので行かない。確か天狗やらなんやら住んで居るらしいが…。

適当に空飛んでるかー。元の世界にいた時は空を飛ぶなんてことは飛行機にでも乗らない限りできなかったし、上からの景色は綺麗だろうしな。

そう思つて空に飛びあがり空中に浮遊する。高さ100メートルくらいかな？

こんな感覚わからないって。

「よつと風符。」

暇なので今まで考えついているスペルカードのことについてでも考えてみる。

俺のスペルカードはほとんどが逃げスペルだ。

どういふことかというと、全て相手を倒すものではなくただ自分が逃げる時間を稼ぐものしかない。

ちなみに今発動したのは自分の魔力を少し解放。魔力を風に変換し自身をどこかに風で飛ばすもの。要するに無駄スペル。

まあ攻撃用カードはあるがアレは強力すぎて使わない方がいい気がするのだが…。

今どこに向かっているんだ？太陽の墓とかだったら洒落にらんぞ？ 畑です。

うーん。木しか見えないな…。森か？山か？どちらでもいいが好戦的な奴はこないでほしい。

「あやややや。」

「ん？」

そんなことを願っていたら誰か来てしまったらしい。空を飛べる人間なんてほとんどいないらしいので95%くらいの確率で妖怪であろう。

声のした方を向くと羽をはやした少女が…空飛ぶならスカートやめたほうがいいと思いますよ？

「こんな所に人間だなんて珍しいですね。ここは妖怪の山の近くですからあまり近付かない方がいいですよ？」

なんてことだ。ここら辺は妖怪の山の近くだったらしい。この少女は意外に親切な妖怪さんなのだろうか？

「あーすぐ離れるんで…攻撃しないでほしいかなって。」

無駄な気もするが一応行つて見る。

「いやですねー。私はあなたに攻撃する気なんてありませんよー。」

目の前の少女はにこやかに言っているが…油断させておいて襲うなんてこともあるかもしれない。

「私は射命丸文。この幻想郷で新聞記者をやっています！」

「へ…？新聞記者さん？」

「はい！文文。新聞というものを書いています！」

…新聞記者ね。よく見ると手には手帳を持っている。あれに色々なことをメモしているのだろうか。

「ところであなたの名前を伺ってもよろしいですか？」

「あ、ああ。綾瀬霧夜。外人だ。」

「外人人なんですか！？驚きです。今回あなたのことを記事にしてもよろしいでしょうか？」

「…その新聞くれるならいいが…」

新聞と言っても妖怪だけのものだろうと思いつてみる。

「喜んで！今持っているこの新聞もどうですか？」

あっさりくれました。暇潰しになると思いもらっておく。

「では、早速取材させてもら「ってもいいが妖怪に襲われたくないからここから離れていいか？」はい！どうぞ！」

許可をもらったので場所を移動する。

「ではまず名前は聞いたので能力があつたら教えてください。」

「魔法を使う程度の能力だ。と言っても見習いだけど。」

次元に引きずり込む程度の能力は言わない方がいい気がするな。世間に公開されるわけだし。

「ふむ…。魔法使いですか。今住んで居る場所は？」

「八雲家です。」

「あの妖怪の賢者の家ですか！彼女との関係は？」

「紫さん？…仲のいい友人かな。」

「そうですか…。では……」

取材の時間はそれから1時間ほど続いた。

「ご協力ありがとうございましたー！」

と行って文さんは飛んで行った。

いい時間潰しにはなったな。

そろそろ戻るとしよう。

10話（後書き）

なにかやりたかったのか。

と言われると少し困るがおっさん教師化と文との接触？
ほのぼのと行こうぜ？

慧音さんのしゃべりかたはこんな感じでよかったのかは微妙だな…。

恋愛タグはいつになったら詐欺ではなくなるのだろう…笑

11話（前書き）

今回の話もほとんど無駄かな…？

いつも通り弾幕ごっこもありません

11話

目が覚めると抱きしめられている…いや、抱き枕にされている感じがした。

…これはもうパターンが読めた。

きつと、いや絶対と言ってもいいだろう多分紫さんだ。

修行の時の癖なのか今でもこういう状況になっている。

修行の時に紫さんにボコボコにされて気を失った時は紫さんが自室に俺を連れて行き寝ていたという…。俺はそんな記憶はないのだから。

自室にいたはずなんだけどな……。

とはいえ女の人の部屋に（俺の部屋かもしれないが）ずっと俺がいるのも色々とまずいので腕から脱出しようともがく。

やはり女性とはいえ妖怪なので力は強い。

負けるものか…！

「橙…動くなあ…」

！？

待て。

紫さんが俺のことを呼ぶことがあっても橙のことを呼ぶだろうか？
そして今気付いたが俺の視界の奥にもふもふとしたモノが見える気がする…。

「藍？」

「…霧夜？」

名前を呼ぶと丁度目を開けた藍と目があった。

「な！？ななななななななななで霧夜がここに！！？」

「し、知らんぞ？というか俺は間違えて藍の部屋に入ってしまったのか？」

「そ、そうだ！仕方ないからこうして…同じ布団にいるんだ！」

ほ、本当なのだろうか？

だとしたら申し訳ないが昨日夜に起きた覚えもない。これは完璧に寝ぼけていたらしい。

「藍？部屋にいないと思ったら何して…」

「…」

「…」

間の悪いことに紫さんがやってきて部屋の戸を開けて入ってきた。
ん？部屋にいない？

「藍…もしかして、とうとう霧夜に手を出したの！？」

「ち、違います！断じて違います！霧夜のこととはなんとも思っ
てな
くて…」

「じゃあ早く離れたら？」

「あ。」

藍は俺を未だに抱きしめたままで、紫さんから見たら藍が俺を離さないようにしているようにも見えてもおかしくはない。

「っ！」

少し赤くなりながら藍は俺を離し、そして立ち上がった。

赤くなりながらも俺を離す時は優しく離してくれた。元の世界で話を聞いたことがあるが、女の人は恥ずかしいところを他の人に見られると（つまり今のような状況だろうか？）つついっ相手に暴力を振るっいまうてことがあると友人に聞いたことがあったが藍は違ったらしい。

八雲家はみんな優しい人ばかりだな…。

「早くお昼ご飯作ってね。」

「へ？お昼？」

藍が呆けた声を出して聞き返した。俺も聞こうかと思ったが藍がそれより先に質問した。

「？何言ってるのよ。もう昼よ？さっさと起きなさい。」

「は、はい！」

そう言って藍は急いで部屋を出て行った。

…寝ぼけていたのは藍だったのか。おもしろい一面を見たな。

「霧夜。今日は藍の部屋に案内しましょうか？」

「結構です。」

「遠慮しなくてもいいのよ。」

俺の言葉は何も聞いていないかのように紫さんは隙間を展開させどこかへ行ってしまった。

うー。別に俺は藍と何かあったわけじゃないってのに…。

「霧夜！今日の朝のことは忘れるんだ！わかったな！？」

「…わかったからそんなに顔を近付けるな。」

「っ！すまない。」

そう言つて藍は離れる。ご飯を食べる時くらいゆっくりとさせておくれ。

「霧夜。今日はどこかに行く予定はあるのか？」

「特にはないが、俺に頼みたいことでもあるのか？」

「いやな。昨日里に行つて戻る途中に氷の妖精がお前のことを呼んでいたから気になつてな。」

「それってチルノか。どうかしたのかな…。今日は予定無かつたし、行つて見るよ。」

「ああ。わかった。」

というわけでご飯を食べ終わった後に湖に行くことにした。

「チルノー？」

家からでて全速力で湖に向かった。今日も霧が深くて前が見えづらい状態だ。

藍から教えてもらったがチルノはこの場所にいることが多いらしいのでとりあえずここに来てみたわけだがチルノの姿が見当たらない。折角来たというのに会いに来た人物がいらないとはなんて悲しいことなのだろうか。

とりあえずふわふわと空を低空飛行していよう。その内誰か来るだろう。

襲ってくるような妖怪だったら即逃げればいいし。

「あ、あのー。」

「ん？」

しばらくふわふわと空中を漂っていると声をかけられた。

緑色の髪でチルノと同じくらいの大きさで同じような恰好をしている。

「何か用か？」

「え、えーとその私くらいの身長で青い髪をした妖精見ませんでしたか？」

青い髪のもで彼女と同じくらいの妖精なんてチルノしか思いつかない。

「それってチルノのこと？」

「はい！それで「あ！大ちゃん見つけた！」いました。」

そう言つて緑の妖精はチルノの近くまで行つた。

「もう！どこに行つてたの！心配したでしょ！」

「蛙をからかいに行つてたの！くそう…もう少しで完全に凍らせれたのに…。」

何か知らんがチルノは悔しがっている。蛙を凍らせるとか酷いことするな…。

「あ、霧夜もいたんだ。」

「今更かよ。」

「この子あたいの友達の大ちゃん。」

「あ、えと大妖精です。」

「ああ。俺は綾瀬霧夜だ。」

チルノの隣にいる大妖精さんがぺこぺこしてる。別にそんな風にしなくてもいいのだが…。

「そういえば、昨日俺のこと呼んでたのか？」

「うん。蛙凍らせに一緒に行こうと思つてたのよ。」

「俺はそんな酷いことしには行かないからな？」

「もう！ノリ悪いわね！」

一緒に人殺しに行こう？と言っているのとある意味同じだと思うが…？

「2人とも仲良いね。」

2人で話していると大妖精さんが言った。そうだろうか。昨日会ったばかりだが、そう見えるのだろうか。

「そうか？」

「うん。」

「あたいとこいつが？うーん…。そうかなあー」

「そう言っても昨日会ったばかりなんだがな。」

「そうなの？」

大妖精さんが驚いたように言った。驚かれるようなくらい仲が良かったように見えたらしい。

「それじゃ、あたい達は帰るわね。」

「おう。じゃあな。」

「またお会いしましょう。」

大妖精（さん付けしなくていいと言われた）とチルノは自分の家に帰るらしい…妖精に家はあるのだろうか。

あれからずっと大妖精とチルノと話していた。時間になると2時間くらいだろうか。

そういえば妖精の友達が2…匹？

匹でいいのか？…とりあえず2人増えた。

幻想郷に来てから友人が結構増えたな！。

幻想郷に来てから毎日がこんな感じだ。毎日が平和で充実している。ただ紫さん達に迷惑をずっとかけるわけにもいかない。いつかは何か恩を返したいな…。

11話（後書き）

次はできれば紅魔館編か地霊殿に行ってみたい。

あくまで願望だが。

12話（前書き）

急展開になってしまったが…。
最初の予定通りなのはいいが…

12話

どうしてこうなった？

俺が何かした。それならまだよかった。自分でやったことならば解決が考えれば浮かぶかもしれないからだ。
くそ！誰かこの状況をどうにかしてくれ！！

… 4時間前。

朝目が覚めると俺の傍には誰もいなかった。

いや、まあそれが普通なんだけれどなぜか紫さんが藍がいることを期待してしまっただけ。俺の変態。

どうやらいつもより早く起きたらしいので、藍が朝食を作るのを手伝うことにしよう。

一応居候？みたいな感じだし、いつも藍に任せてばかりではいけない

いと思ったからだ。

そう思いながら台所に行くとそこにはいつも通り藍がいた。

「藍おはよー」

いつもの様に挨拶をする。

「誰だ？お前…。」

「へ？」

な、なんだ？冗談なのか？

「ら、藍…？冗談だよな？」

「なぜ、私の名前を知っている？そしてここには結界が張っていたはず…。どうやってここに来た？」

どうやら冗談ではないようだ…。

と思っていると藍から殺気が放たれた。っ！攻撃してくるつもりか！
藍は俺に向かって弾幕を飛ばしてきたので右に移動して避ける。

「藍？本当に俺がわからないのか？」

「お前など、知らないと言っているだろう？」

「くっ！」

藍の弾幕の量が激しくなってきた。

このまま避けているだけではいずれやられてしまうので、藍の弾幕で壊れた壁から外にでて空を飛んで逃げた。

とりあえず、人里に行こう。あそこなら一応安全なはずだ…。

なんとか無事に人里の到着することができた。

もしかしたら藍だけが俺のことをわからなくなっている可能性があるるので、おっちゃんの所に向かうことにしよう。

にしても、なぜ藍は俺のことがわからなくなっているのだろうか。

魔法や妖術…または誰かの能力で記憶を弄られたのだろうか…。だとしたらそれをやった奴は相当強力な奴なんだろうな。

慌てて家を出てしまったので剣を持つてくるのを忘れてしまったようだ。まあ魔法で作ればいいのだが…。

お！丁度おっちゃんが俺の前から少し離れたところからこっちに向かってきている。

おっちゃんは俺が話しかけなくても、俺を見かけたらいつも話しかけてくれるので横を通った時に話しかけてくれれば俺の記憶がある話にかけてくれないければ…俺のことを忘れていたのである。

そして、おっちゃんがいつの間にか俺の目の前にいた。が横を通り過ぎ去ってしまった。

…やはりおっちゃんも俺のことを覚えていない？

「おっさん！」

「んあ？なんだ兄ちゃん？」

「…。すまない。人違いだった。」

「そうか。」

そう言っておっちゃんは何処かへ行った。

…。冥界に行つて見よう。もしかしたら、ということがあるかもしれないから…。

冥界へ向かう階段を飛びながら登る。幻想郷から冥界までは結構距離があるので時間がかかる。

と、大体半分くらい登ったくらいで誰かが近付いてくる気配がしたので、その場に止まると目の前から妖夢さんが俺に向かって白楼剣を突き付け来た。

「何者!？」

やはり…妖夢さんも俺のことは覚えてくれないらしい。

ただ、冥界に生きている人間が行こうとしているだけで剣を突き付けないでほしい…。

「やっぱり俺のことは覚えてくれないんですね…。」

「何言っているのかわかりませんが…貴方みたいな人は知りません!」

「そうか…。」

俺は妖夢さんに向かって炎を放出した。弾幕ではない。ただの炎だ。

「っ!」

即座に俺の攻撃に反応して妖夢さんは俺から距離を取る。

「爆発『火土』」

妖夢さんの前に火と土を掛け合わせてできる魔法を放つ。

これは俺が指定した場所に土の塊を魔法で出してそれを炎で打ち抜くスペルカード。

そして炎で打ち抜かれた土は破裂し、あたりに飛び散る。

「!？」

距離を取っていたといえ、魔法に距離はあんまり関係ない。

なぜなら、距離が遠いならそれだけの距離まで魔法を放てばいいだけなのだから…。

さて、今のうちに逃げさせてもらおうか。これも攻撃魔法とはいえ、妖夢さん相手なら時間稼ぎにしかならないだろうし。

足に風の魔法を集中させ冥界とは逆の方向へ逃げる。

「はあ…。」

俺は湖の近くで溜息を付いていた。

誰も俺のことを覚えていない。悲しいな…。

「ちよつと霧夜^{きりよ}ここで溜息すると不幸が逃げるわよ？」

「幸せの間違いじゃ…待て。お前俺の名前呼んだか？」

「？呼んだらなんか問題あるの？」

俺の目の前でキラキラとした青い羽で飛んでいるチルノは俺のことを覚えてくれたのか？。

「チルノ？本当に俺のことを覚えているの…か？」

「しつこいわねー。昨日もあつたんだから、覚えているに決まっているじゃない。」

「そうか…。よかった。」

「本当にどうしたのよ？」

「ああ、実はな…」

俺はチルノに今までのことを説明する。何か知っているといいのだが…。

「つまり、みんなあんたの記憶を失くしているってこと？」

「そういうこと。記憶を操作できる妖怪とか知らないか？」

「知らないわよ。でも、本当にみんな記憶を失ってるの？」

「そうだってば…。」

「うーむ。信じられない…。」

確かにこんなに広範囲に能力を拡散できる奴がいるとは信じがたいかもしれないが、事実なんですよ。

でも、なんでチルノは俺のことを覚えているんだ？

疑問だが…覚えてくれている妖精がいてよかった。

「信じられなくてもいいけどさ…。どこか怪しい所あるか？」

「わかんないわよ…。とりあえず、出会った奴を片っ端からやつつけていけばなんとかなるって！」

前途多難だなあ…。

13話（前書き）

作者。 宿泊学習という最悪な行事のため、感想を書いてもらっても金曜の夜まで返せないという状況に…。
これが投稿されている時にはもういないの。

まあ感想なんてこないけどね！

13話

チルノの曰く、怪しそうな奴らを倒していけばその内に元に戻ると言っているが…。

「怪しそうな奴ね…。」

チルノは大妖精と遊びに行く約束があると言って何処かへ行つてしまった。

これは俺1人の？問題だからチルノや他の奴らまで巻き込むわけにはいけないと思っているが、やはり1人だと心細い。

しかし、どうするべきか…。

俺が知っている、または藍から聞いた妖怪や人間の中で記憶を消す能力を持った奴なんか知らんぞ？

…。いや、1人居るかもしれない。

紫さんなら記憶の境界を操ってどこにかできるかもしれない。

でもな…。俺の記憶を忘れさせて何かいいことあるのだろうか。

少しでも可能性があるのだから確認しに行った方がいいとも思うのだが…思うのだが…。

もしね。もしだけれど、紫さんも本当に俺の記憶を失っていたとしたら、俺殺されるのではないだろうか。

今でも紫さんが隙間の能力を使って俺を狙い撃とうとすればできるだろうし…。

藪やぶについて蛇どこをじゃないな。八岐大蛇？

どうしよう…。

怪しそうなのは妖怪の山だ。

なぜかというと、魔法の森には毒性の強い茸の胞子が飛んでいて妖怪も近付くことがあまりない。

太陽の墓（畑です）には強力な妖怪がいるとか…。

吸血鬼の能力に記憶を操るなんてなかったし、1番怪しいのが山なんだよな…。

…逝くか。じゃなくて行くか。

まあ予想通りといえれば予想通りなんだけどさ…

「人間が山に入るとはいいい度胸だな？」

「久しぶりの人間だ！」

早速妖怪に襲われています。

俺に話しかけてきた妖怪2匹の他にも周りにも妖怪がたくさんいる。

「聞きたいことがあるんだ。」

「そんなことするか！」

その言葉と同時に妖怪達が襲いかかってくる。仕方がない。
殺しはしないが撃退させてもらうか。

「風符『次元風』」
じげんふう

このスペルは手から風を出し相手を遠くに押しやるという逃げスペル。

基本戦うスペルは無いのからな…。

「ぐおおおおおお！」

…叫びながら吹き飛んでいく奴もいるが、耐えている奴もいる。面倒だな…

俺は一応攻撃スペルも覚えているが、あれは強力すぎて使えない。
紫さんにも命の危険がない限り使うなと言われたものだ。

「へへ…やるじゃねえか！」

「教えてほしんだけどさ、お前らの中で記憶操る妖怪いる？」

目の前でさっきの攻撃？を耐えた妖怪に聞いてみる。

「お前に教える義理はねええ!!」
「ですよー」

まあ目の前に敵がいたらそんなことを教える奴はいないよな。
俺は相手が近付いてきたので風の魔法を使い後ろに逃げた。

「!？」

「逃げるのか!？」

何も教えてくれない奴のところにずっといるわけないじゃないか。
とりあえず上を目指そう話を通じる人がいるかもしれないし。

と思っていた頃が俺にもありました…。

「人間が!この山に何の用だ!」

「だから聞きたいことがあるんだって…」

「人間に教えることなどない!」

「なら聞くなよ…」

今追い詰められています。

確か天狗と呼ばれている妖怪だったはずの奴らに。

途中までは風符で敵を吹き飛ばしてこれたのだが山の中腹くらいまで来た頃から妖怪の量が多くなっていき強さも最初の頃とは比べ物にならないほど強くなっていつている。

…この糞天狗どもめ…。

相手が人間だと思ってなめるな…よ？

「ふん。」

いつの間にか1人（匹？）の天狗が後ろから俺の左肩を切り裂いた。近付いていたのに気付かなかった？

まさか戦闘の連続で集中力が切れていたか？

「うが…。」

「普段人間はただ追い返しているだけだが、お前は暴れすぎだ。」

「…だから、俺は聞きたいことがあるだけだつて…。」

「この山に入ること自体おかしいのだ…！」

ここにいる天狗のリーダーらしき奴がそう言い放つ。

「なら一般公開しようぜ。」

「ほざくな…！」

天狗が弾幕を放ってきた。やばいかわせる気がしない。

！

ならかわさなきゃいいんだ。俺は“能力”を発動。俺の隣に穴をあけ、対象を天狗が撃った弾幕に指定する。

天狗の弾が俺の横スレスレを通る。

「な、何！？」

「…」

悪いがしゃべる気力もなくなってきた。斬られたところが痛すぎる…。

「おのれ、人間…能力を他にも持っていたのか？」

「…」

「まあいい。どの道お前は殺す！」

今度は天狗が剣で斬りかかってきた。…俺も剣持ってくるのを忘れなければ応戦できたのだが…。
仕方ないこいつには焼き鳥になってもらおうか。

「究極魔法『炎界』」

俺の覚えている最強魔法の1つだ。
俺の攻撃スペルは正直言って危険すぎるので普通の人間相手には使えない。

このスペルは自身の魔力を炎に変えて攻撃するだけだが、その規模が異常。

大きさがこの山の10分の1くらいあるのではないだろうか。

「！？」

「止める！」

今までフラフラだった俺がいきなり巨大な魔法を使ったので、天狗達が焦りはじめた。

「あが！」

天狗達が俺に弾幕をかなりの量を飛ばしてくる。くそ！綺麗だ！
その内の数発が俺にあたって魔法が傾く。
もう放つしかない！

「くらえええええ…え？」

俺が魔法を叩き付けようとした瞬間魔法が消えた。え？何？魔力切れた？

「ふ、驚かせおつて。」

しまった…。最初から飛ばす過ぎて魔力なくなるとか…。笑えない！

「人間にしては、よくやった方だ。誇りに思うがいい！」

「死ぬ人間が誇るも何もないだろ…。」

目の前に天狗の剣が迫る。咄嗟に目を瞑る。

ああ、誰が俺の記憶を奪ったかもわからずに死ぬのか…。チルノが悲しむかな？

体がふらついてくる。血を流しすぎたらしい。

さっきの一撃で終わらせるつもりだったから後のことを考えてなかった。

死ぬ瞬間に意識が朦朧となっていくとか…痛みがないからこの方がいいのか？

てか剣が来るの遅いな…

「秘術『一子相伝の弾幕』！」

薄れている意識の中でそんな声が聞こえた……………。

13話（後書き）

はい。最後に出てきた人は誰だかわかるね？

ではまた会いましょう

14話（前書き）

感想なんてこない！

って言ったら感想書いてくれました。感謝感謝です。

では今回もお楽しみいただければ嬉しい限りです。

14話

「夜…霧夜！」

「のわ！」

耳元で名前を呼ばれ、驚き目が覚めた。

…？

俺の名前を呼んだ？

チルノか？

今俺のことを覚えているのは確かチルノだけだったはず…。でも、この声は…

「藍？」

「そうだが？私がどうかしたか？」

辺りを見渡すと、いつもの俺が貸してもらっている部屋だった。目の前には藍が立っていて。こちらを不思議そうに見ている。

「俺を覚えているのか！？」

「？どうした、いきなりそんな大声を出して…当たり前だろ？私が霧夜を忘れるわけじゃないじゃないか」

「で、でも」

「全く。怖い夢でも見ていたんじゃないのか？」

そっぴいながら俺の頭を優しくなでる。

「朝食ができているから、早く食べに来いよ?」

そう言つて藍は俺の部屋からでて行つた。なんだ…。

つまり、こっちが現実であつちが夢だつた?

おっちゃんの悪戯だつたのだろうか。

まあそんなことはどうでもいい…

「さっきのは夢だ…

「っ!?!」

夢だつた。

そう言つていつもの暮らしに戻るはずだつた。

本当に目が覚めた瞬間目に入つたものは見知らぬ天井で、布団で寝ていた。

ここは一体…?

確か天狗達に囲まれて魔力が切れて…。そのあとが思い出せない…。俺、もしかして死んだ?

ここつて天国とか地獄とか…そういつた所なのではないだろうか。

あの状況で俺が助かるだなんてことはほとんどありえないことだろうし…でも死んでたらこんなことも考えられないのでは…？

「あ、起きたんですね」

「！？」

突如俺の背後から声が聞こえた。声からして女性だろうか。

後ろを確認したいところだが、まだ体がうまく動かせない。

あれ…大怪我していたはずなのに、体が少し怠い感じがするだけで済んでいる。なぜ？

「そ、そんなに驚かなくてもいいじゃないですか…」

「あ…ごめん」

いや、誰でもいきなり話しかけられたら驚くと思うよ？

「体の調子はどうですか？」

「え、えーとまあまあかな？」

そう答えると、女性は俺の前に移動してきた。

女性は緑色の髪の毛で（緑髪？というのだろうか）頭に蛙らしき髪留めと蛇みたいなの…ゴム？をつけている。

服装は…肩を出してる巫女服？

最近の巫女さんは肩を出すのが決まりにでもなったのだろうか。身長はそれなりに高い方に見える。

「君が俺を助けてくれたのか？」

「はい。もう少し私があの場合に行くのが遅かったら命が無かったかもしれないよ？」

それは…その通りだな。

「ありがとう。助かった。少し聞きたいことが…」その前に貴方の名前を覚えてもらえませんか？私は東風谷早苗。この洩矢神社の巫女です」

ここは神社だったのか…。そして目の前にいる早苗さんは巫女さんだという…。

「悪い。俺は綾瀬霧夜。魔法使い見習いだ」

…俺はまだ見習いなのだろうか。そろそろ普通くらいのレベルと名乗ってもいいのではないのだろうか。

「霧夜さんですね。それで聞きたいことっていうのは？」

「ああ。俺の傷を治してくれたのは早苗さんなのか？」

「はい。そうですよ」

「…あんな大怪我だったのにどうやって治してくれたんだ？」

「それは能力を使いました」

能力…か。

なんだろう傷を治す程度の能力？

「能力って？」

「私の能力ですか？それは…秘密です」

早苗さんが自分の口元に指先を近付けて言った。

「えー」

「えへへ」

俺の笑いかけてくる。

…可愛い。

さて、傷を治してもらっているので移動しても大丈夫だろう。ずっとここにいて迷惑をかける訳にもいかないのですさつと神社^{こゝ}を出て行くことにしよう。

「本当に世話になった。俺がここにも迷惑だと思っし、出て行くよ」

「え？ちよ、ちよつと待つてください！」

「なんだ？」

早苗さんが慌てながら俺を止める。どうかしたか？まさか実は足が1本無くなっていたとかないよな？

…あつた。よかった。

「霧夜さんはあの時魔力無くなって天狗達にやられていたんですよ？」

「ああ。そうだ」

「それって1日で魔力は回復するのですか？」

「！」

つまり、1日では俺の魔力は全回復しないのではないかということだな。

例え魔力が完全に回復していなかったとしても山を…そういえば、ここは山の中なのか？

「早苗さん。この神社って山の中にあるんですか？」

「はい。丁度山頂付近です」

難易度が上がった…？

とはいえ、山から里まで下りるだけだしなんとか今のままでも戻れるのではないだろうか。

そう思い俺は布団からゆっくり立ち上がり空を飛んでみることにした。

……ぐは！

30cmも飛ばないで尻から地面に落ちた！嘘だろ！？

「ふふ 霧夜さん何やっているんですか？」

「ちょ！早苗さん！笑わないでくださいよ！」

「それでも、まだ里に戻りますか？」

「しばらく泊めさせてください」

「いいですよ」

本当に情けない男でごめんなさい…。

「では、この部屋を自由に使ってくださいですよ」

「ありがとうございます」

「それと食事の用意しますね。お腹すいているでしょう？」

「あ、それくらい俺も手伝いますよ！」

「いいえ。霧夜さんは寝ていてください」

そついい早苗さんは俺のデコを指で押しやり布団に押し倒した。

むぐ…あれ！？力を入れても起き上れない！？

「能力を使わさせてもらいました 大人しくしててくださいね？」

「えー」

「返事は、はいです」

「は、はい」

「よろしい」

そう俺の言葉を聞くと満足したように部屋から出て行った。
うー。

子供扱いされている気しかない…。

しばらくすると早苗さんがお粥を持ってきてくれた。

「今なら起きられますよ」

早苗さんがそう言ったので体に力を入れてみると普通に起き上れた。
お粥を受け取り一口食べる。

…おいしい。そういえば、昨日から初めてのご飯だな。

「どうしたんですか？」

「え？」

「涙出てますよ？」

そう言われて目に手をやると本当に涙が出ていた。
俺どうしたんだ？

「大丈夫だ。何でもないから…」

「何でもなかったら涙なんて出ませんよ。私に話してみてくださいませんか？話すだけでも楽になることってありますよ？」

「……ああ」

俺はこれまでの経緯をお粥を食べながらゆっくりと早苗さんに話始めた。

なんで、俺は会ってまだ1時間と立っていない相手にこんなことを話しているのだろうか…。

「それで、妖怪の山まで来たんですね？」
「ああ」

なんかわからないけど最後まで話してしまった。

「無理しなくても…いいですよ…」
「むぎゅ!？」

俺は突然早苗さんに抱きしめられた。
そして顔にはむにょんとした柔らかい感触。こ、これは!？
と、そんなことは置いておいて…

「どういうことですか？」
「泣いても…いいですよ」
「!？」

泣く？俺が…？

「私が霧夜さんのように周りの人に忘れられてしまったら平気でな
んていれません…。霧夜さんだって心のどこかでは悲しいのでしょ
う…？」

私は何をやっているのだろう。
まだ会って少ししか経っていない男性を抱きしめて泣いていいよ。

などと言うなんて…。

でも、放ってなんかおけなかった。

自分の親しかった人たちがいきなり自分のことを忘れてしまったなんてことが起きて、悲しく思わない人なんていないと思ったからだ。きつとどこかで無理をしている。

「悲しむ暇すらなかった…からな。わからない」

「我慢しなくていいですよ。私が全部受け止めてあげますから」
「…」

私がそう言ったら彼は私を少し強めに抱きしめた。

顔は隠れているし、声もでていないので泣いているかはわからない。私はやることがないので彼の頭を撫でてあげることにした。髪がサラサラしていて気持ちがいい。

ふと、彼の力が弱まった。

どうやら寝てしまったらしい。

こうして見ると、私より彼の方が幼く見える。次に起きた時に年齢でも聞いてみよう。

…あ、あれ？

離してくれない？

仕方がないですね。今日は諏訪子様も神奈子様も出かけているので、私1人。

なので少しここで私も寝ることにしましょう。

14話（後書き）

女性キャラに甘やかされてばかりの主人公。

…こんな主人公で大丈夫か？

さて、この作品のヒロインは誰だと思えます？
予想してみてください。

はやく霊夢や魔理沙だしたいな…

15話（前書き）

投稿遅れてごめんなさい（<―>）

勉強とギャルゲ（え）やってって遅れましたー！！

15話

「お世話になりました」

「ええ。また来てください」

俺が早苗さんにお世話になって3日。

魔力もそこそこ回復したので魔法の森に移動することにした。

いつまでも迷惑をかけているわけにもいかないし、俺の記憶がどうしてなくなっているかも知りたいしな。

「何かあつたら言ってくれ。いつでも助けに行くから」

「霧夜さんの力で私を助けれるんですか？」

にやにやしながら早苗さんが聞いてくる。一応俺にだってプライドとかあるのだが…

「あはは。そんな顔しないでください 頼りにしますから」

「本当かよ…」

ちなみに早苗さんとの生活はあまりなかった。

俺は1日中神社の中に引きこもり…というか引きこもっていなかったら危険な状態だったので引きこもっていた。

早苗さんは朝から里へ下りて仕事を行っていたようだ。その仕事内容は知らないのだが…

まあ早苗さんが帰って来るのはいつも夕方くらいだったので、会うのは朝と夜の少しだけという…その間は暇だったので神社の掃除とかがしていた。

神社はあまり広いイメージはなかったのだが予想以上に広くて驚いた。

「じゃあ、またな」

「はい 今度は諏訪子様と神奈子様にも会ってくださいね！」

「ああ、ちゃんといたらな」

早苗さんの神社には早苗さん以外にも諏訪子さんと神奈子さんと言う家族がいるらしいのだが、この3日間は出かけていて帰ってくることはなかった。

さて、さっさと魔法の森に行こう。

あそこなら魔力も回復できるだろうし、妖怪もほとんどいないからな。

あと、妖怪の山の天狗には会いたくないからな…

諏訪子様と神奈子様と会う約束をして霧夜さんは行ってしまった。
正直彼の実力で山を無傷で降りることは難しいだろう。
だから、特別にプレゼント。魔法の森につくまで妖怪に会わないと
いう……奇跡を。

妖怪の山を順調に飛んで下っていく。

登っていた時とは違い妖怪に1回も会わない。もしかして、どこか
へ任務！とかで警備が手薄になっているとか？

どうでもいいが、幸運と思ってさっさと降りてしまおう。今天狗や
ら力の強い相手と弾幕ごっこになったら逃げることもできないだろ
う。

…？

なんだ？

ぐるぐる回りながらこっちに近付いてくる紫色の物体がある…って
人！？

回っているのは緑の髪の毛をした少女。少女の周りを紫色のオーラ
が漂っている。

俺の近くまで近付いて…止まった。

回転は止まっていないが…。

「…」

「……」

どうしよう、このまま放っておいて先に進んでもいいのだろうか…。

「あなた、かなりの厄を持っているわね」

「へ！？」

いきなり少女が話しかけてきたので驚いてしまった。
え？厄？何のこと？

「私がその厄、祓ったほうがいいわよ？」

厄ってあの厄災とかの厄のことだろうか…。

「それと、妖怪の山には近付かない方がいいわよ」

そう言っって少女は去っっていこうとした。って待っってい！

「ちょ、ちよつと待った！」

「！？」

俺が彼女に近付こうとしたら彼女が弾幕を撃ってきた。慌てて身をかわす。

「……」

「ごめんなさい。でも私に近付くとあなたが不幸になってしまう」

「それはあなたの周りの紫色のオーラみたいなものの所為ですか？」

「ええ。そうよ。だからあなたも私に近付かない方がいいわ」

むむ…そんな悲しいこといわないでほしいわ…。でも俺にできるこ

となんてないしな……。

どうにか……俺の能力で厄を次元の彼方へ引きずりこめないだろうか…。

やってみる価値はある…！

俺は対象を厄。彼女の少し離れたところに穴をあけ厄を引きずり込めるか試してみた。

すると、彼女の紫のオーラが俺の指定した穴の中に入り消えてなくなった。

「！？」

「お。できたか」

「え？何をしたの！？厄がなくなった…？」

「俺の能力で厄をどこか次元に飛ばさせてもらった。これなら近付いても……大丈夫みたいだな」

彼女は驚いて回転するのをやめていた。

俺は彼女のすぐ傍まで近付いてみたが、何も起こらない。

「……！？ちょ、ちょっとそんなに近付かないで…ほしいわ」

「あ…悪い」

彼女にどれくらい近付くと不幸が訪れるか検証しようとしたらどうやら近付きすぎていたようだ。

あと少し近付けば抱きしめれるこらいの距離に……って近付きすぎだ！俺のアホ！

俺は急いで彼女から距離を取った。彼女はそっぽを向いてしまった。うー

「もしかして、厄を失くしたのって駄目だったか？」

「少しね。でもいいわ。また集めればいいのだから」

あらら、ダメでしたか。

今度から何かする時は相手にちゃんと聞いてからやる。

「それで？ここまでして私に何かしたかったの？」

「いや…そこまで大事なことでないが、あなた名前は？」

「私は鍵山 雛。払われた厄を集め監視し、人間に不幸が訪れないようにしているの」

「雛さんね。俺は綾瀬霧夜。よろしく？」

「ええよろしく。でも妖怪の山にはあまり近付かない方がいいわよ？」

「……………わかってる」

「ならいいわ。私はまた厄を集めに行くから」

「え？そうか。わかった。勝手なこととして悪かった」

「そう思っているなら、少し失礼するわ……」

「へ……………！？」

そういうと雛さんは俺の抱きついてきた……………何故だ！！

「へえ…人間ってこんなに暖かいのね」

俺に抱き着いている彼女は何か考えているみたいだが、俺の頭の中は真っ白だった。

「うん。もういいわ。それじゃあね」

雛さんはそう言ってまた回転しながらどこかへ飛んで行った。

俺はその場で少し放心状態に陥っていた。

ふう…ここまでくれば一安心といったところであろう。

雛さんと会ってから魔法の森まで誰にも会わずに来れることができた。これって奇跡ではないのだろうか。

ああ、森はいいな。

妖怪もあまりでないし、ジメジメしてるけど俺にとっては安全な所だし。

お腹が空いたら茸を焼いて食べればなんとかなるし 毒茸という可能性は考えない。

と考えたら茸が食べたくなった。探しに行こう。

「うまい。うまい」

茸を片っ端から取り焼いて食べる。

どうやら何か効力のある茸がたくさんあるようで、魔力がどんどん回復していく。

これはよくあるRPGゲームのポーションみたいなものか！？

黄色の茸を食べると魔力がどんどん回復していく。

お。緑の茸がある。見るからに怪しくて毒々しい…。食べてみよう。緑色の茸を食べたら魔力が回復している感じがなくなった。

…。

全回復したのか？

緑の茸は今の俺の魔力量なら完全に回復できるのかな？

それとも、今まで黄色の茸で少しずつ回復していたからかな？

まあいいけど。少し茸を取っておこう。魔力回復用にとっておこう。さて、魔法の森でも探索して……………？

何か怪しい穴を見つけた。

どこかの地下に繋がっていきそうなの……。

中は暗くて見えないが炎の魔法を使っていれば進めるであろう……。

もしかしたら、この中にいるかもしれない……。

そんな希望を持ちながら俺は洞窟？に入ってしまった。

15話（後書き）

もしかして、ポーションじゃなくて、エーテルの方がよかったかな？
茸はオリジナル設定ですので、どうかお気になさらずー

と話が変わりますが、

来週の更新のことなのですが、私来週最終テストなんですよねー。
ですのでもしかしたら更新ができないかもしれません。
もしそうなった時は私の活動報告でも見てやってください。

3月になったら休みが多いみたいなので更新速度があがる！
かもしれません

16話（前書き）

かなり短いです！ごめんなさい！

それと、感想で地霊殿は博麗神社の裏から行けると指摘してもらったのですが、結局このまま行っています！すみません！

16話

「暗い…」

洞窟の中に侵入して1分くらいで、洞窟の中に外の光が全く入ってこなくなった。

そりゃあ洞窟の中に明かりなんてものはないから覚悟してたけれどさ、こんなにも早く明かりが消えるとか…。できれば5分は持つてほしかったところだ。

うーん。こういう怪しい所にくれば敵らしき奴らがでてきて『お前の記憶を奪ったのは私だ！』的な感じで来てくれると思ったのに…

甘い考えだった。

それにしても、この洞窟はどこまで続くのだろう。何もないのなら5分くらいで洞窟の1番奥に行きたいものだ。

さて、明かりもなくなったことだし、炎の魔法でも使って明るくするとしよう。

…長いぞ？

なんて長さだ…。恐るべき幻想郷…。

途中に別れ道とかあったが間違えたか？

「おお？人間とは珍しいねえ」

「はにゃ？」

「地底に遊びに来たのかい？今は特に何もやってないけど、行くなら気を付けるんだよ」

目の前に金髪の…あれなんて髪型だっけ？まあいいけど。

それで、こげ茶色のジャンパースカートでベルトを何重にもつけている（ように見える）女性がいた。

多分というか…確実に妖怪だよな！。

「え、えーと妖怪さん？」

「なんだい？」

「ここら辺で記憶を操る妖怪知らない？」

「知らないね。でも地底はまだ続くからその内あえるかもね」

「そうか…ありがとう」

と言って通してくれるはずもないとは思ったが一応期待を込めて横を素通りする。

これは、後ろから攻撃してくるパターンか？

でもスペルカードを発動してくるときは声が聞こえるから不意打ちされることはないであろう。

って！

攻撃してこないし、後ろにもういない！

なんなんだ！あいつは！

…戦闘を避けられてよかった。

この洞窟だと思っていたところはどうやら地底へと向かっているみたいだな。

これは危険では…？

気にせず進むか。

奥に進んでいくにつれ妖怪らし奴らが襲いかかってきた。

と言っても弱い妖怪だったので目の前に光の魔法で目暗まししてさつさと逃げてきたのでそんなに魔力を消費はしていない。そこ臆病とか言わない！

さて、そろそろちゃんと会話ができる妖怪さんに会いたいな。記憶を操る奴がここにいるかと。

「もしかして人間？」

「ああ。人間だ」

上から声が聞こえたので見上げようとしてやめた。だってスカートだったから上見たら見えるし…。また女性かい……

「人間が旧都に何の用？」

彼女は俺と高さを合わせるつもりはないみたいなので、俺から高さを合わせることにした。

…これくらいかな。彼女は金髪ショート（金髪多いなー）で目の色は緑。耳がとがっている。

「まさか私達の呪われた力を目当てに？」

「！そこどころ詳しく！」

「やっぱりそうなのね？ならここで倒すまでよ！」

「ちょ！待って！」

確かに今の会話を聞いたならそう聞こえるかもしれないけれど、詳しくって言っただけでこれはないでしょう。

「嫉妬『緑色の目をした見えない怪物』」

「！」

いきなりスペル発動かい。

緑色の目の名の通り弾幕も緑色だ。と呑気なこと言っている場合じ

やないな。

「炎&雷『雷道の炎』！」

このスペルは雷を網状に広げ、さらにその網状の雷に炎を流すという広範囲スペルカード。

対して相手のスペルもなかなかの広範囲のスペルだったらしくほぼ互角……かな？

「っ！」

「と！」

お互いのそれぞれのスペルが自分の体を掠った。

「くっ！やるじゃないの！舌切雀『大きな葛籠と小さな葛籠』！」

うお！？彼女が2人に増えた！？

細かい弾と大きい弾を撃ってくる。もちろん色は緑色。

多分どちらかが偽物でどちらかが本物であろう。

大きい方が本物か！

俺は雷の弾幕^{レーザー}を相手に撃つが弾が5倍くらいになって返ってくる。

…間違えたか？

「あぶな！」

といいつつ腕に思いつきり当たっているというね。
しかし、本物は小さい弾の方。

「くらえ！」

弾幕を集中的に固め彼女に当てようとして時に……

いれかわりやがった……。

ピチューン！

「やったかしら……」

私はそういつてその場から離れようとして、かなり強い魔力を感じ即座に後ろを振り向いた。

そこにはさっき戦っていた男がまだ立っていた。

「っ！まだそんな力が……！」

「行くぜ？死ぬなよ？究極魔法『アルテマ6』！」

男の目の前に巨大な魔法陣があらわれ、青い巨大な球体が現れた。それはこの空間をすべて埋め尽くすほどの大きさだ。

「恨符『丑の刻参り七日目』！」

正直言つてあのスペルに勝てる気がしないが、抵抗してやる！

「おー。完璧にくらってくれたな」

実をいうと今のスペルは真ん中にいればあたらなのだ！

俺の魔力ではどうしてもあの大きさの魔法になると魔力が足りなくなるので、周りに魔力を集中させ、大きく見せているのだ。

とは言っても込めている魔力はそうとうの量なので（それでも傷付きはしない）まともにくらえば気を失うくらいにはなるだろう。

実際俺の手の中で彼女も気を失っているし…。

いやね。ここから下まで落ちたらさすがに怪我じゃすまないような気がしてね。とりあえず抱き留めてみたのですが…これからどうしようかな…。

16話（後書き）

次回さとり様がでる予定です

悟り…小五ゲフンゲフン

あ…ちょ！心を覗くなー！！

17話（前書き）

東方13弾 東方神靈廟 キタ――！！！！！！！！

今から楽しみだあああああ！！！！！！！！！！

17話

先ほど俺に襲いかかってきた少女をとりあえず抱き止めたはいいが、全く起きる気配がない…。

困ったな。

少女を倒して、多分30分くらい経った。弾幕は俺の最強系だったけれど、妖怪にこんなダメージを与えられるとは思いもしなかった。

今度からはもう少し力を弱めて使うとするか。…自分のピンチの時以外は。

抱き止めたまま進むのもそろそろ疲れてきたし、できれば目覚めてほしいものだ。この地底（いつの間にか落ちて行っている）の底も見えないし、早く情報を知っている妖怪もしくは話ができる奴に会いたいものだ。

と、何か下の方から明かりが見えてきた。もしや、人（妖怪）がいるのか？

折角だし、行ってみよう。この娘も預かってもらえればいいな。

…逆に襲いかかって来たりしないよな…？

とりあえず悩んでいても仕方がないので、降りて見ることにした。

「よつと」

久しぶりの地面だ。と言っても3時間くらいなのだが。

誰かいないか探してみよう。

できれば襲いかかってきてもいいから会話できる奴。そういうやつなら歓迎。

今なら茸があるから魔力補給もすぐできるからな。

「おや。あんたが抱えているのは橋姫じゃないか。どこで拾ったんだい？」

「！？」

突如話しかけて驚いてしまった。なぜなら姿や気配も感じなかったのに、いきなり声をかけられたからだ。

声をかけてきた人物（人？）は片手に何か液体のようなものが入った容器を手に持ち頭から角が生えている。

これって、鬼…か？

「弾幕ごつこで勝つたら気絶したから持っている。俺は綾瀬霧夜。人間だ。あなたは？」

「ご丁寧にどうも。私は星熊 勇儀。鬼の四天王の1人さ。橋姫は私の家に連れてきな」

そう言つて星熊 勇儀さんはゆっくりと歩き始めた。飛ぶのではなく、歩くのか。珍しい…家が近いのか？

「ここさ」

と勇儀さんについて行くこと10分弱。勇儀さんの家らしき所に着いた。以外に遠かった。

やはり妖怪と人間の体力は違うな…鬼と妖怪は種類が違ったけ？

あと、10分も歩いているというのに橋姫？さんは一向に起きる気配がない。意外に過労だったとか…。

勇儀さんに案内された部屋の中に入り、言われた場所に橋姫さんを寝かせる。

…よく寝てるな…。

勇儀さんが部屋の中で座り、俺にも座れと言つのでとりあえず座ることにした。

…今のところ戦闘の意思はないと思ってもいいだろうか。

「それで、あんたはここに何しに来たんだい？ただ弾幕ごっこをしに来たわけじゃないんだろう？」

…聞いたか？今の言葉…

ここに来るまで色々な奴に話しかけて来たが相手から用件を聞いてくれるなんてなんて珍しい！

「勿論です。ここに記憶を操る妖怪がいなか探しているんです」
「記憶を操る…？」

「はい」

「悪いけど、私は知らないね。少なくともこの旧都にはいないよ」

ここは旧都と言っらしい。ってことは

「無駄骨かよー！」

俺は後ろに倒れる。頭を軽く打って痛かったです。

「でも、地霊殿に行けばなにかわかるかもね」

「地霊殿？」

聞いたことのない言葉に反応し、即座に起き上った。

「地霊殿には偉そうにしている奴らがいるんだよ」

「…偉そうにしている奴？」

いや、偉そうとかどうでもいいのだが…。

「こことは違うのか？」

「もちろん違う所さ」

つまり、そこに記憶を操る奴がいるかも知れないということか…。

「ありがとう！それじゃ俺は「待ちな！」…え？」

「あんたみたいな人間が地霊殿に辿り着けるとは思えないんだけどな…？」

「つまり…力を示せと？」

「そういうこと（本当は暇つぶしだけどね）」

四天王の1人の鬼を倒せるか！

無理に決まっているが、やらなきゃ通してくれなさそうだし。

「わかりました…。でも外で」

「当たり前さ」

外にでて、俺と勇儀さんは向かい合う。

「あんた時間がないんだろ？」

「まあないというか、急いではいる…のか？」

得にそういうことは意識していなかった。

「仕方ないからスペルカード1枚で勘弁してあげる！四天王奥義『三步必殺』！」

いきなり奥義かよ！？

しかも四天王の奥義！？

これは最初から本気で行かなければ…

「究極魔法『夢と現の呪 E X』！」

この魔法は紫さんのスペルカードを参考に作らせてもらったもので、8つの魔法を周囲に放ちそれがいくつかの弾に拡散するスペルカード。

ちなみにこれだけでは弱いと思われるかもしれないが、拡散していく弾の中にレーザーや大玉も含まれているので、結構強いスペルだ。俺にとって。

「中々やるじゃないの！」

勇儀さんは楽しそうにいう。俺は全く楽しくありません。むしろ苦痛です。弾が掠って冷や汗が半端ないです。

一方勇儀さんは余裕の表情。弾が掠っても本人は涼しい顔をしている。

きっと彼女はもっと強くて俺に手加減してくれているのであろう。じゃなかったら即死している自信がある。

くう…！

このままだったら魔力切れでこっちが先に参りそうだ。仕方ない。能力使うか。

対象、星熊勇儀。場所は俺の弾幕発射地点！

「…？」

ビックともしない…。

あれが力の強い妖怪…いや鬼だからか？

1個で駄目ならもう8個くらい！

場所を同じにして、引きずり込む！

「おお！？」

勇儀さんが俺の弾幕の近くに引きずり込まれないように空中で抵抗する。

その時勇儀さんの弾幕の数が少し減った。これはチャンスではないだろうか。

俺は勇儀さんの少し後ろに移動。そして急に上に飛び立つ。よし！背後取った！

「残念。少し遅い」

「へ？…だああああああ！！」

俺が勇儀さんに弾幕を放とうとして弾を出そうとした瞬間に勇儀さんが振り向き俺よりも早く弾幕を出し全弾命中させた。

その威力に耐えきれずに俺は地上へと叩き落されてしまった。

「流石ここまで来ただけあるね！」

「負けたけどな」

勇儀さんが俺の目の前に降りて来ていった。

「それくらい実力があれば大丈夫だと思っからこのまま奥に進みな。でかいお屋敷が見えるからさ！」

「あーありがとう？それじゃあ俺は行くことにします」

「また勝負しようじゃないの！」

「はは…（遠慮したいな…）」

勇儀さんはそれ以上言うことは無いようで家へと戻って行った。

さて、行つて見るか！地霊殿！

と意気込んで行つて見たがやはり遠かった。

地霊殿らしき所に着いたには着いたがでかいというレベルでは無い
大きさだと思う

目の前の扉は俺の身長の2倍くらいありそうだし、この屋敷何階建て？

扉をノックしても意味が無いように思うので失礼だが扉を引いてみ

た。
開いたよ。

「誰かいませんかー！？」

とりあえず玄関らしき所に入って声を上げてみた。

これだけ広いのだから人や妖怪がたくさんいると思ったのだが何にも反応がない。どうということだ？

というかこれ不法侵入か…？

…細かいことは気にしな…いやいやいや駄目でしょう！

「どうぞ、奥にお進みください」

「！？」

突然声が聞こえたが姿は見えない。奥に進めと許可（？）が出たのでとりあえず進むことにしよう。

「来客なんて珍しい」

「！？」

さつきから驚かさせられてばかりだ。俺肝が据わっていないな…

声をした方えお見ると薄紫の髪にフリルの多くついた、ゆったりとした服装でコードのようなもので繋がっている目を（アクセサリーか？）身に着けている少女がいた。この娘はこの主人の娘さんか？

「いいえ、私はさとり。この地霊殿の主です」

なんだってー！

容姿にとらわれてはいけない見たいだ。幼く見えるがきつと俺よりも年上なんだろう。

「ええ、その通り。私は貴方みたいな人間より年上よ」

「…さつきから考えを読まれている気がするのは気のせいかな？」

「いいえ、合っていますよ。綾瀬霧夜君？」

君づけはやめてほしい…。呼び捨てでいいから…

「そう。記憶を操る妖怪がいなか探しに来たのね？霧夜君？」

わざとですね？わかります。しかし、考えていることを勝手に理解してくれて話が早く進むと思うのとプライバシーないのかよ！と思うべきか…どちらがいいだろうか。

「残念ながらこの地霊殿にも記憶を操る妖怪はいません」

また無駄足かよ…。

じゃあここにいない意味ないじゃないか…。騒がせたな。

「待ってください」

「なんだ？」

「貴方は今疲れている見たいなので、もしよければこの地霊殿に泊まって行ってもいいわよ？」

どうということ？

俺が疲れているから休んで行ってもいいということか？

にしても今知り合ったばかりの俺を泊めるって…不用心すぎるよう

な…。

「怪しむのは無理ありません。ですが、貴方の心に邪悪なことがなかったので大丈夫かと」

「…心を読めるからってそんな人を信用しちゃいけない気がするが？」

「気を付けます。それで、どうしますか？」

「お世話になります」

本心を言つと連続で飛び続けていてかなり魔力的にも体力的にも辛い。

「今すぐ部屋に案内しますか？」

「いや、しばらくさとりさんと話していたい」

「変わった人ですね」

今日は地霊殿に泊めてもらえることになった。

17話（後書き）

地霊殿NORMALクリアできず…。

うにゅほラスぺあと3秒耐えられれば…！

次回

添い寝ボイスなさとりさん

普通に1人で就寝。

どっちがいいかな？

18話（前書き）

オリキャラがまたです

18話

「お世話になりました」

「ええ。私も楽しかったわ」

そう挨拶して俺は地霊殿から空を飛んで地上に出ようと飛び立つ。
泊めてもらった部屋は意外に和風という感じだった。

地霊殿の外観を見た限りでは洋風な感じがしていたが…予想外だ。
さとりに教えてもらったのだが、地霊殿こりから一気に地上に出れるルートがあるらしいので今日はそっちから出ようと思う。

そういえば地霊殿の近辺でさとりさんのペットと戦いになりそうになった時にさとりさんの知り合いだとか言えば襲ってこないらしいので今日は楽に行けそうだ。

それと、さとりさん自分のペットに何してるし…。

昨日夜に色々と話をしていた時にペットがたくさんいるということ
は聞いたが、ペットとの仲は聞いてないんだよな。今度会ったら聞
いてみるか？それは地雷だったりしそうだからやめておいた方がい
いかな？

さてと、あとどれくらいで着くかな…。

それにしても、また記憶を操る(？)妖怪を探しに行かなければ…。

「…まぶしいな」

久しぶり…と言っても1日程度だが地上についた。

さとりに言われた通りの道順でここまで来たら1回も迷わずに地上に戻ることができた。

出て来た場所はどうかやら森の近く見たいだ。魔力補給の茸でも取りに行くか？

とりあえずそれは置いといて、どうすればいいのだろうか。
地下に行っても意味がないことはわかった。

あとどこに行くべきだろうか…。

冥界は途中までは行つたし、太陽の墓（畑）は最強クラスの妖怪がいるけど能力ではそんなものはなかったはずだし…。

むむ…！詰んだ！

「もう！何なのさ！」

「へ？」

突然上から声が聞こえて空を見てみると、白い羽根を持ち、黄色い目。天使のような白い着物を着た少女がいた。

「お前何者だ？」

「君に関する記憶を奪った者。とでも言っておくね！」

…つまり黒幕からこっちに来てくれたということか？

「なんでこんなことをした？」

「ふふふ…よくぞ聞いてくれました！それはこの幻想郷の支配者、八雲紫を倒すためさ！」

「…紫さんって支配者だったのか？」

「そうよ！倒して私がこの幻想郷の支配者になってダラダラと怠惰な人生送ろうと思ってたのに！」

「（そういえば）で、俺の記憶の話はどこ行つた！」

「あ、忘れてた。それでね、八雲紫を倒すのに邪魔者がたくさんいたから記憶を操って、混乱した隙を狙おうと思ってたの！」

「…うまくいったか？」

「むきやー！！いつてたらここに居ないわよ！八雲紫の記憶操作はできないし！勝てないし！！手傷しか負わせれないし！！あなたの

記憶も消えてなかったし！なんでさ！」

「知るか！！！」

「というか紫さんは俺の記憶はあったのね…。」

藍が記憶がないから紫さんの記憶もないと思っていた俺がバカだった…。

「折角巫女の異変を解決するっていう記憶も20日間忘れるようにしたり、他にもいろいろとやったのに台無しよ！」

「…。どうでもいいが、お前を倒せば記憶が戻るのか？」

「え？あなた程度の人間が私を倒すって？あははははは！」

「何か可笑しかったか？」

「教えてあげる。私これでも（元）神様なの！人間程度が勝てるわけがない！」

「妖怪に負けてるじゃん。人間でも勝てるかもしれないだろ？」

「ふふふ…！面白いこと言うじゃない！私に勝てたらあなたの記憶戻してあげるわ！」

そういつて自称神様は俺に弾幕らしきものを放ってきた。

こういうところは幻想郷のルールに従っているのか？

俺は手持ちの苺を確認し、最初から本気で行くことにした。

「究極魔法『炎界』！！！」

この前天狗と戦った時は魔力切れで最後まで放つことはできなかったが、今は違う！

魔法を相手に放ちつつ苺を食べておく（魔力がすぐなくなるため）。

「ちょ！最初から飛ばしすぎ！！…仕方ない。私も…」

そこで言葉を切り、俺のスペルが打ち破られた。だが、それは予想済み。

なぜなら、今のは力を加減していたからだ。

「本気でい…ってな!？」

俺は能力を使い（指定俺。穴を相手の背後に）相手の背後に魔法と能力の同時しように高速移動。

今度は普通に雷の魔法で相手を打ち抜こうとしたが、ギリギリ交わされてしまったらしい。

相手は地上に降り立ち今は俺が空にいるという状況だ。

「や、やるじゃない…」

「俺のカードはあと4枚。それまでに潰してやるよ…記憶の神!」

「ふふ…。それはこっちのセリフ…。私はカード1枚で倒してあげるわ!八雲の手下!!」

手下じゃない…。

「記憶『メモリーズマイン』!!」

相手がスペル宣言をしている。そういうところは本当に忠実だな。

「今からあなたは私のことを『忘れる』!」

相手が俺を手でとらえて…。

何してたっけ…俺。

確か記憶を奪う奴が…。

「ふふふ…。余裕余裕」
「!？」

上から弾幕が降ってきて、モロに食らってしまった。
そうだ！俺あの女と戦ってたんだ！
ダメージを受け空で体制を立てることができず、地上へと叩き落されてしまった。

「ぐ！能力使ったのか？」

「うん これを使えばあなたの記憶は私の物。所詮変わった能力があるだけのあなたが私に勝てる分けがない！」

「ああ…そう」

しかし、今になったら記憶が戻っているし何か弱点があるのだろう。
能力で相手を引き寄せ続けるというのはどうだろうか…。

「どうしたの？私に勝てる気がなくなった？それもそうだよね！何て言ったって私はあああああ！！？」

指定自称神様で穴を地面の少し埋まった所にして使ってみたところかなりの効果があったようだ。

「もう…何するのさ！つてわー!!」

俺は相手の話を聞かないで起き上った瞬間には大玉を数発撃ちこむ。

「わわわー!!」

上へと飛ばうとしたので、再び同じ場所に指定。引きづり込む!!

「嘘!？」

全弾命中。

にしても話す余裕があるようなのでまだまだ油断ができない。

「…あなた魔法が得意ね…。それに能力の使い方も中々なもの」

「魔法しか使えないからな。能力はまあまあだ。記憶戻せよ」

「断るわ。…人間程度、これで痛めつけて八つ当たりできると思ってたのに」

「八つ当たりしたいのは俺もだ」

「……もう楽しまないわ。徹底的にあなたを殺す!」

「最初からその気じゃなかったのね」

と余裕を見せているが、内心焦っている。

神が俺を殺す!とか言ってるんだぜ?焦らない方がおかしい。
とりあえず、相手はその場から動いていないのでその方向に弾幕を撃つ。

「どこに撃ってるの?私はこっち」

「な!？」

背後から声が聞こえ振り向く間もなく弾幕で吹き飛ばされる。

な、なぜだ?さっきまであそこにいたはずなのに…

「言っておくけど、私の能力は記憶を消すだけじゃないわよ?」

なるほど、確か記憶を操るんだっただな。
でも…

「それ、言っただけだったのか?」

「……別にまた操ればいいこと。私の能力の弱点を見つけない限りあなたに勝ち目はない！」

19話（前書き）

本当にごめんなさい。

色々な事情と、昨日データが吹き飛んでひどいできあがりになってしまいました。

今度時間があるときに修正できたら修正します。

19話

こんな奴に勝てるのか疑問だ…。

弱点を見つけなければ勝てない。そう言われても弱点を発見してもその記憶を消されるから意味がないような気がする。

記憶を操るということは、そこにまだ彼女がいると錯覚させることもできるのだろうか。

そうなればさっきのも納得いくが、どうやって勝てばいいんだ？ ことに

「ほらほら！ かかってきなよ！」

さっきから俺の攻撃がうまくいかず自分の攻撃ばかりあったている
ことで機嫌がよくなってきたいるみたいだ。

というより、俺からの攻撃を待たず自分から攻撃してくればいいの
に…。

「来ないの？ならこっちから行くよ！」

そついいながらこっちに弾幕を放ちながら俺に近付いてくる。

仕方がないので俺も弾幕を撃ち反撃しておく。もしかしたら目の前
にいる彼女も俺の記憶を操りそう見せかけているだけかもしれない
が…

「っ！」

やはりそうだった。彼女は俺の弾幕に当たり消えた代わりに俺は背
後から弾幕を食らった。

どうやら彼女は後ろにいたらしい。くそ、わかるか！

茸の残り数も少ないし、どうするべきか…

魔力補給用の茸が切れた。あと俺の弾幕の撃ち方と能力の使い方も忘れさせられてしまった。

これはもう勝てる気がしない。諦めてはいないけど

「どうしたの？そろそろ自分の負けを認めたら？」

「…」

俺を一方的に滅多打ちできるので彼女の機嫌はかなり良くなっていた。

しかし、どうしようか。今彼女の能力を防ぐ方法はわからないし、誰かくる様子もない。

少し考えてみよう。幸いにも彼女は俺の動きを観察している見たいで、相手からなんかしてくることはなさそうだ。

紫さんはこいつの能力を防げて、俺にはできない。

それはなぜなのだろうか。

紫さんは力の強い妖怪だからか？いや、それなら俺の能力も通用しないはずだ。

ましてや相手は神らしいし。うむー。わからん。

紫さんは能力を防いだのではなく、能力を使わさせてなかったとしたら。どうだろうか。

どんなに能力が強くても使わさせなければいい。

となると、弱点は？

とりあえず、彼女に聞いてみよう。その反応を見てからさらに考えるでしょう。

「発動条件？」

「え？」

「お前の弱点」

能力を発動させないことができるなら（あくまでも仮定）、その能力を発動させない何かがあるということだ。

でもそんな簡単にはあたらないよな。咄嗟に発動条件とか言ってみただけけど、能力に発動条件とか無いはずだ…

「！よ、よくわかったね！」

素直に答えてくれたよ。彼女は馬鹿なのか？ いやもう馬鹿だろう。

「私の能力はちょっと特殊で発動させるには私と相手を同じ空間にいさせなきゃ駄目なんだ！」

「1ついいか？ それ俺に教えてよかったのか？」

「あ…」

馬鹿だなこいつ。俺は別に鎌をかけたわけではないと思うのだがな…。

とはいえ、空間か。紫さんは隙間移動とかを利用して防いでいたんだな。俺はどう防ぐべきか…

「く！なら今の記憶を消すまで！」

彼女が俺の記憶を操ろうとしている。考えている時間はない…。

一か八かで俺は体に魔力を纏わせた。

これは藍に教えてもらったのだが、魔力の多い人間や妖力の多い妖怪自分の周りに自らの力を纏わせておくことができるらしい。

ただし、力の減り方がかなり早いのであまり使わないとか。

「これで、俺に能力は使えないか？」

「……」

と、能力を防げる方法がわかったが弾幕の撃ち方はまだ思い出せない。これじゃあ攻撃ができないし、その内魔力がなくなって俺がやられてしまうだろう。

どうすれば……

「！？」

「！！」

目の前の空間が歪みそこから刀が一本俺の目の前に突き刺さった。

紫さん……見てるなら助けてくれてもよかったのに……

「八雲……紫！」

隙間から返事はなくただ閉じられただけだった。

つまり、俺にやれということだろうか？

剣に使い方なら忘れていない。まだ勝機はある！

俺は彼女が呆けている（？）隙に近付く。

「な！？」

彼女はなぜかわからないが、すごく驚いていた。どうした？俺が攻撃してくるのがそんなに驚きか？

彼女は身をかわし背後に下がっただけだった。

空に飛ばないのか？

俺はチャンスだと思いさらに追い打ちをかける。彼女は身をかわしつつ後ろに下がって行く。

どうしたんだ？弾幕で反撃してきてもいいと思うのだけれど…

「っ！」

俺にばかり注意がいき後ろをあまり気にしていなかったのかどうかはわからないけれど、少し躓いたようだ。

その隙を逃がすか！

俺は横に一閃剣で相手を斬る。彼女から血が飛び散る。

神様なのに血が出るのか…どうでもいいことを考えながら止めを刺そうと、突き刺そうとして…

「！…紫さん！？」

突如目の前に紫さんが現れ俺の腕をつかんだ。俺は腕は紫さんの力で動けないでいた。

「霧夜。これ以上はやっては駄目よ。勝負はついた」

「…どこから見てたんですか？」

「最初からよ。よくやったわね」

紫さんが俺の頭をポンポンと撫でて、腕を掴む力を緩めたので俺はその場にへたりこんだ。

「あとは、任せなさい」

そう言っただけ紫さんは記憶を操る彼女の方に向かった。

20話

…えーと？確か妙に安心して地面に座り込んだところから記憶がないぞ…？

今自分が感じている感触は地面の硬さというわけではなく、布団で寝ているという感じだ。

つまり、布団で寝ているのだろう。

そんなものは目を開ければわかるだろう。と言われてしまったらそれまでなのだが、体が怠くて目を開けるのも面倒だ…。

なんて言っただけでそうしていたらただの怠け者（もう手遅れか？）になってしまつたので体を動かして起き上る。

周りを見渡すと見慣れた風景だった。

ここは、八雲家の俺が住まわさせてもらっている部屋だ…！

壁に戦闘で使っていた剣が置いてあった。状況が確認したいので、とりあえず居間に行くことにした。

…一応剣も持っていこう。

居間の前まで来た。

部屋の中には藍がいる。

…なんか怖いな…。

久しぶりに会ってこともあるんだけど、俺の記憶が戻っているかとか。

とりあえず、行ってみないとわからないので勇気を振り絞って（それほど緊張はしていないつもりだが）声を掛けてみることにした。いや、やっぱり緊張しているのか、体がなんか硬い。

「藍…おはよ」

「！ 霧夜か。おはよう」

俺の記憶は戻っているようだ。少し安心した。

またいきなり弾幕放たれて来たら今の俺なら逃げ切る自信がない。

「えっと…そのすまなかった」

「へ？」

「霧夜のこと忘れて…」

「あ、ああ！別にいいよ！気にしてないし！」

「そ、そうか？無理してるんじゃないだろうな？」

「大丈夫だって。逆の立場だった時あの能力にかかったら俺もそうなってただろうしな」

「うん。わかった。私もこれからは普段も気を付けるようにするよ」
「おう！」

そう言つて藍は俺に笑顔を見せた。

うん。完全に戻っていてよかった。あの後どうなったかも気になるけれど、それは後で紫さんに聞いてみるとしよう。

…どうしてだろう。藍が記憶戻っていて安心したはずなのに、体がまだ硬いというか動かしにくい…。

もしかして、前みたいに薬の副作用とかか？それなら、また何日か寝ていたのだろうか。

「そういえば、俺ってまた3日とか寝てたのか？」

「いや、今回は普通に1日で起きたぞ。そう言われると珍しいな」

「…悪かったな遅起きで」

「本当に霧夜は寝坊助だ」

「言わなくていいです。いや言わないでください」

…体の調子が悪いのはなんなんだ？

別に気にしなくても数日経てば治るか？もし症状がひどいようなら紫さんにでも相談しよう。

「今日はどうするんだ。霧夜？」

「うん？」

「またどこかに遊びに行くのか？」

「…今日は近くで飛んでみるかな。病み上がりだし」

「別に病気の後ではないんじゃないか？」

「…そこはスルーしてほしかった」

まあ、確かに病気になってたわけじゃないけれどね。なんか体の調子も悪いみたいだし、もしものために近くを飛行してみよう。

「そつだ。もしよかったら私と弾幕勝負しないか？」

藍からご飯をもらい食べ終わった頃にいきなりそういわれた。

「なんでまたそう来るし……」

「いや、この間の騒動でさらに強くなったかと思ってな。試してみたくなっただ」

「そんなに変わってないと思うけど……。いいよ。手加減してくれるなら」

「勿論だ！」

藍がご飯の後片付けをしてから外に行くと言うので、手伝おうとしたらすぐ終わるからと言って追い出されてしまった。仕方ないから外に言って待ってしよう。

…体の違和感が治っていないが、まあ大丈夫だろう。

「少し、待たせたか？」

「いや、それほどでもない」

俺と藍は少し離れた場所で向かい合っている。

藍を待った時間は10分くらいだ。そんなに待ったとは言わないだろう。

しかし、ここでもうするのが本当に久しぶりな気がする。色んな所で戦ったからだろうか。

「ふふ。容赦はしないぞ？霧夜！」

「おう！できるだけ耐えて見せるぜ！」

「期待してるぞ！幻神『飯綱権現降臨』！」

「そんなに期待するな！？炎&雷『雷道の炎』！」

お互いにスペル宣言をして弾幕が発動し……俺のスペルが発動してない？

「！？」

このままだったら藍のスペルが直撃するのでとりあえず風の魔法を……発動しない！

なんだって言うんだ！魔法が使えないのか！？なら能力は…

「っ！よし！」

なんとか発動し、空中に脱出することができた。

「霧夜！どうしてスペル発動しなかったんだ！？」

「わかんないけど、発動しなかったんだ！それに、魔法も発動しない！」

俺がそういうと藍は自分の弾幕をやめて、俺の方に駆け寄ってきた。

「どうした…？まさか記憶操作で何かされているんじゃないだろうな？」

「…確かに1回忘れさせられはしたが、その時は能力も一緒だったし…。今は能力が使えたから多分それじゃあないと思う」

「そうか。他に何かはないのか？変なものを食べたとか、されたとか」

「…茸食べた」

「茸？何のだ？」

「わからんが…魔力回復するからたくさん食べたんだよ…。焼いたけど」

「…それが原因か？私はわからないけど、紫様なら何かわかるんじゃないか？」

「訊いてくる…！」

「ああ、私は居間でのんびりとしているから、原因がわかったら教えてくれ」

「おう」

俺はそう言って家の中に戻り、紫さんの部屋に行く。

「紫さん？起きてる？」

部屋の前まできて声をかけてみる。紫さんならこの時間は寝ていてもおかしくないの、とりあえず扉は開けないでおく。

「霧夜？どうしたの？」

「ちよつと相談したいことがあるんですけど…今部屋に入っても大丈夫ですか？」

「ええ。ちよつと待ってくれるかしら」

と言われたので俺は部屋の前で待つことにする。
何しているんだ？

いや、妖怪とは言っても女性だから色々あるの…ぎゃー！

「いらつしゃい」

「…隙間移動するなら言ってくださいよ…」

「あら、それだったら面白くないでしょう？」

「心臓に悪いです」

まったく俺は妖怪じゃなくて人間なんだから、寿命が縮んだらどうするんだか…。いやこの程度なら縮まないか？

「それで、相談したいことって？」

「……………」

「ちょっと、霧夜？」

「！？すみません！」

「もうすっかりしなさいな」

正直に言うと、紫さんに見とれていた。別にいつもと違う服装だったり、髪型が違ったりしたわけじゃないんだけどね。どうしてなんだろうか…。

「えーと、相談したいことって言うのは…」

俺はさっきのことを話した。

藍と弾幕ごっこをやるうとしたら魔法が使えなくなっていたことを。

「そう…。1つ言えることはあの子の能力の所為ではないということよ」

「やっぱりそうなんですか」

「ええ。ちゃんとあの後に説得（力で）して貴方の記憶は戻ってい

るはずなんだけど…」

…やはりあの茸のことは言った方がいいのだろうか…。
しかし、うー…

「何変な顔してるの」

「へ？」

「まだ何かあるの？」

「いえいえ！無いです！なんにも！」

「…何か隠し事でもしてるの？」

あれ！？ばれた！？

俺ってそんなに顔に考えていることが出てしまうのか！？

「えーと、魔法の森で茸食べました…。魔力回復する…」

「……………」

「……………」

「……………えーと？」

「えい！」

「うごは！？」

紫さんの扇子で首元を叩かれた。

普通の扇子なら大して痛くないだろうが、紫さんは妖力を扇子に纏わせていた？みたいなのでかなりの威力だった。

「痛いですよ！」

「あ、あれ？気絶しないの？」

「ま、まあ大丈夫でしたけ！？」

「仕方ないわね。起きたまま連れて行きましょう」

隙間に落とされている途中にそんな声が聞こえた。
これなら、隙間移動中に気絶しそつだ。

21話（前書き）

色々と視点が変わっています。
わかりずらかったらごめんなさい。

追記。 フラン倒せたさ！

21話

隙間移動中に気絶しそうだ…。そう言ったら本当に気絶していたらしい…………。

「…それじゃあ…」

「ええ、残念だけれど…」

「そう…食べる物には注意するように言っておけばよかったわ」

「あんまり残念そうじゃないわね…。これから彼に何かするつもり？」

「勿論そのつもりよ」

話声が聞こえる。1人は紫さんでもう1人は誰だろう。女性の声だ

というのわかるけれど、聞いたことのない声だ。

俺はどこかに横にされている状態だった。また気を失ったのか…。
弱い俺。

「紫さん」

「あら、霧夜起きたのね」

「こんにちは、こうやって話すのは初めてね」

銀神を三つ編みにし、看護婦のような服装をしている女性が俺の方を見ていた。

話すのは初めて…ということはどこかで会ったことがあるのだろうか…。

俺の記憶では会ったのが初めてな気がする…。

「えっと初めましてじゃないでしょうか？」

「そういえば、貴方が起きている時に会ったのは初めてね」

…？

どういうことだ、俺が寝ている時にでも会ったことがあるのだろうか…。

「霧夜が妖怪の毒で倒れた時にここで治してもらったのよ」

そう紫さんが言う。あああの時か。

確か紫さんがはやく能力目覚めさせようとした時か。

「お、お世話になりました…？」

「お世話しました」

この人は幻想郷の医者…というところだろうか。

「霧夜。永琳と2人で話したいから、貴方は少し外に出てて頂戴」
「…わかりました」

魔法が使えない理由はわかったのだろうか…。
まあ後で紫さんが教えてくれるだろうし、ここは紫さんの言う通りにしておこう。

「それど、そんなにひどいの？あの子が食べていた物は…」

「ええ、あの子はただの魔力回復の便利物だと思ってんじゃないかしら…。あれは、将来使える魔力を先に使わせるだけの物。つまり、使えば使う程将来使えたはずの魔力がなくなっていく。あの子がまた魔法を使えるようになるのは10年後よ」

「…私達から見たら10年なんてものは短いけれど、人間からした

ら長いのでしょうかね」

「そうね…それで、どうするつもりなの？」

「それは秘密よ。少し経ったらあの子を迎えに来るから、少しここに置いてもらっていいかしら？」

「好きにしていいいわ。（姫の餌食になってなければいいけれど）」
「ありがとう」

紫はそういうと隙間でどこかへ移動していった。
さて、仕事しますか。

外に出ていると言われて外にでるとそこは竹林が広がっていた。
これは…確か迷いの竹林とか言うところじゃなかったか？確か、入
ったら必ず迷うとか…

紫さん早く俺も入れてくれないかなー。怖いわ

「ん？あんたお客さんかい？」

「ん？」

横から声がかけられ、振り向くとうさ耳をつけた…実際生えているのだろう少女がいた。かなり身長が低い。

俺のことをお客さんと言うということは、ここの関係者かな？

「まあ、そうなるかな」

「なんで入らないんだ？もしかして、永琳に何かされたとか！？」

目の前の少女はなぜだかわからないけれど、目を輝かせながら俺に問い詰めてきた。

「いや、別に何もされてないけれど追い出された」

「なーんだ。つまんないの！そうだ！お兄さん私と遊ぼうよ！」

「…弹幕ごっこは嫌だぞ」

「そんなんじゃないよ…」

「全く。てゐの奴仕事サボってどこで何しているんだか……」

私は鈴仙・優曇華院・イナバ。ここの月の兎ですが、永遠亭で暮らしています。

地上の兎達やてゐと充実とした毎日を送っています。ですが、悪戯好きなたてゐが黙って働いているわけもなく、苦勞しています。

今日はどこに行っただか……

「鈴仙……！」

「てゐ！どこに行ってたの！」

「ちよつと遊んでたのさ！」

「いつもそうじゃないのあんたは」

「今日は人間の遊び相手がいた！」

「へ？人間？お客さん？」

「ほら、あそこ」

てゐが指さした方向を見ると人間の人々が地面に埋まって……埋まって？

「てゐ……！何してるの……！」

「え？鬼……こただけど？」

てゐの言葉を聞きながら私は人がいる方に近付いて行く。人間は苦手だけれど、この際氣にしてなんかいられない。

「大丈夫ですか……！」

「……うさ耳少女が成長した？」

うさ耳少女というのはてめのことだろうか…。

「ごめんなさい！てめが迷惑をかけて…」

「ん？ああ気にしなくていいよ。あれくらい」

そういつて人間の人…（どうやら男性のようだ）は地面から出ようとして…

「手引いてもらえないか？」

そういつて私に手を差し出してきた。
…どうしよう。

「あ、もしかして嫌だったか？」

「いや！そうじゃないんです！」

私は思いつきり男の人の手を引っ張ったら、男の人は空に舞い上がってしまった。

いけない！手加減するの忘れてた！

「と」

と思ったら男の人は空中で1回転して、垂直に地面に向かって降りてきた。

え？

ただの人間の客じゃなかったの！？

「少し手加減して欲しかったな」

目の前で茫然としているうさ耳少女…姉？とも言うておこう。

今は、空に飛ばされた瞬間に能力で俺を指定して空中でとどめて一気に落下しただけといものだ。

にしても、あの兎鬼ごっこって言いながら落とし穴に嵌めるとかやめてほしいわ…。

「やーい引つかかった!」

「てゐ!ちゃんと謝りなさい!」

横にいるうさ耳姉が妹?を叱っている。

「やなこつた!」

「…この!」

「まあまあ、落ち着いて」

俺は横にいるうさ耳姉(仮)の頭をばんぽんとたたく。

「!？」

「まあ見ててくれ」

俺は対象をうさ耳妹（てみちゃんだっけ？）にし俺は腕を横に突出し、腕の後ろに能力を発動。

「こっちに來い」

「やなこっ…!？」

うさ妹は驚いているようだ。

抵抗しようとしているようだが、無駄だ。

俺の能力はやろうと思えば月だって引き寄せることができる。

穴の大きさを調整しないと、彼女に異空間を永遠に過ごしてもらうことになるので、穴の大きさは通って髪の毛1本分くらいにしてある。

「と、捕まえた」

まあ穴に入る前に俺が抑えるんだけどね。

「ご、ごめんなさい!」

うさ耳妹が目を瞑りながら謝ってきた。

「あの！私からも謝ります！ごめんなさい！てゐのことは許してあげてください!」

「れ、鈴仙…」

隣のうさ姉さんもなぜか謝ってきた。いや、俺別に怒ってないよ？

「この子はあなたの妹ですか？」

俺はうさ姉に一応聞いてみる。

「いえ、その…こいつの方が私より、年上です」

「…真面目にか？」

「は、はい！」

「詐欺か！」

見た目からして、絶対今俺が腕で持っているこの兎より絶対隣にいる兎の方が年上！って感じがする…。

人を（妖怪）を見た目で判断してはいけないというのはこういうことをいうんだな…。

「さて、今度はお前が鬼だ…な！」

そう言っただけはてめ（年上とわかったのでちゃん付けはしない）を遠くに投げ飛ばす。

妖怪だからダメージはないだろうし、着地予定地には俺の能力で地面の少し上に留まるようにしてあるので大丈夫だろう。

にしてもよく飛んだな…

「え、えーと」

「ああ、あいつは大丈夫。俺の能力で怪我しないようにしておいたから」

「そ、そうですか！どうも！」

「俺は綾瀬霧夜。君は？」

「私、鈴仙・優曇華院・イナバって言います！」

「……長」

こんな長い名前どこで区切って呼べばいいんだ？それに、どれが苗字でどれが名前かがわからん…。

「すまないが、どうやって呼べばいいか教えてもらえないか？」

「えーと、できればイナバか鈴仙をお願いします。霧夜さんはなぜ永遠亭こゑんにいるんですか？」

「あーさっきまで中に入ってたんだけど追い出さ「霧夜迎えに来たわよ」アッーーーー！！」

いきなり紫さんが来て俺を隙間に落とした。
驚くでしょ！寿命が本当に縮むって！

「霧夜の相手してくれてありがとう」

「い、いえいえ！気にしないでください！」

目の前にいるのは妖怪の賢者とも呼ばれている八雲紫だった。
この人とさっきの霧夜さん…どういう関係なのだろうか…。

「…霧夜がそろそろ地面に着いたところね。貴方の師匠によろしく
言っておいて頂戴」

「は、はい！」

そついうと八雲紫は自分の能力を使って消えた。

師匠に何をよろしく言えばいいのだろうか……

22話（前書き）

フラン倒せて調子に乗って藍もやったら倒せました。
偶には調子に乗ってみるものですね。

今気付いたけど紅魔組と主人公組関わってないな…
次回に期待？

22話

…紫さんや。俺を隙間送りにするのはいいよ。
もう諦めているから。
でも、でもさ……。
いきなり隙間送りにほしないでくれ！

俺は鈴仙さんと話している途中に紫さんに隙間送りにされたんだよ

な。

着いた場所は八雲家の庭。

いつもの場所に戻ってきたらしい。

紫さんはどこにいるのだろう。いつものなら、俺が隙間送りにしてすぐに現れるのだが…

と思っていると目の前から少し離れた位置に亀裂が入って、隙間が開いた。

もちろんそこから出てくるのは紫さん。

「…いきなり隙間送りやめてもらえませんか？」

「いやよ。私の1つの楽しみでもあるんだから」

「…はあ」

もう紫さんの隙間送りのことについては諦めた方がいいかもしれないな。

そうだ。あの時何を話していたか教えてもらおう。

俺に関係のないことだったなら紫さんは教えてくれないから、とりあえず聞いてみればわかる。

「紫さん。さっき何話してたんですか？」

「貴方の魔法が使えない原因よ」

…そうなのか。

もしかして、魔法がもう2度と使えないなんて言われないよな…？

「原因はわかったんですか？」

「ええ。もちろん。大丈夫よ魔法が一生使えなくなるってことにはなっていないから」

それを聞いて少し安心。

それなら何か月かしたらまた使えるようになるのだろう。

「それじゃあ…」

「ええ。貴方がまた魔法を使えるようになるまであと10年よ」

……え？

10年？

どうということなんだ？

「それは…冗談なんですよね…？いつものように俺をからかっているでしょ！？」

「冗談じゃないわ。本当よ」

嘘だろ…。

10年なんて待っていたら俺、20代後半になっちまう…。
そんな年齢になってからまた魔法使い始めるなんて……

「……………原因はやっぱりあの茸なんですか？」

「そうよ。あの茸はただの魔力回復になんて使えない、あれはただ将来使えたはずの魔力を先に使わせるだけの物」

…俺の魔力はあれだけしか使っていないのに10年分なのか…。それはそれで悲しい…。

「……………俺、八雲家から出て行きます」

「…どうして？」

「今の俺だったら紫さんの役には立てない」

「そうね」

「能力があると言っても、大して役には立たない！だからお」「もういいわ」！？」

俺の口が何かでふさがれた。

と思ったら紫さんの手だった。

能力を使って手だけ俺の後ろから出したようだ。

紫さんは俺に優しく微笑みかけながら言った。

「霧夜。私は…いえ。藍や橙だって貴方が役立たずでも傍にいてほしいのよ」

俺の口を塞いでいた紫さんの手が俺から離れる。

「どうして…ですか？」

「どうして…ねえ。変なこと聞くわね。傍にいてほしいって思うのに理由なんていらないと思うけど？」

「……………」

「理由を付けるなら…そうね。私も藍も貴方が好きだからかしら」

「！？」

え！？

いや、うん。紫さんが行った今の好きというのは恋愛とかの方に好き…じゃないよな？

それにしても、力がない俺が傍にいてもいいのか…

「少し、安心しました」

「そう？よかった」

紫さんはそういうと、俺に向かって紫色の物をいきなり投げ飛ばしてきた。

「？」

「貴方に選択させてあげる」

「これ、なんですか？」

「私と藍の妖力」

「！？」

「それを貴方の体内に入れば貴方は妖怪となる」

「……妖怪になってどうしろって言うんですか？」

「別に何かしてもらいたいわけじゃないけれど、妖怪化すれば老化が止まり今の貴方の姿で魔法を使えるようになるだけ。それと寿命がほぼなくなる。それだけよ」

「……………」

「もちろんこのまま10年間過ごしてもいいわ。でも、妖怪化するなら覚悟することね」

「覚悟……？」

「どうということだろうか。」

つまり命が永遠になるから周りの人間達が死んでいくことを覚悟すれと言っているのか？

「人間が妖怪になれる確率は50%程度なの。失敗したら、貴方は死ぬ」

「……！？」

「これはすごい確率だ。」

2人に1人は死ぬということか……。

「まあ、私の記憶でやった人数が2人で1人が成功して1人が失敗したのを見たことがあるだけだから、確率は解らないけれど」

「つまりもしかしたら、成功率の方が高いかもしれないし、失敗確率の方が高いかもしれないということか……？」

にしても流石紫さんだ。

こんな条件だされたら、俺が選ぶのなんて、1つしかないじゃないか。

俺のことを好きって言うてくれる人（妖怪だけど）がいる。

それだけで永遠を生きる価値はある…！

「紫さん、俺やります！そして生きてまたあなたに会います！」

「…やっぱりそういうと思ったわ。藍もきつとそうじゃないかって言うて妖力を渡してくれたのよ？」

俺の手の中で紫色に光っている物を見る。

この中に紫さんと藍の妖力が…。人間が妖怪になるためには他の妖怪から妖力を貰えば妖怪になれるのか…。

「それで、どうすればいいんですか？」

「簡単なことよ。それを体内に入ればいいだけ」

体内に…？それって口から飲むのか？

俺が持っているこの妖力の塊は大体だが、15cm程度あるぞ…？

「それと大事なことだけれど、貴方が妖怪化する場所は私の隙間の中でやってもらうわ」

「隙間の中ですか…？」

「ええ。そこで100年過ごしてもらうことになる」

…100ネン？

えーと。それなら普通に10年間待っていた方がいいような気がするのですが…。

「大丈夫よ。ちゃんと外見はそのままを保っているから。それに1

00年って言っても隙間外では10日しか経っていない風に境界を色々と弄ってあるから」

「…餓死する気がします」

「妖怪になったら食事を取らなくても平気よ。空腹感はあるかもしれないけれど…。それに100年と言っても90年間は眠っているでしょうから」

「…そうですか」

なぜかわからないけれど不安はなかった。
なんでだろうな。

「そうね…藍！こっちに来なさい！」

紫さんが家に向かって言うと藍がこっちに向かってきた。

「霧夜…本当にやるんだな…？」

「うん。大丈夫。絶対生きて帰るから」

「なんで言い切れるんだ？それに私は…」

「なんでかわからないけど、そんな気がするんだ。それに俺は藍や紫さん達と一緒にいたいんだ」

「……………もう私は知らん！」

なぜか顔を赤く染めて家の方に戻ろうとする藍を紫さんが止めた。

「藍。霧夜の見送りを私1人にさせるつもり？もしかしたらもう2度と会えないかもしれないのよ？」

「そついいながら紫様も2度と会えなくなるかもしれないなんて考えてないじゃないですか…」

「そつ見える？」

「はい」

「そう…かもね。霧夜。準備はいい？」

「……………！はい！いつでも！」

危ない。2人の会話ばかり気にしていて自分に声を掛けられたことに気付くのに少し時間がかかった。

紫さんは俺の手から妖力の塊を自分の手に持つと…

「！？」

俺の心臓部分にそれを突き刺した。

え？

体内に入れるって…無理矢理だな。

なんて一瞬呑気なことを考えた途端に体が重くなった。

「…うが？」

声もうまく出せなくなったし、視界も歪んでいく……

「また会いましょう。霧夜。妖怪になれることを祈っているわ」

「もし死んだとしたら亡霊になって私達に謝りに来い。いいな？」

とりあえず頷いておく。藍…死んだら亡霊になって……

死ぬ気はないけれどな！

俺が立っている地面に穴が開いて…多分隙間の中に俺は放りだされた……

「行っ たわね」

「そうですね。1ついいですか？紫様」

「何かしら？」

「なぜ霧夜を隙間の中で過ごさせるんですか？別に地上でやっても
変わらない気がします」

「…藍。私達が妖怪になろうとしている霧夜を見ていたら気が気で
なくなるのは目に見えているんじゃないかって？」

「……………確かに心配にはなるかもしれないですが、それを言うなら
今だって同じ状況では？」

「藍。目の前にいるのと、遠くにいるのとじゃ全然違う物がある
のよ。とりあえず隙間の中には私の式神も入れておいたから安心し
なさい。」

「…わかりました」

そう言って藍は家に帰ろうとするが、紫はその場を動かなかった。

「紫様？」

「ちよつと、霊夢の所に行つてくるわ。今回の異変まがいのことだね……」

「わかりました」

紫は隙間を使つて移動した。

そして、藍はいつもと同じように家事を始めた。
気を紛らわせるために……。

22話（後書き）

今回の話を読んで、

なんだ、テンプレがこの糞作者タヒねと思う人がいると思います。

申し訳ありませんでした。

この話は最初から決めていたことなので批判とか喜んで受け付けます。

では次回も読んでくれるとありがたい

23話（前書き）

藍様倒せて調子に乗ってもこたんやったらいんすることなく終わりました。

調子に乗りすぎると痛い目にあいますね。

23話

「紫様」

「何？」

「今日で10日目ですね」

「そうね」

「霧夜は大丈夫でしょうか？」

「………ちよつと出かけてくるわ」

「………はい」

そう言つて紫様は隙間を開いてどこかへ移動した。

多分冥界に行ったのだろう。

あの日、霧夜を隙間の中へ送つてから紫様はいつもとは違う行動ばかり起こしていた。

睡眠時間がかなり短くなった。いつもは多いときで12時間以上。少なくとも6時間は寝ていたのに、最近は3時間寝ているかどうかだ。

橙は妖怪の山に引き籠つてばかりだ。どうしてかわからないけれど、霧夜が家（こゝろ）に来てから橙が来る回数が減った気がする。

霧夜…。

多分妖怪になれて再び幻想郷に戻って来たならば妖気で居場所がわかるはずだ。

私と紫様の妖力をあいつに注ぎ込んだのだから相当な妖力になっているはず。

早く帰ってこい…………。

魔法の森近辺の道で突然空間が裂けていった。

その中是不気味な黄色い目が外を見ているように見える。そこから、1人の男が出てくる。

「……やっとできた」

そついいながら彼。綾瀬霧夜は久しぶりに幻想郷に妖怪として、戻ってきた。

あの時妖力の塊を入れられ、隙間に落とされた俺は気を失ったかと思っただが、気を失うことができなかった。

それから隙間の中で体を起こすことも儘らない状態になり妖力の力に体を苦しめられていたが、ある時から苦しみが一切なくなり体から妖力が湧いてくるのを感じて妖怪化に成功したんだなと実感した。妖怪化してから気付いたことはお腹が空くけど我慢できる程度になつて、眠気もそんなにないということだ。

つまり1日丸々を起きていることも可能なわけで、暇な時に寝ようと思つても眠気がそんなに湧かないから寝るのも大変（寝ることはできる）なので何か変わったことができないかと色々試してみたところ、紫さんの能力が使えるようになっていた。

紫さんの能力が使えるということ気付いたならなぜ今まで出てこなかったのか：そう言われるかもしれないが、今その能力を使つて出て来たところなのである。

ちなみにそのことを教えてくれらのも隙間の中にいた式神で俺自身は気付かなかった。

隙間の中で式神と弾幕ごっこをやったり、偶に料理ができた時は驚いた。俺よくあの中で約100年過ごせたな…。式神がいなかったら気が狂っていたかもしれない。

しかし、俺にとって数十年ぶりの幻想郷だけど実際は10日しか経ってないんだよな…。

あれ？紫さんの家つてどこだっけ……？

………ま！何とかなるよな！

とりあえず、適当に歩いて行くか。

久しぶりの幻想郷だしな。景色を思い出すのにもいいだろう。隙間

移動はまだ安定して使える自信ないし。もしかしたら藍の能力も使えたりして……。

と思って歩き出そうとすると、金髪の少女が両手を広げながら現れた。

「？」

「あなたは食べられる人類？」

少女は俺にそう聞いてきた。

…俺一応妖怪だぜ？

それと、その口から出ている涎を拭きなさい。汚い。

「俺は妖怪だし、食べれないぞ？」

「そーなのか？おいしそうよ？あなた」

「……………そーなのか」

「うん。でも妖怪ならいいや、じゃあね」

そういうと金髪少女妖怪はまたどこかへと行ってしまった。

一体なんだったんだ？人間に間違えられるって、俺妖力あるはずなんだけどな…もしかして、感じられない程に妖力が極少量だったり！？

まさか…。紫さんと藍という大妖怪な方に妖力貰ってそれはないでしょう……………ないよな？

…俺ならあり得そうで怖い…。

とりあえず、紫さんの家がわからないから里にでも行って見よう。里は確か森の道を辿っていけばそのうちに着くはずだからそのうち着くだろう。

おっちゃんにも久しぶりに会いたいし、妖怪になったぞーって言いにくいかなきゃ。

魔法を使い（妖力でもいいが）空を飛ぶ。
なんか久しぶりに空飛ぶ感じがするな…。魔法が10年使えないって言われた時はどうしようかと思ったけど、今はもう10年どころか100年経って妖怪になったもんな。
幻想郷^{こゝ}に来るまではこんなことになるなんて全然考えてなかったよ。
お。里が見え始めた。
道はあっていたようだ。

現在おっさんの家を探して適当に歩いてるけどなかなか見つからない。

おかしいな…確かこっちの魔法の森近くだった気がするんだけどなあ。
あれ？あっちだっけ？

…能力でおっさんの家の近くで指定して対象俺で道わかるんじゃないか？

……………やってみる価値はありそうだ。

できたよ。

対象を俺の手にしてやってみたらできたよ。

…いつも俺の目で見ている場所じゃなかったら駄目なのかと思ってやったことがなかったけれど、こういう使い方もあるんだな。

これなら紫さんの家もわかるかもしれない。

まあとりあえず、おっさんに会いに行こう。今いるかな…

「こんにちはー」

「…おう！霧夜か！久しぶりだな！」

「俺にとってはかなり久しぶりだな。おっさん最後に俺に会った日

から何日くらい経ってる?」

「何日って…大体10日くらいじゃないか?」

…ということは、俺は10日しかいないことになっているのか。よかった。

「実はさ、俺妖怪になったんだ」

「は?……冗談ももつと笑えるものを言えよ」

「いやいや、冗談じゃないぜ?真面目に妖怪になったんだよ」

「……嘘だろ?妖力もなにも感じないぜ?」

「おっさん妖力とか感じれるの?」

「お前より生きているだ。それくらいわかる」

実際はもう俺の方が年上なんだけどね。

「でも本当なんだって」

「なら、慧音の所に行って聞いてみようじゃねえか。それならお前も文句ないだろ?」

「いいけど、店は?」

「これでよし」

おっさんは店に『本日休業』と札をぶら下げた。
そんな調子で大丈夫か?

「うん。何も感じない」

「なんだってええええええええええ！！？」

現在寺子屋の慧音先生の自室？職員室？わからないけど、そんな感じの所にいる。

おっさんに案内されながら慧音さんの所まで来て事情を説明。慧音さんが俺の力を感じ取る。今の状況。

「でも、お前の歴史を見ると確かに妖怪にはなつたみたいだな」

「嘘……だろ？」

「本当だったでしょ？」

慧音さんが俺の歴史を見たようだ。…能力か何かかな？
おっさんの茫然とした顔が面白いな。

「ででででもよ！！妖力無いのに妖怪ってどういうことなんだ！？」

「そんなこと私が知るか！」

「あんた先生だろ！？何で知らないんだよ！」

「今はお前も教師だろ……！」

夫婦喧嘩が始まったので俺はお暇いとましようかなー。

「じゃあ、俺は家に1回戻りますね？」

「大体お前は……」

「……！」

ああもう人の話聞いてないよ。自分たちの世界に入ってるー的な感じだな。

能力で紫さんの家はわかるみたいだし、折角だから隙間移動で行って驚かせて見ようかな。

ということ、隙間を開いてみる。

空間が裂け黄色い目がかつちを見てくる。おーお不気味なこと。

俺はそこに入って外の空間を閉じる。

えーとここら辺かな？

私は今家の庭で空を眺めている。

紫様はまだ帰ってこないし、幻想郷に強力な妖力も感じないし…まだ霧夜は戻って来ていないのか。

それにしても、何だか暇だな。

霧夜が来てからは退屈することなんてなかったのに…。

前なら時間が余っている時は計算をしたりして暇を潰していたけれ

ど、なんだか今はそんな気も起きない。
やはり、彼が原因なのだろうか。

「!？」

後ろから突然目隠しをされた。

橙か？でも体の大きさからして違う。それでは、紫様なのか…
でも紫様はこんなことするわけがない。そうだとしたら、あとこんなことをする奴は1人しかいないのではないだろうか……。
ここは紫様の家。結界が張ってあるので、並大抵な者では見つけることもできないし場所を知っているものなんてほとんどいない。

「だーれだ？」

ああ、声を聴いた瞬間わかった。
それと同時に安心する。

「霧夜…」

「おう」

そういうと彼は私の目から手を離したので、私はすぐに後ろを振り向く。

「ただいま」

「おかえり…全く、遅いじゃないか」

そう言って2人で笑った。

24話

「……それにしても、妖力をそんなに出していて大丈夫なのか？」

私は霧夜に聞く。

さつきから霧夜の妖力が周りにかなりの密度で漂っている。

「え？妖力？」

「……気付いてないのか？」

彼は今気付いたというような顔をして驚いている。

全く私がそんなことに気付かないとも思っていたのだろうか。

私はこれでも九尾の妖怪だ。

極少量の妖力でも感知することはできるだろうし、ましてやこんなに大きな妖力。

人間でも気付ける奴は多いのではないだろうか……

「いや、里に行っても他の奴ら気付いてくれなかったから……」

気付いてくれなかったというのは妖力のことが……？
それだとしたら………どういことなんだ？

ま、まあ後で紫様に聞けばいいだろう。深く考えないことにした。

どういことだろうか。

おっさんや慧音さんは俺の妖力に全く気付いてくれなかったというのに藍は普通に気付いてくれた。

でも、俺も妖力を自然と出していたのには驚いた……（自覚なし）
もしかして、俺ってもしかして妖力少ないのかな……？

それだからおっさんも慧音さんも気付いてくれなかったという……？

「な、なあ藍。俺の魔力ってそんなに少ないのか？」

「どっちかというとな、多い方だと私は思うぞ？」

「え？」

どういこと？

藍が妖力が多いって言う程だからかなり妖力が多いと思ってもいいと思うが、それならなぜ里の人たちは気付いてくれなかったのだろうか……。

「霧夜が思っている疑問はわかるが、私にもわからない。だから後

で紫様にでも聞いてみよう」

「ああ……そうだな」

藍もわからないなら紫さんに聞いてみるしかないか……俺の幻想郷で知っている頼れる人はあとは紫さんくらいしかないからなつて、そういえば、紫さんはどこに行っているんだ？

「藍。紫さんは？」

「わからない……。多分冥界にでも行ったんじゃないか？」

「そうなのか？じゃあ、行って見るか」

俺は隙間を開いて移動しようとした。

「！？」

「ん？」

「き、きききききき霧夜！何使っているんだ！？」

「何って……隙間移動かな？」

「う……まあそう言われるとそうなんだけど……」

「なんで使えれるようになったかという俺もわからないんだけどね」

原因は紫さんからもらった力の中に含まれていたからなのではないだろうか。というか、それしかないか？

「とにかく、紫さんに会って色々聞いてみるよ」

「わかった。気を付けてな」

「おう」

俺は隙間の中に飛び込む。

たくさん黄色い目が俺を見ているように見えてすごく気分が悪い。

後ろで、隙間が閉まる気配がしたので目的の冥界まで移動するとうよう。

確かあつちらへんだったよな？

と結構適当な感じになってしまっているが実際は能力を使うとき、目に見えている所でも大丈夫だとわかったので適当でもなんとかなるのだ。

お、到着。

隙間を開いて冥界の白玉楼の門の前に到着。

いきなり白玉楼の中に入るのはいくらんでも失礼だと思い、門から入らせてもらおう。

白玉楼の門をノックしても誰も気付いてくれないことが多いが、一応ノックしてみよう。

……………やはり気付いて……………

「どちらさまで……………」

「お、妖夢さん」

くれない。

と思つたら妖夢さんが出て来た。

久しぶりに会うな……………と思つても俺だけなんだよな。

妖夢さんからしたら俺がいたという記憶を失くしている時に会ったのが最後だったはず。

あれ？その時の記憶ってあるのかな？

「霧夜！？……………えーとその前はすまなかった」

「ああ……………別に妖夢さんが悪かったわけじゃないですから、気にしないでください」

「……………わかった。今日は何の用事で来たの？」

「紫さん来てない？」

「今日は来てないはずよ。幽々子様も今日は出かけてますし」

「幽々子さんもないの？……わかったありがとう」
「どういたしまして」

紫さんは幽々子さんのところにいないとなると、どこにいるのだろうか。

妖夢さんは忙しいみたいで俺の用事が終わったことを確認すると、すぐに白玉楼の中に戻って行った。

しかし、藍は冥界（ミョウカイ）にいるんじゃないかと言っていたけれどいなくなるはどこに行けばいいんだ？

……何も思いつかない……。

人里には俺は行ったから紫さんがいたのならば気付いてくれるだろうし、あとは……永遠亭だっけ？

でも永遠亭（行ったのは約100年前だったので記憶があいまい）はいわゆる俺の元の世界で病院みたいな所だから、紫さんが怪我でもしない限り行かないんじゃないか？

それに、妖怪なんだから大抵の怪我ならすぐに治るだろうし。

1回家に戻って藍に相談してみよう。

「それで、戻って来たんだな？」
「うん」

現在家に戻って藍に相談。

何かいい案はないだろうか……。

案というより紫さんが行っていそうな所がわかればいいんだけどな。

「それなら、博麗神社なんかどうだろうか」

「博麗神社？」

そういえば、昔にそんな所があるって聞いたことがあるような気がする。

確か……なんだっけ？

そんなに色んなことを聞いた覚えがない……いや、あったとしても忘れている。

「紫様はそこにいる博麗霊夢に会いに行っているかもしれない」

「へー。博麗霊夢さん？紫さん仲良いのその人と」

「……多分な」

「……多分って。どうでもいいけどさ、案内してくれない？」

「へ？」

「俺博麗神社の場所知らない」

「……でも、紫様にここから離れていいと許可が出ていないんだ」

「許可必要なの！？」

「一応式だからな」

「面倒だな……。仕方ない里で誰か道教えてくれる人探すよ」

「すまないな。あと」

「ん？」

俺が隙間を開いて里に行こうとすると藍に引き留められた。
どうかしたのだろうか。

「お前はもう妖怪になったんだから、少しは自覚を持った方がいいぞ。その力がなぜか他の周りにはわからない奴が多いみたいだけれど。」

ど注意しておくんだぞ？」

「……注意しておくよ。でも、大抵の相手なら負けることはないと思う」

「そうか……。でもこの幻想郷で博麗の巫女は最強。そして彼女の仕事は妖怪退治なんだ。だから、くれぐれも気を付けてくれよ？」

「わかったつてば」

心配してくれるのはうれしいけれど、そんなに心配しなくても大丈夫だつて。

今度こそ隙間を開いて里に移動する。

この能力に目覚めてからなんだか怠け者になって来た気がする。気にしない方向で行こう！

と里に到着。

俺の里の知り合いなんておっさんと慧音さんくらいしかいないので、またあの人たちの所に行くことにしようかな？

でもさつきから少しは時間は経っているとはいえ、2人でもしラブラブしている部分を見かけたら気まずいしな！。

やっぱりそこらに歩いている人に聞いてみるか？

でも幻想郷で博麗神社って所は有名な所みたいだし、そんなことを人に訊いたら

『えーそんなことも知らないの！？』

『キモーい！そんなことも知らないのが許されるなんて、小学生まですだよね！』

とか言われそうな気がする……。

マテ。

なんだこの日本のどこかいそうなギャル風な言い方は……

幻想郷でこんな言葉使いをする奴なんていない気が……いやいない！
って話がずれているが、幻想郷では常識的なことを聞くのはどうな
んだろうか。

でも誰かに聞かないとわからないし……やっぱり慧音さんかおっさんに聞くべきか？

「……ん？」

里の真ん中で突っ立っていると大きな目の箒を持って白黒の衣装を着ている少女がいた。

これは……魔法使いなイメージに箒に跨って飛んでいるという感じがするんだけど、彼女はどのようなのだろうか。

少し派手な衣装で大きな箒。

もしかしたら、ただの掃除をしている人かもしれないけれど……話しかけてみるか。

「すみません」

「ん？私に用かい？」

「はい。貴方は魔法使いさんですか？」

「ああ！私は普通の魔法使い、霧雨魔理沙だぜ！」

「あ……どうも」

なんだ？

話しかける人間違ったかな……自分で普通の魔法使いって言うっちゃつてるよ。

「それで、用つてのはそれだけか？」

「いや、博麗神社までの道のりを教えてほしいんですが」

「あんだ、神社までの道のり知らないのか？」

「外来人なんで、と言っても、もう普通じゃないんですけどね」

「？」

魔理沙さんは頭に？を浮かべた感じになっている。

まあこんな言い方されてすぐに理解できる人なんていないだろうけどね。

「外人なのか……久しぶりに見たな。道を教えるのはいいが、どうやって行くんだ？」

「俺魔法使えるんで方向さえ教えてもらえれば飛んでいきます」

「へえ……」

妖怪ということは一応ばれていないみたいなので魔法使いということにしておいた。

あとなんとなく、魔理沙さんの目がキラーンと光るような気がした。気のせいだと思うけど。

「丁度私も神社に行こうと思ってたから案内してやるよ」

「ありがと「ただし！」へ？」

なんだ？ただしと言うことは何か条件があるということだろう…。

もしかして、弾幕ごっこで勝負だ！

とか言わないよな？

「私の全速力についで来れるなら案内してやってもいいぜ！」

そう目の前の彼女は俺に親指を立てながら宣言した。

25話（前書き）

いつもより長いです。

1週間更新なんだからこれくらいは普通なのかな？

25話

「つまり、貴方について行けばいいってことなんですね？」

「ああ！言っておくが、私は幻想郷最速だぜ！」

そう言っただけで彼女は箒に跨ったので、俺も魔法で飛ぶ準備をする。妖怪というのがばれたらいけないので妖力を使わないように気を付けなければな。

「じゃあ、行くぜ！」

そう彼女が宣言した瞬間に姿が消えてもうどこにいるのかわからない状態になった。

これが人間の時だったのなら居場所もわからずに茫然として、その場に佇んでいただろう。

だがしかし、今の俺は妖怪で人間の時よりも力を探れる範囲がかなり広くなっているみたいで彼女が飛んで行った方向に魔力を感じその方向へと向かって飛ぶことができた。

……反応できたとはいえ、彼女が言う幻想郷最速の速さは変わりないわけで……。

「速すぎだ……」

一瞬彼女の姿を見失ったとはいえ、これだけの距離を離されると追

いつける自信もないしついて行ける自信もなくなる。（今魔理沙さんの姿は豆粒程度）

しかし、紫さんに会うためには（会えると決まったわけではないが）彼女について行くしかないので少し卑怯だが能力を使わさせてもらうことにしよう。

魔法で彼女を追いかけてつづき目で確認できる彼女の地点に能力発動。勿論対象は俺で引き寄せる力は最大にしておく。

妖怪になったおかげ（？）で多少の無理をしても体に負担が少なくなっているので気にせずに行ける。

……って。彼女は魔法使いと言っても人間じゃないのか？

あれ？昔に歳とらない魔女がいたような……どうだっけ？

そんな気もしないでもないけれど、今は気にしている余裕もないので彼女を追いかけるのに集中しよう。

追いつけなくても、見失うことさえなければそれでいいのだから。

数分経った。

飛び続けて数分。

時間になると大したことのないように見えるが、進んだ距離にする結構なものだと思う。

魔理沙さんについていくと（姿はずっと豆粒のようにしか見えなかったが）突然と姿が消えたようにみえ、行方がわからなくなった。

最初は混乱して少しの間立ち止まって（空中で）しまったが、魔理沙さんの魔力がまだ消えた周辺に感じ取れたのでとりあえず近くまで近付いてみることにした。

その場所まで行くのに数秒とかからなかったが魔理沙さんの魔力を感じられなくなった。

ということとは、空を飛ぶのをやめたということなので周辺に神社があるということなのだろう。

……あの場所かな？

少し遠くに（空高く飛んでいるため地上の物が小さく見える）建物らしきものが見える。

きっとそこが神社なのだろう。

彼女の魔力が感じられなくなった時間を考えれば丁度いいくらいか？
流石に神社に全速力で突っ込んで行くことはないだろうし……。

って、俺が全速で行ってどうするんだよ。

スピードを落として神社らしきところへ向かった。

「よくついてこれたな！」

地上に降りて最初に魔理沙さんにそう言われた。

魔理沙さんがいたということは、ここで合っているのだろう。
にしても、意外と遠かった。

これじゃあ一般の人が神社^{こゝ}まで来るのは大変だろう。

「そつえば、お前神社に何の用なんだ？」

魔理沙さんが聞いてきた。

あれ？

神社に行きたい理由を教えてなかったっけ？

教えてもいいけれど、やっぱり紫さんの名前を言ったらまずいかな
……？

確か大妖怪で有名人（人？）だから名前を言わない方がいいな。

「人を探しているんだ」

「人？この巫女か？」

「いや、違うけれど神社によく行くらしいから」

そついうと魔理沙さんはそうなのかといい、境内に入っていった。俺もそのあとを追う。

今のところ紫さんの妖力も感じないし、隙間を使っている感じもしない。

実際は見られてたりして……。

そんなわけないよな……？

「霊夢！遊びに来たぜ！」

魔理沙さんが大声で叫ぶ。

霊夢と呼びかけているから、友人なのだろうか。

神社に住んで居るってことは巫女さんなのだろうか。

巫女さんの娘？

「うるさいわよ魔理沙！大声で叫ばなくてもわかるわよ！」

神社の方から声が聞こえた。

声からして女性だろう。

幻想郷は本当に女性率が高いな……。

男もいるけれど、明らかに女性の方が多い。

別に気にするほどのものでもないけれど。

……境内に入っても妖力も隙間の力も感じない。

ここにもいないのか？

一応ここに住んで居る霊夢さん？に聞いてみよう。

もう妖怪だとばれたとしてもいいや。

何かされそうになったら、隙間能力でさっさと退散させてもらえばいいし。

「あら？珍しくお客さん？」

「まあそんなところでしょうか」

霊夢さんらしき人は巫女……服？を着ていて……ってこれを巫女服と呼ぶのだろうか？

巫女服って腋さらしてたっけ？

……かなり前の記憶がごちゃごちゃになってきた。これはこれでいいのかな？

「私に何か用かしら？」

うーでもいや……もうこれはこれで良いということにしよう！

「聞ってる？」

「えー？……あ、えーとここに八雲紫って来てないですか？」

「！？ 紫に何か用があるの？」

「ええ、恩人なもので」

「そう……今日はここに来ていないわ。それと、言葉は普通にしていいわよ。私も魔理沙も気にしないから」

「気にしないぜ」

隣にいた魔理沙さんもそういう。

そういうことなら、言葉を崩させてもらおうか。

正直言つて、この話方は疲れてしょうがない。

「それで、なんでお前が紫のことを知っているんだ？」

今度は魔理沙さんが尋ねてきた。

確かにそれは気になるよな。見た目は人間で、少し魔法が使えるだ

けに見えて……いる俺が大妖怪なんて言われている紫さんを探しているだなんて。

「俺のある意味恩人なんだ」

「あいつが？あなた大丈夫？」

「大丈夫だ。別におかしくなっているわけじゃないから」

霊夢さんがありえないものを見るような顔をしながら俺に聞いてくる。

まあ、それもわからなくはないんだけどね……。

なぜなら紫さんは、里や他の妖怪達の間では胡散臭いとか何考えているかわからないとか言われているみたいだからだ。

でもそんなことはないと思うけれどな……。

もしかして、俺と藍の前だけとか？

なんてな！。そんなわけないか！。

「それで、それ以外に何か用はないの？」

霊夢さんが神社の賽銭箱をチラチラと見ながら俺い言った。

つまり、お参りして行かないのかということだろう。

俺金持ってたか……？

ポッケを探っている振りをして隙間を開いて妖怪になる前に貰っていたお金を取り出す。

額は5円。

ま、ようは気持ちだから額は何円でもいいか。

賽銭箱に賽銭を入れて礼をする。

こんな感じだっけ？

随分と前のことだから忘れてしまった。

これでいいのかと霊夢さんの方を見るとなぜか微笑んでいた。

「お賽銭ありがとう！」

「そっちかよ！」

なんだと……この巫女お金目的？

「おいおいそんなことお客の前で言っていないのかよ？」

「いいのよ私はお金が1番だから」

「えー」

……本当にこの人巫女なのかな……。

形だけ？

どうでもいいか。

「それじゃ、俺は帰りますわ。また来きます」

俺は2人にそう宣言すると魔理沙さんは、またなーと言ってくれた
が霊夢さんはなぜかこつちを睨んできた。

いや……睨む？どつちかという様子を窺^{うかが}っているだけなのかも知
れないが……

「1つ聞いていいかしら？」

「ああ」

「あなた、妖怪ね？」

！

おう……いきなりばれたか。

なんでわかつたんだ？

しかもこんなに突然。

「どうしてそう思う？」

もしかしたら鎌をかけているだけかもしれないので、聞いてみる。
これってもう俺が妖怪だって言っているようなものな気もしないで
もないが……。

「最初から違和感はあったの。でも、普通の妖怪はこの博麗神社に
は近付くことはない。だから単なる勘違いかとも思っていた」

普通のということは普通じゃないやつもいるんだな。紫さんとか力
の強い妖怪のことかな。

「確信が持てたのはあなたがお金を取り出したとき。そこから微量
ながら妖力を感じた。……魔理沙も気付いていたんでしょ？」

「私は最初から気付いてたさ。でも知らない妖怪が神社に何しに行
くのか気になったんでな。あえて言わないでいた！」

あらら……魔理沙さんにもばれてたのか……。
人里にいたことは何も言わなくていいのか？

「にしても、霊夢気付くの遅すぎだな」

「仕方ないじゃない。久しぶりの参拝客だったんだもん」
「理由になってないぜ」

もしかして、俺2人に遊ばれていたのかな……。
どうでもいいけれど、人間に遊ばれる妖怪（一応）って……。

幻想郷では常識に捕らわれてはいけないのです！

！？

脳内に何か聞こえた気がする……。
って、そんなこと気にしている状況じゃないな今は……。

「それで、俺はもう神社には来ない方がいいのか？」

「いいえ、別に構わないわ。お賽銭も入れてくれたし、いつでも歓迎するわ。でも……」

そこで1回言葉を切って、霊夢さんは懷に手を入れてお札を取り出した。

「1回私に退治されなさい！」

……つまり、弹幕ごっこしようということでもいいのかな……？

弹幕ごっこは隙間のなかで式達ともやっていたので、ルールなどは忘れていない。

「そういえば、名前聞いてなかったわね」

「そういえばそうだった」

魔理沙さんも聞いてくる。彼女が名乗った時俺は名乗ってなかったな……

「綾瀬霧夜だ。よろしく」

「博麗霊夢よ。いくわよ！」

そついうと霊夢はお札を複数俺に向かって放ってきた。
かなり速い。

人間の時だったら訳も分からないまま当たっていたかもしれないが、今は妖怪。

これくらいなら避けれる！

右に避け、空中に飛び出す。

「まあこれくらいなら避けるか」

「霊夢頑張れ！私はお茶をいただいてるから」

「駄目よ」

魔理沙さんは戦闘に巻き込まれないように神社の中に入って行くらしい。

正直2対1にならなくてよかったと思う。

霊夢さんがよそ見している間に大玉3つと細かい弾を少々ばら撒く。そういえば、妖怪になって初めての弾幕ごっこだな。

昔と比べて魔力を消費する感じが少なくなった気がする。

「おつとつと」

霊夢さんが弾幕を軽かわす。

幻想郷最強らしいからこれくらい簡単にかわして当然か。

「その程度じゃ、ないんでしょ！」

さっきの札の約5、6倍の札が飛んできた。

数が多いが、なんとかしなければ……まだスペルカードを使うわけにもいかないしな。

いくらかわすのがうまくなったとはいえ、全部かわすことは難しい。能力を使わさせてもらおう。

対象を札に、穴の場所を霊夢さんの背後。

「！？」

霊夢さんは自らが放った札が自分の元へ返って行くことに一瞬驚い

たが、問題なく札をかわしていた。
初見の時くらい少しは掠ってほしかったな……。

「驚いた……能力ね？」

「そうだ。それと、驚いているように全然見えない」

霊夢さんは不敵な笑みを浮かべながら弾幕を放ってくる。余裕だな！
俺も迎え撃つとしよう。幻想郷最強か何だか知らないが、簡単に負ける気はない！

「なかなかやるじゃない」

「……」

本当に涼しい顔しやがって……。

確かにまだあれから俺も霊夢さんもスペルカードを使っていないが、俺の決まったと思った攻撃を彼女はすべて掠ってかわしているのだ。正直言ってなめられているとしか思えない……。

それと、1つ重要なことに気が付いた。

俺、昔使っていたスペルカード名思い出せない……。

つまり最近隙間の中で作ったスペルしか使えない。

……隙間で修行しているときも昔のスペル使っておくべきだった……。

妖怪になったことがうれしくて、新しい技しか考えてなかったんだ……。

スペルは3つある。

でも霊夢さんはきつとたくさん持っているんだろうな……この3つで決めれるか？

1つは防御用だし、実際攻撃できるスペルは2つしかない……。

「仕方ない。カードを使わさせてもらうか。霊符『夢想封印』！」

4つの光が俺目がけて飛んでくる。

速い！？

もう四方塞がれている……逃げ道がない！

「妖魔『魔法と妖力の結界』！」

俺の周囲に魔力と妖力で作られた盾が現れて霊夢さんの攻撃を防ぐ。だが、俺の手に少し攻撃を防いだ振動が伝わってきた……こんな攻撃くらったら死ぬって。

「あら？防ぐなんて思わなかったわ」

悪い霊夢さん。

言葉返す余裕ないし、ごり押しで行かさせてもらっ……！

「妖魔『100年の靈魂紫雲』！」
「！？」

魂のような形をした弾幕と紫色の弾幕を霊夢さんに向かって放つ。

これは妖力と魔力があってできるスペルカードだ。

どちらかひとつの力しかなかったら俺は魔力切れか、妖力切れで最

後までスペルを発動させることすらできないだろう。

さて、この発動時間は30秒できればこれで少しはダメージをくらってほしい。

というか、これは今出せる最強スペルなので敗れたら勝利は確実になくなると言ってもいいかもしれない。

「……面倒ね。これで終わりよ！神霊『夢想封印 瞬』！」

へ？

霊夢さんがスペルを唱えた瞬間に俺は光に包まれて空から落下し始めていた。

つまり、攻撃が当てられたと認識した時にはもうやられていたというのか……。

博麗の巫女……強すぎ。

そう思っていると地面が目の前に見えたので俺は衝撃に備えながら、目を瞑った。

25話（後書き）

最速は文じゃね？というツッコミはなしの方向でお願いします。

さて。次どうしよう

26話（前書き）

話が滅茶苦茶？

26話

地面に激突して気を失ったかと思ったが、妖怪になった俺の耐久力はかなり大きくなっていたようで普通に意識があつた。

「いたた……」

でも痛みはちゃんとあつた。

意識があるなら痛みもなくしてくれと思う俺は我儘なのだろうか？

「私の勝ちね」

目の前に空からゆっくりと降りてきた霊夢さんが俺にいった。
やっぱり幻想郷最強の名は伊達じゃなかったんだな……。

「これで退治されたってことになるのか？」

「そうよ」

疲れたでしょ？こっち来なさい。

と霊夢さんがいいながら神社の方に行く。

つまり、休んで行っていいということなのだろう。

霊夢さんの後ろについていくと魔理沙さんが駆け寄ってきた。

「お前意外とやるじゃないか！」

「そ、そうか？」

「おう！今度は私と勝負しようぜ！」

「えー違う日にしてくれないか？」

「……仕方ないな。約束だからな！」

「わかった」

どうやら魔理沙さんとも今度弾幕ごっこをしなければいけなくなっ
てしまったらしい。

どうして幻想郷の住民は争い事が好きなんだ？

昔行った山の奴らは問答無用で襲いかかって来るし、地底でもそん
な感じだった気がする。

「魔理沙！！」

「なんだ？霊夢が相手してくれるのか？」

魔理沙さんはどうしても弾幕ごっこがしたいらしいな。

「ええ、してあげるわ」

「なんだって！？」

するとは思っていなかったので思わず声が出てしまった。

俺と戦ってから5分も経っていないって言うのに連戦して大丈夫な
のか？

「魔理沙！私のお茶飲んだでしょ！」

「頂いただけだぜ」

「同じことでしょうが！」

霊夢さんが先に空に飛んで行った。

魔理沙さんはやれやれと言った感じに首を振りながら空へと飛んで行く。

「ケチケチするなよ霊夢」

「うるさい！」

俺は2人の弾幕ごっこをよく見ていることにしよう。

かなり実力がありそうだし、何より隙間の中でやってきたもの（弾幕ごっこのこと）よりはかなり参考になるだろう。

……… なんとというか、2人の実力がありすぎて参考ができない件。

俺あんなに強い人に勝とうとか思ってたの？

馬鹿じゃないの？アホなの？チルノ？

ってか魔理沙さんと後で戦う約束してるじゃん！

これは……あの極太レーザーに焼かれて死に行くようなものじゃないのだろうか。

マスタースパーク？って言ってたあのスペルカードは避けれもしなさそうだし、防げもできなさそうだ。

それを止める霊夢さん。

恐ろしい……。

悪いと思うが1つ言わせてもらう。

妖怪より怖い。

あの人達絶対人間じゃないでしょ。なんであんな攻撃に真正面から向き合えるんだ？

当たったら痛いじゃすまない気がするし……ってそういえば俺も昔人間の時にこれやっていたんだから同じことか？

……昔の俺も人間じゃないのかな……。

いや、でもその時は周りの人たちはあれほど強くなかったからごく普通の人間だったと思いたい。

そういえば、俺はここに紫さん探しに来たんだっとな。

でもここにいないってわかったんだから、もうここに居る意味がないか？

しかし2人に何も言わないで立ち去るってことはあまりにも失礼だし……あの弾幕の中に突っ込んでまで話しかけには行きたくないしな……。

って別に今すぐ戻らなくてもいいか。

2人の弾幕ごっこが終わるまでゆっくりと待たさせてもらうか。

「……ま、まだよ！」

「私だってまだいけるぜ……」

といいつつ2人とも息が荒れてるし、見るからに無理してる。
負けず嫌いだなあ……。

「2人とも今日は引き分けてことにしてやめたら？」

「弾幕ごっこに引き分けなんてないわ！」

「えー」

俺が思わず提案すると即断られた。

断ったのは霊夢さんだ。

魔理沙さんはそれでもいいと言っているが霊夢さんはどうしても引き分けだったら気が済まないらしい。
そうだ。

「今やめてくれたら今度来るときのお賽銭今日の100倍」

「喜んでやめさせてもらうわ！」

「……霊夢さんは餌に弱いな」

「さん付けはなんか嫌だからやめてちょうだい」

「了解」

「私もやめてくれ！」

「了解」

2人とも呼び捨ての方がいいらしい。

普通は嫌がると思うんだけど……幻想郷とあっちの世界だったら違うのかな？

今度紫さんのことも呼び捨てにしたら……こっちはどうなんだろうな！。

と、ようやく弾幕ごっこが終わったので帰らせてもらっかな。

「じゃあ俺は帰らせてもらっかな」

「あら、もう帰るの？」

「もう少しゆっくりして行ってもいいんだぜ？」

「あんたが言うな」

「まだ紫さんを見つけてないからな。また今度来させてもらっよ」

「いつでもいらっしやい。お賽銭持つて」

「私がいる時に来い！」

「善処します」

俺はそういつて空を飛ぶ。

一応隙間移動は他の人には隠しておいた方がいい気もするので、一応神社から見えない位置くらいに来てから隙間移動しよう。

紫さんがどこに行ったのもわからないし、また藍のところに戻ろう。もしかしたら紫さんはもう帰って来ているかもしれないし。

「藍。戻ったよー」

家に戻って藍に戻って来たことを報告。

したけれども返事が返ってこない。藍はどこに行ったのかな？

もしかして、藍も紫さんを探しに何処かへ行った？

困った。

藍がいなければ紫さんが行きそうな所がわからないし、藍までいなくなったらどうすればいいんだ？

橙？

そういえば、昔に橙っていう猫いなかったっけ？

確かマヨヒガって所でよく行動しているらしいけれど……。
行って見るか？

「霧夜逃げなさい！」

背後からいきなり聞こえた声は懐かしい声で、今俺が探している人……という妖怪の声だった。

だがその声は焦っていて、俺に逃げろとそういった。

俺は瞬時に反応することができず、思わず振り返るとそこにいたのは隙間から出てくる途中の紫さんと見たことのない女性2人。

1人は大きな鎌を持っていていかにも死神的なイメージを持てるが、表情は何かに対してすごく面倒くさいといった感じである。どうしたし。

もう1人は王冠みたいなものを被った人で霊夢さんと同じくらいの身長。いや、少しちいさいくらいだろう。

紫さんはこの人たちから逃げると言っているのか？

「あたなが綾瀬霧夜ですね？」

「え？ええ」

地味に紫さんの声のことをスルーして聞いてくる人に返事をする。
なぜ、俺の名前を知っているんだ？というのは一応聞かないでおく
か。

俺に用事があるとしても俺は別にこの人たちのこと知らないんだけ
どな。

「ところで、貴方はどちら様で？どこかのお姫様ですか？」

王冠らしきものを被っていたので聞いてみる。

幻想郷には神様やら色々いるので姫とか王族がいてもおかしくはな
いと思うんだ。

「ひ、姫！？……違います。私は四季映姫・ヤマザナドゥ。閻魔で
す」

……は？

閻魔？

閻魔ってあの地獄に逝くかとか天国に行くかとか決めているあの閻
魔？

悪いことしたら舌抜かれるとかっていう……。
だから紫さん逃げろって言ったのかな？

「霧夜。大丈夫よ地獄とかには連れて行かせないから」

いつの間にか俺の後ろに来ていた紫さんがそういった。

紫さん俺が妖怪になったことには驚かないのね。

いや、こんな状況だから言わないだけかもしれないけどさ……。

「くくく……映姫様がお姫様だって……面白いこと言うね！」

「小町黙りなさい！」
「はーい」

小町と呼ばれた後ろに待機していた女性が閻魔様をからかっている。
なんて命知らずな……！

「それで、閻魔様が俺に何の用ですか？」

警戒しながら俺は尋ねる。

今すぐにでも逃げ出したい気分だが、後ろに紫さんがいるのでなんとか耐えている。

「貴方に説教しに来ました」

「！？」

説教しに来た！？

俺何もしてないよ！

犯罪起こしてないよ！

あれか？妖怪の山に不法侵入したときか！？

俺があたふたしていると閻魔様がコホン咳払いをして……

「貴方は人間から妖怪になり、人の枠を超えろという罪を犯しました」

……なるほど。

そついうことで来たのね。

「本来ならば人が死んだときにそれまで犯してきた罪を裁きますが、貴方の場合もう死という概念がほぼなくなってしまったので今まで人間の時に犯してきた罪を裁きに来ました」

「それで俺のところにわざわざ来てくださったと」

「ええ。素直に私の話を聞いてくれますか？」

……素直ってもこれ俺が全体的に悪いんだから普通聞くんじゃないの？

「わかりました。話を聞くだけでいいなら」

「貴方と違っていい子ですね」

紫さんの方を見ながら閻魔様は言った。

「いい子なのはいいけれど、その内損しそうで困っているわ。今とか」

紫さんは俺の耳元で説教が終わったら家の中に入ってきたさいと言って家の中に入って行った。

さて、多分長いであろう閻魔様のありがたいお話でもいただくとしよう。

27話（前書き）

最近忙しい。ぎちゃーてぎちゃーて

27話

閻魔様……いや、映姫さんの説教というかお話は長く続いてさっきまでお昼だったというのにいつの間にか夕方になっていた。その間後ろで待機していた小町さん（やっぱり死神だった）はぐすかいびきをたてながら気持ちよさそうに寝ていた。説教が終わると映姫さんは、

「また会いましょう」

となぜかまた説教フラグを立ててから小町さんを起こしてどこかへ行ってしまった。

きつと小町さんの能力なのだろうが、俺には何の能力かなんてことはわからなかった。

それで、なぜか今俺は紫さんのひざの上にいる。

「あれ？どうしてこうなった？」

「どうしたの？」

因みに藍はちゃんと俺が説教されている間に家に帰って来ていてた。それで久しぶりの夕食を食べようということになって今準備している（妖怪になったから別に必要ないのだが……）。

その間に紫さんに会って話したいことがあったので、紫さんの所に行くといきなり体の自由が効かなくなつて……ひざの上にいるという状況に陥つたのである。

「紫さん俺の体に何かしたでしょ」

「ちよつと境界弄っちゃつた」

てへつ。みたいな感じで紫さんが言う。

弄つた境界というのはなんだろう……多分体の力に関するものだから、力の境界でも弄つたのかな？

紫さんに膝枕されているという状況は何回か会つた気がするが、なんとなく気恥ずかしい。

こんな状態で俺の今の力のことを話していいのかと悩んでいると、紫さんが話しかけてきた。

「それにしても、よく生きてたわね」

「死ぬとでも思つてたんですか？」

「100%生きていられるわけじゃないですもの。でも生きていてくれて本当によかつた」

そついうと紫さんは俺の頭を優しくなでてくれた。

……恥ずかしいので首を動かそうとしたが、どうやら体全体の力の境界を操っているらしい。首もなにも動かせる場所はなかった（瞬きならできた）

「紫さん俺が妖怪になって幻想郷に戻って来たのにいつ気付いたんですか？」

恥ずかしさを紛らわさせる為。という理由もあるが、紫さんに聞いてみたかったことなので尋ねてみた。

俺が妖怪になって最初に聞いた紫さんの言葉は、『逃げる』というなぜかいつでもありそうな言葉だった。

紫さんが俺が戻っているということに気付いていないで、最初にある言葉を発することは普通ならなような気がするし……紫さんならありそうな気もするけれど。

「戻って来たのはすぐに気付いたわよ」

「そうなんですか？」

「それくらいわかるわよ。それでも大妖怪ですから」

「それならなんで会いに来てくれなかったですか？」

「あの閻魔を少しの間引き留めていたからよ」

「映姫さんが俺の所に来るってわかってたんですか？」

「本来人間が妖怪になるなんてことはあつてはいけないこと。そんなことしたら彼女が黙っていないことはわかっていたわ」

「……なんかごめんなさい」

「いつものことでしょうに」

紫さんは少し困ったように笑みを浮かべてまた俺の頭をなでる。

……照れるからやめてほしいけど、やめてほしくない。って何言っているんだ俺は！

にしても紫さんはいつも俺のことを気にかけてくれているけれど、なぜこんなにもよくしてくれるのだろうか。

ただの幻想郷の『爆弾』でしかない俺をこんなにも気にかけてくれる理由は……？

「ゆか……」

「ご飯ができました。紫様。霧夜。紫様はどうしますか？」

「そうね。私も久しぶりに頂くとするわ」

そういうと紫さんは俺の体を操っていた境界を元に戻してくれたらしく体の自由が効くようになった。

まあさっきのことはいつでも聞けるし、また今度にも聞いてみるでしょう。

さて、久しぶりの藍の夕食だから楽しみだ。

「……」

ご飯を食べ終わったあと藍は夕食の片付けをしてから行くところがあると言ってどこかへ行ってしまい、紫さんは今日は色んなことがあって疲れたから寝ると言って早々に寝室へと行ってしまった。

今俺は月がちょうど見える庭に出て、月を眺めている。

今日は満月だ。

なんとなく今日は眠たくないの徹夜もいいだろうけど、でも紫さんの家で寝ようとしたらきつとすぐに眠りについてしまうのだろう。それにしても、戻って来たんだよな。

幻想郷は本当に幻想的だ。

偶に夜に散歩するのでもいいかもしれない。

俺も妖怪になったわけだし、妖怪に襲われることも少ないだろう…

…。

紫さんの家の結界を超える……と紫さんが感じて（結界を超えたことに）起きてしまいかもしれないので、隙間能力を使って移動しよう。

移動したのは紫さんの家からすぐに出た場所だ。

そんなに隙間移動する必要もないし、隙間移動ばかりしていると周りの景色を楽しむということができなくなってしまう。

それでどこに行こうか。

特に行きたい場所があるわけでもないし、絶景スポットを知っているわけでもない（知っていたとしても思い出せる気がしない）。

適当に歩くのもいいけどどこか目的地を決めて歩くのも悪くわないだろう。

博麗神社の方角にでも行こう。

あ、実際に神社に行くんじゃないやなくてそっちの方向に行くっただけだ。ここから神社は歩いては遠すぎるしな。

森の中を歩いていると様々な妖怪に会ってすごく襲われた。

そういえば俺の妖力は力が強い奴じゃなかったら感じられないんだ
つたと思ひ出して、周囲に妖力を発しながら（自分に影響のない程
度に）歩くと妖怪の姿があまり見えなくなった。

幻想的な風景を期待していたが、別に今日は月が綺麗に見えるだけ
で森の中は普通に暗かったので正面に火の魔法を出しながら進んで
いる。

……そりゃあ夏でもないんだから蛍とかいないよな。

少し期待していたが残念だ。蛍でなくてもよかったんだけど……。

さてこのまま帰るのは少し癪だし、帰ってもやることないな……。

歩くの飽きたから空でも飛ぶか。

空中に浮遊し、その場に静止する。

そこであることを思い出した。

「俺昔のスペル思い出してない」

何てことだ。

前の戦いの時みたいにスペル3枚でなんて無謀な戦いをしないため
に、新しいスペルでも考えることにしよう。

そして今度こそ霊夢に勝つ！

朝……というより昼頃に起きた私は藍の所に行つて、幻想郷の結界を点検しに行つてもらおう思つていた時だった。

ふと庭に目をやると霧夜が大の字になつて横になつていた。

力が弱くなっている様子はないので得に心配はなかったが、何をしているのか気になったのでそちらを優先することにした。

彼は体中汚れていた。昨日私が寝た後にどこかへ行つたのかしら。

「……霧夜昨日何していたの？」

「ちよつと修行を……」

私が聞くと彼は修行していたと言つた。

彼が修行？と少し疑問に思うことがあつた。

彼は私と藍の妖力を持つていたので力の強い妖怪にも勝てると思つたけれど違ふのかしらね。

「どうして修行していたの？」

「昔のスペル忘れてしまつて……新しいスペル考えてたんです」

「それなら私に言つてくれればいいのに」

「へ？」

彼は少し呆けた顔をしていたが私は構わずに彼の頭に手を突っ込んだ。

「ぎゃー!!?」

「我慢なさい」

私は彼の頭の中に境界を少し弄る。頭に手を突っ込むという行為に意味はないけれど、彼の反応がおかしくてついつい悪戯したくなってしまう（実際は頭の中に手を入れているわけではなくて、頭の近くで境界を開いているだけ）。

「どうかしら?」

「……戻った。なんで?」

「記憶の境界を操ったの。昔の記憶を引っ張りだしてきただけ」

「……よくわからないけどありがとうございます。よし!今度こそ霊夢を倒す!」

「あら、霊夢に会って来たの?」

「はい。退治されました」

つまり弾幕勝負で負けたということなのでしょう。

今度こそ倒すと言っても普通に霊夢と勝負しに行ったとしたならそんなに面白くない。

何か面白い案が思いつかないかしら……。

……そうだ。

「霧夜。貴方異変起こしてみない?」

私はそう彼に告げた。

28話

「異変を起こすって……」

それは本来起こしてはいけないことなんだよな？

なんでそれを幻想郷の管理者ともいえる紫さんが俺に起こさなきか？なんて聞いてくるんだ？

「異変って、起こしたら駄目じゃないんですか？」

「ええ。でも最近異変って言っても大したことが起きてなくて暇なのよね」

紫さんはどうやら暇つぶしのために異変を起こせと言っているが、そんな理由でやってしまっているのだろうか。

それに異変と言っても俺にどういった異変を起こせというのだろうか。

「紫さん。俺にどんな異変を起こさせようというんですか？」

「あら、意外に乗り気ね……まだ考えてないわ」

「……ですね。というか、紫さん今どこに行く途中じゃなかったんですか？」

確か最初紫さんの妖力を感じた時はこちらの方向じゃなくて、いつも藍がいる方に向かって行っていたのだ。

「あ、そうだったわ。またあとで話しましょう?」

「ええ」

そう受け答えすると紫さんは面倒になったのか隙間を使って移動した。

この程度の距離なら歩いて行ってもそんなに時間は変わらないと思うけどな……なんてことを紫さんに言ったら隙間送りにされてしまうんだろうな……。

そんなこと口が裂けても言えないな！いや言わない！

それにしても異変を起こすね……。

俺ができることって言っても物を引きずり込むことか紫さんと同じように隙間を使うことくらいしかないしな……。

魔法を使ったとしても魔法を使える人は幻想郷にはたくさんいるし、異変になるくらいに強大な魔法なんて使えないしな……。

昔に起こった異変では吸血鬼が紅い霧を出して日の光を奪ったり、幽々子さんがえーと春度？だかを奪って西行妖とかっていう桜を咲かせようとしたんだっけか？

でもう少しなんかあった気がするんだけど覚えてないや。

俺が起こせる異変ね……。考え付かない。

そういえばなんかもう異変やること決定してるんじゃないか？

まあいいんだけどね。

紫さんの頼み？というか提案だし、断る理由もないしな。

今思ったけど、異変って全部霊夢が解決してるんだよな？

しかも全部力技というか弾幕ごっこで、紫さんも確か負けたとかかなとか……俺なんか本気の紫さんに勝つことすらできないのに……。てか霊夢って何者よ。

いや、普通に博麗の巫女ということはわかってるんだけどさ。

あの子強すぎじゃないか？

だって俺が昨日見た時に修行している様子なんて見えな……。普段魔理沙とかと弾幕ごっこしていること自体が修行なのか？

……霊夢は魔理沙のマスタースパークとかって言う極太レーザーで

さえも防いでしまう結界を使っていたり、俺の目では追えないような攻撃をしてきたり、本当にあの娘たちは人間なのだろうか。だって俺これでも妖怪化してるんだぜ？

なんで弾幕を目で追うことすらできないのさ。

もしかして俺雑魚？

雑魚妖怪？

紫さんと藍という大妖怪から妖力分けてもらってこの雑魚さ……。全く笑えない……。

「お待たせきり……どうかした？」

紫さんが隙間移動で元の位置に戻ってきた。そんなに時間がかからなかったな。

「ちよつと自分に自信を持てなくなったというか……」

「霊夢に負けたこと？」

「そうです」

「仕方ないじゃない」

「でも1撃くらい攻撃当てたかったです」

「そうね。これから頑張ればいいじゃない。別に今すぐに異変を起こせなんて言わないしゆっくり行きましよう。時間はたくさんあるんだから」

「そうですね。妖怪になったから時間は関係ない。でも霊夢は俺たちと違って人間だから」

「そんなの関係なくするのが私たちの能力よ」

「俺が隙間使えるようになったこと知ってたんですか？」

「私が貴方に起こったことを把握していないとも思ってた？」

把握していないことがないというのはそれはそれで怖い、心強いな。

なんか紫さんなら何を知っていてもおかしくないって思えてくる俺の考え方はおかしいのだろうか。

「でも私が知る限りでは貴方は隙間移動しかできないように思うのだけれど」

「え？というത്？」

「……私の隙間移動は境界を弄って行っているということを忘れている？」

「あ……つまり、俺にも境界が弄れるかも知れないということですか？」

「そう。そういう可能性もあるっていること。1つ確認したいことがあるのだけれど、いいかしら？」

「ええ。俺にできることならなんでもしましょう」

「私と霧夜の隙間は同じなのかを確認したいから、この場で隙間を開いて中に入ってくれる？」

「はい」

同じ空間なのかを確認するために隙間に入れということだが、俺が入ったら紫さんも続いて入って来るのかな？

とりあえず俺は隙間を開いて中に入って行く。

相変わらず黄色い目がこちらを見てきていい気分にはなれない。こっち見んな。

今回は移動するというわけではないのでその場に静止していよう。

もしかしたら紫さんと俺の隙間は別という可能性もあるから、5分くらいいたら1回外に出て見ようか。

「！」

上から隙間の空間が避ける気配がした。

これは紫さんだなっと。

「あら、ありがとう」

「いえいえ」

上から紫さんが降りてくる感じがしたので手を前に出して紫さんを受け止めた。

現在俺は紫さんをお姫様抱っこしている状態になっている。さっさと降りした方がいいだろう。きっと紫さんも嫌だろうし。

そう思って紫さんを降ろそうとすると紫さんが俺の首に？まってきた。つまりまだ離すなということか？

「まさか、私のスカートの中を見たりしてないわよね？」

「！！？ししししし、してないですよ！！見るわけないじゃないですか！！」

「もう、からっただけなのにそんなに真面目に返さなくてもいいじゃない？」

「紫さんが変なこと言うからです！」

「はいはい。これで私と霧夜の隙間は同じってことがわかったわね」「そうですね」

そういうと紫さんは俺の所からまだ離れようとはしないで、何かを弄っている。多分境界を弄っているのだろう。

「これでよし」

「何を弄ったんですか？」

「これでこの空間の1時間は外での1分間になったわ」

「えー？」

「私がみっちり境界の使い方を教えてあげるわ」

そついいながら紫さんは俺の顔に顔を近付け、俺の唇に指を当てて

言った。

こんなことされたら俺の心の心拍数がかなり上がってしまうのだが……何回も言うが基本幻想郷の人たちはなぜか美少女が多くて紫さんもかなり可愛いというか美人さんなので、ドキッとしてしまう。

「あら？顔が赤くなっているけど？」

「そういう紫さんだって」

「……そうかしら？」

「そうですよ」

実際全然わからないけれどそう言わなかったら俺の気が済まなかったのだ。

言われっぱなしでもな。赤くなっていたのは否定しないけど……。

「……もう少し気を付けた方がいいかしら……」

「ん？紫さんなんか言った？」

「なんでもないわ。始めましょ」

そついうと紫さんは俺の手から降りた。

「まずは基本的なことからね」

「お願いします」

「いい？いくら境界を操れるようになったからと言って、なんでもできるようになるわけじゃないのよ？」

「そうなんですか？」

「能力を使うときは何かしらの力が消耗されているのはわかる？」

「魔法を使うときでもいいんですか？」

「それでもいいわね」

「なら感じますよ。魔力がなくなる感じが」

「それと同じで境界を操る時もちゃんと力が消耗されるの。いくら私が力のある妖怪だとしても、博麗の巫女や他に力のある妖怪たちの境界は弄れないわ」

「？」

「つまり、あまり力の大きい妖怪や人間だと消耗が激しすぎるから境界を弄れないの」

「なるほど。小さい魔法を使うのと大きい魔法を使うのとだったら、消耗する魔力が違うのと同じことですか？」

「そんな感じね」

まずは紫さんは俺に基本的なことを俺に言葉で教えてくれた。

それで、1つ俺が不安に思っていることができた（この時には紫さんには伝えていない）。

それは俺が境界を弄って隙間移動をしているのか？ということだ。詳しく言うとな俺が移動するときに特に意識しないで隙間を開いているので、その時に境界を弄っているのかがわからないからである。もしかしたら俺ができるのは隙間移動だけで、他の境界を弄ること（境界を張ったり）はできないのかと思えてきた。

まあそんなことは希有に終わったんだけどね。

不安になっていた俺が？^{ほか}だったよ。

最初はなんだかなれないことで全然使えないような気がしていたが、紫さんが丁寧に俺に教えてくれたので少しずつ境界を操ることをで

きるようになっていった。

それと境界を操ると、隙間移動の時とは段違いの量の妖力を持って行かれた。

ちなみに試したのは自分である。

こんなの紫さんや他の力のある妖怪やら人間になんて使えるわけがない。消耗が激しいとは言われていたけれど、こんなに消耗するとは正直思っていなかった。

「こんなところかしら」

隙間の中に入ってから5、6時間経過した気がする。

でも現実時間なら5、6分なんだよな……。

境界を使う能力って本当に便利だよ。その分歳とるけど……妖怪になつた俺には関係ない。

ちなみに隙間の中で境界を弄る時はそんなに消耗が激しくない。

自分の空間だからなのだろうか？

色々と練習するときにはここを使えばいいだろう。

こんなところと言うのは境界の使い方についてのことだろう。

一通り教えてもらったので、あとは自分でアレンジしたり色々と試せということかな。

「わかりました」

「少し疲れたわね」

「そうですね。1回隙間から出ますか？」

「いいえ、ここで寝るからいいわ」

そう言つて紫さんは隙間の中からさらに隙間の能力でベッドを取り出した。

やっぱりなんでもあるな……隙間の中って……。

「しばらく寝るから起こさないでね？それとも一緒に寝る？」

「遠慮します。少し妖力の力にも慣れないといけないので」

「そう」

そう言つと紫さんはベッドに入り、瞳を閉じたと思つたらもう寝ていた。

速すぎる……。寝るスピードがどこかの駄目な小学生並みじゃないか？

妖力の力を慣らすとは言つたけれど、どうしよう。

実際言つとさっきのは単なる言い訳の材料でして、妖力の力はもう慣れている。

さらに言つと妖力より魔法の方の力の方が慣れていない。

なんでだろうな……。

隙間の中で暮らしていた時間いっぱいを全て妖力を使い慣らすのに使っていたからなのだろうか。

きつと魔法よりも使っている時間は多いだろう（隙間内で起きてからすごしていた時間は少なくとも1年以上あるので、現実世界で魔法を使っていた期間より長いのだ）。

魔法の練習するか……。

魔法と妖力の組み合わせ技をもつと強力にできればきつと素晴らしい力になるだろう。

あ、別に悪いことに使おうとかは思っていないぞ？

ただ霊夢に勝つてみたいなーって感じで。

なんでそこまで霊夢にこだわるかって聞かれてもきつと答えられないな。

しいて言つなら最強って言われてるから倒してみたい。みたいな感じなのだろうか。

それと、霊夢を倒したら紫さんに少しは頼ってもらえるようになる

かなって言う期待も少しある。

本当に幻想郷に来てから紫さんにはお世話になりっぱなしで、俺もお礼がしたい。

でも今回も紫さんに手伝ってもらってばかり、俺も紫さんの約に立ちたい。

藍みたいにな、俺にもできることないのかな……。

29話（前書き）

今回短いから日曜にも投稿するかも

29話

「んぎぎ……だぁー!!」

現在紫さんが寝始めてから1時間くらい経っています。

俺は今能力の修行をしています。

隙間に俺の弾幕を撃ちこみそれを自分に向けて当たるようにして、その弾を能力でかわすというもの。

いや……かわすというより、逸らすと言った表現の方が正しいかもしれない。

能力で出せる穴を右と左に配置して弾を真つ二つにしてかわしているのだから……。

これは何の為に練習しているかというと、魔理沙や霊夢のあの巨大な魔法を真つ向勝負で打ち勝つことなんて俺にはできない……気がして、どうにかしてあの技を防ぐ方法はないのかと思って考え付いた方法がこれなのだ。

俺の魔法や妖力の力技で勝てないなら能力で打ち破ってやればいい。俺の能力は確か空の星すらも操ることができるらしいからな。（試したら地球が壊れる可能性があるのでやったことはない）

というわけで練習しているのだけれど、なんとか自分の弾幕は真つ二つにできるようになって来たけれど、他の紫さんとか強力な力を持つ人の弾幕の場合どうなのだろうか。

試してみたいが紫さんは未だに寝ているままだし、藍はこの隙間の中にいるわけじゃないし……そもそもこの隙間の中の空間の時間が1時間で外の空間1分だから藍が家に帰ってきているかもわからない。

黄色い目の気味の悪さは相変わらずだが、なんとなく慣れてきた気がする。慣れって恐ろしい……。

でも本当にどうしようか……また違うことを練習してもいいけれど、それは紫さんに少し指導してもらいたいし今は能力の使い方を練習していたい。

この力を極めればほとんどの攻撃をかわすことができるし無駄な魔法や妖力の力を消費されない。と言っても力は少し消費されるんだけれどね……。

まあ紫さんが寝てからずっと練習続けてきたわけだし、少しくらい休んでおくか。

ふと紫さんが寝ているベッドの方を見ると紫さんはまだすやすやと寝ているようだった。

隙間の中ではずっと浮いているように見えるが実際は歩いている感じで移動できる。下から黄色い目がずっとこちらを覗いてはいるが、それさえ気にしなければ普通に過ごしていられる。

俺は紫さんの方に寄って行ってベッドにもたれ掛るようにして座った。

少し休もうと思って目を閉じた……。

……。

少し目を閉じて休もうと思っていただけなのに、どうやら寝てしまったらしい。何かこのパターン多い気がする……。

「あら、起きたの？」

「……」

俺の目の前に紫さんの顔があった。

いや別にいつものように隣に紫さんが寝ていた（俺が布団に引きずり込まれている）というわけではないのだけれどなぜか、紫さんの顔が目の前にあった。

現状を確認すると俺は寝た時と同じ場所にいたみたいだが、紫さんは俺が寝ている間に起きて目の前に移動していたという感じだろうか……。

「なんで目の前にいるんですか？」

「なんでって……寝顔見ていたいからよ？」

「いつからそこにいたんですか？」

「そうね……大体3分くらいかしら」

ということは紫さんが起きてからあまり時間は経っていないようだな。

起きたのなら俺を起こしてくればよかったのにな……でも、まあ3分程度なのでいいか。

「私が寝ている間に何か新しいことができるようになった？」

「能力を少し。少し付き合ってくれませんか？」

「いいわよ」

「……………だあ！」

紫さんに大玉や普通の弾幕を撃ってもらい俺がそれをひたすら能力だけでよける。

俺はその場に静止して、紫さんの弾幕を能力でよける。

やっぱり自分の撃つ弾幕より紫さんが撃ってくる弾幕の方が数段強い……紫さんに本気でやってくれと頼んだのは間違いだったかもしれない。

だが、声には出さないでおく。
情けないから。

「霧夜。大丈夫？」

紫さんが俺の方を見て心配そうに聞いてきた。

「大丈夫です！任せてください！」

何を任せろというのか……俺は何を言ってるんだか。

本当はもう限界近いというのに……この程度でへばっていたら霊夢に勝てるようになるのはいつくらいまでかかるといえるだろう。

「そう？なら遠慮しないわよ？」

「……………へ？」

紫さんえ？

何？もしかしてまだ遠慮していたんですか？

紫さんは自分が飛んでいる所の少し下らへんに隙間をさらに開いた。
そこからものすごい妖力を感じた。

……俺生きてられるかな？

隙間の隙間の中から大玉子玉がいままでの比じゃない程でてくる。
しかも全て速さがさっきの2、3倍はありそうだ。

「あああああああ！！？」

思わず叫んでしまった。

俺は能力の対象を1つだけしか指定できないというわけではないので、あの弾幕に指定して両方に引っ張ればいいだけなのだが、数が多すぎてその作業すらも遅れ始める。

まず対象にしていた弾幕を全て半分に引き裂き少し安心する間もなく次の弾幕が目の前に迫ってきているのだ。

少し気を抜けば間違いなく体に直撃してしまうだろう。

実際今避けている者も目の前から約2メートルくらいの所で左右にそれているので、このまま攻撃が続けばいずれは自分に当たる……！

「中々耐えているじゃない。もう少し増やしてもよさそうね」

「鬼だ！！」

「あら、私は鬼よりひどいわよ？」

「……勝てる気がしない」

紫さんは今弾幕を放っている隙間の隙間以外にもう1つ隙間を作り始めた。

なんてことをしてくれるんだ……！

このままだったら今の弾幕の2倍の量が俺に降り注ぐことになってしまうじゃないか！そんなことになったら確実に弾に当たる！

でもだからと言って修行だから能力以外使っわけにもいかないし、この場を動くななんてこともしたくないし……なら。

「！……まさか2つまで穴を作れるのは知っていたけれど、3つで

きたなんて知らなかったわ」

2つは今まで通り弾を左右に分けさせる為に使う。

そして、今発動させた3つ目の穴を弾幕全体の後ろの方に指定して弾速を遅くする……！

そうすれば今までギリギリだった弾よけも楽になる！

楽にはなるが自分にかかる負担は大きくなるんだよね……ちなみに3つ目の穴を発動させることに成功したのは、ついさっき1人で修行していた時に試してみたらできたのである。試して見て損なことってないよね。

……本当に負担が大きいな。

この方法なら霊夢の弾幕をかわすのが楽になったり、あの目に見えなかった弾幕の姿を捉えることができそうな気がするが、俺に掛かる負担が多いつてもものではない。

いつもの能力2つだけ使用ならば全然楽なのだが、この方法を使うといつもの3倍は疲れる。

だけどこれを使わなかったら幻想郷の強い人たちに勝てるわけないよね……基本は戦っている相手に使うのもいいかもしれない。

「やるわね……。結界『光と闇の網目』」

「ちょ！？」

待つて！スペルカード使うなんて聞いてないよ！？

「これで最後にしましょうか」

「……！」

俺の周りをレーザーが囲む。

そうか……このスペルカードはレーザーで網目を作ってその場所に向かって弾幕を放つスペルカードだった……。

俺の能力でレーザーを誘導させることはできるのか……？
多分できないだろうから、他の弾幕を能力で避けるしかないのか？
って、俺この場所から動けないんだからさっきと変わらない……？
いや、この場所にレーザーが飛んで来たら終わりじゃないか？
紫さんは俺にレーザーを能力でかわせと言っているのか？

！

考えている暇もない！

目の前にレーザーが来る！

一か八かでレーザーに能力を発動させて避けて見せる！！

ピチューン！

「……ん？ここは？」

「あ！霧夜さん起きた！」

「橙？」

「うん！」

「久しぶりだな……ここどこ？」

「藍様と紫様の家だよ！」

「あー出て来たのか」

「？」

どうやら俺はレーザーにやられて気を失ったらしい。

それで紫さんが俺をここまで連れてきたのだろうか……橙が目の前にいたのは予想外だったが。

にしても負けちゃったかー。

多分負けるような気がしてたけどできれば、弾幕を全てかわしきつたあとに倒れるって感じの方がよかったな……。どうせ倒れるとしたらね？

「今って時間いつくらいなんだ？」

「夕方かな？藍様がもうすぐ日も暮れるから霧夜さんを起こして来いって」

「なるほどね……」

朝くらいから隙間に潜って隙間から出たら1日終わってるってか。

酷い生活だな……。

「霧夜」

「あ、紫さん」

「紫様……」

俺が橙と話していると後ろから声が聞こえて振り向くと紫さんがいた。

そして、なぜかにやにやと俺を見て笑っている。何か面白い状況になっているのか？俺……

「霧夜。さっきの弾幕のことだけれどある程度はよかったわよ」

「へ？あ、ああ。ありがとうございます……」

「レーザー系の弾幕は霊夢は使わないから安心していいと思うけど、もしああいふ弾幕が来たときは受けようと思わないで、避けることを心がけてね？」

「はい。わかりました」

俺がそう返事すると紫さんは微笑んで、今日1番の衝撃的なことを口にだした。

「それと明日、紅魔館に行くわよ」

「は……？」

俺は思わず茫然としてしまった……。

30話（前書き）

<http://twitter.com/#!/ginnnoge>
nnsou

ついたー

意外に小説のことやら何気ないことつぶやいてるので、気になる人はどぞー

30話

「やだやだやだ！！絶対吸血鬼の館なんて行きたくない！！」

「……まさかここまで拒否反応を取られるとは思ってなかったわ…

…」

昨日の吸血鬼の館に行くわよ発言があつた次の日に俺は紫さんに抵抗していた。

俺現在抵抗中です。大事なことなので2回言った。

紫さんがまさか吸血鬼の館、紅魔館に俺を連れて行くなんてことをするなんて夢にも思っていなかった俺はすごく嫌です。

しかも俺言つてなかった気がするけど、吸血鬼ものすごく怖いんです。

小さいころに吸血鬼がでるホラー映画見て、それがものすごくトラウマで……でもあつちの世界だったらいないってことはわかってたからあんまり日常には関係なかったけれど、幻想郷には吸血鬼はいる！

そんなところを訪問とか死ににいくようなものじゃないか！！

「……1つ言っけど霊夢よりは吸血鬼の方が弱いのか？」

「そついう問題じゃない！」

例え男の（・・）吸血鬼が妖精程度の弱さだったとしても俺は絶対に行きたくない！

あの牙をむき出しにしてがーって迫られただけで俺は気を失う自信がある！

「どういつ問題よ……」

「とにかく無理なんですって……」

「仕方ないわね……無理矢理にでも「甘い！」！？」

前までの俺ならここであえなく隙間送りになつて紫さんの思つている場所に強制移動させられるが、隙間能力を得た俺は隙間が発動する瞬間がわかりそれを未然に防ぐことができた。

俺は紫さんの手を軽く押さえつけて隙間を発動させない状態を作る。

「……境界の使い方少しはうまくなったのね」

「こんな時に呑気に考察してていいんですか？」

「ええ。あたなが私から逃げ切るのはあと1000年早いわね」

「なら今回だけは抗わさせてもらいます！」

俺は隙間を開いて移動。

そのままその場にいたら紫さんも隙間に入ってきてしまうので、すぐに移動。

そして昨日教わったばかりの境界を使って自身の妖力と魔力を境界で封じる。こうすることで、少しは紫さんに見つかりにくくなるかと思つてやってみたがあんまり意味はない行為なのかもしれないな……。

一応魔法と妖力は使えなくなるが、能力があるから空は飛べるので力の強い者と戦ったりしなければ問題ないだろう。あとは紫さんに見つからないように隠れるだけだ。

移動したのは博麗神社。ここなら1発で紫さんがここに来ることは

ないと思ってここに移動してきたのだ。
霊夢はなにやら境内を掃除している。

「あら？また来たの？」

「いきなりで悪いんだけど、ちょっとかくまってもらえない？」

「誰からよ……でも面倒ね」

「紫さんから。それとほい」

少しというかなんり神様ばかりにしている行為になるが寶銭箱に50
0円を投げ入れる。

「是非隠れて行って！中に入っていていいわよ！」

「ありがとう！」

「でも最近まで探していた人から逃げるなんて何したの？」

「……あとで話す」

「わかったわ。紫が来たら来てないって言うておくけど、そっちで
ばれても責任は取らないわよ？」

「十分！」

俺は霊夢に許可をもらったのでこないだ家に入れてもらった所まで
行って扉をしめてしばらく隠れていることにした。

「……あら紫じゃない。何か用？」

「霊夢ここに……えーと黒髪で人間みたいな妖怪こなかったかしら
？」

「何よそれ、知らないわよ。ここに来る妖怪に黒髪なんて天狗くら
いしかないわよ」

「そう……。ならいいわ」

どうにか……ごまかせたのか？

ふう……紫さん少しシヨック受けてた気もしたけど気のせいだよな……。

隙間を発動させる気配もしたし、多分しばらくはここにいっても大丈夫だろう……でも最終的には連れてかれるのかな？

いつもなら従うだけだが今回だけは反抗させてもらおう。

にしてもなんで吸血鬼の所に行くのか聞いてなかったな……行くことが嫌すぎて聞く気にもなれなかったけど。

だけど博麗神社（こゝろ）にいても稼げる時間は精々1時間持つか持たないかだろう……境界の力で魔力と妖力を隠しているとはいえ境界を使ったら後がばれたらすぐに居場所がばれてしまう。

でもなんで気付かないのだろうか……紫さんは俺よりもずっと昔から境界の能力を使っているのだから、俺が境界の能力を使ったことくらいすぐにわかってもいいはずなのに……。

まさか、わざと気付いてないふりをしている……！？

……妖力とか力を全て俺自身の力を封じているせいなのか周りの妖力や魔力を感じ取ることができない。

「紫ならどっかいったわよ」

「……そうか」

突然扉を開けて霊夢がこちらに来たのに驚いたが、紫さんがどこかへと行ったことを聞いて少し安心する。

「で？何されそうなの？」

「紅魔館に連れて行かれそうになってる」

「紅魔館？レミリアが居る所に何の用が……？」

「わからない。でもなんでか紫さんは俺を連れて行こうとするんだ」

「……それって絶対行かなきゃ駄目なの？」

「多分連れてかれるよ。いや、確實って言ってもいいかもしれないな」

「なら1つ教えてあげるわ。きっと吸血鬼の姉、レミリアはいきなりは攻撃してきたりはしない。でも妹のフランドールには気を付けた方がいいわよ」

「えーと特徴とか教えてもらえない？」

「妹は黄色い髪に羽の色が七色に光っているからすぐにわかると思うわ」

姉より妹の方が危険と。

って吸血鬼に会わないってことにはできないのかよ……吸血鬼の住む館とはいえ2人（2体？）しかないんだから会わない可能性だってあつていいはずだ。

「ま、頑張りなさい。私には関係ないことだし」

「他人事だな……実際そうだけど」

「何しに行くのかは知らないけれど異変になるような事態だけは避けてよね」

「……善処します」

これからその異変を俺自身が起こそうとしているだなんて絶対に言えない……言ったらどうなるんだろ……。

！

「お邪魔しました」

「？ また（お寶銭持って）いらっしやい」

「はい！」

隙間が開かれるというか近くに感じたので俺も隙間の中に潜りこんだ。決着は他に迷惑が掛からないところでつける！

「……あいつが隙間を開いた？ それとも紫が隙間を開いたのかしら……」

霊夢は少しの間考えこんでいたが、気にしないことにした。

「あらそつちから戻って来たのね」

「まあ……そうなりますね」

「それで紅魔館に行く気になれたのかしら？」

「まず行く目的を教えてください」

「……聞いてなかったの？」

「……すみません」

「紅魔館の図書館に用があるから貴方にも手伝ってもらいたいことがあるのよ」

「吸血鬼姉妹に会う可能性は？」

「80%くらいね」

高い……。

けれど会わない可能性も20%もあるじゃないか。きっと吸血鬼って……あれ？

そついえば、霊夢もさつき行つてて俺も今さらつと言ってるけど吸血鬼って女の子！？

「勘違いしてた……行きましょう！ 紫さん！」

「え？ ええ。行きましょうか」

なんだ吸血鬼って言うから男で牙丸出しで品も理性もなく襲って来るようなやつ（昔ホラー映画で見た感じの奴）じゃないんじゃないのか？

例えそんなだとしても……それだったら速攻で逃げよう。

いくら吸血鬼が速いとしても隙間の速さとくらべたら遅いに決まってる。

「着いたわ」

隙間を解除して地面に着地して……両手を前に出して紫さんを受け止める。

「なんで毎回俺と一緒にするのはこうするんですか？」

「いいじゃない」

「いいですけどー」

紫さんを降ろして周りを確認してみることにした。図書館は少し薄暗くよく確認してみると周りは本棚しかなかった。

さすが幻想郷の図書館。俺が前いた所では考えられない量の本が置いてある……いや俺がいた世界の世界最大の図書館と比べたら俺の世界の方がでかいけれど……。

さていつ吸血鬼が襲って来るかわからないから常に気を付けていよう。

図書館はすごくかび臭かった。これは本が腐っているのか？

風通りがよくないから本が駄目になってしまったものも少しはあるのかもしれない。

そういえば紫さんは図書館に用があるとは言っていたが、図書館に何の用事があるのか全く聞いてなかった……。

なんだろう。やっぱり調べものなのかな？

さつき声をかけて来た魔法使いの人もやはり女の人だった。
今は薄暗い中本をひたすら読み続けている。

……視力悪くならないのかな。

目の前で本を読んでいる人は俺よりも背が低くて紫の髪の毛が地面につきそうなくらい伸びている。

「なあ」

「何」

「こんな暗い所で本読んでて見が悪くならないのか？」

「ならない」

「……」

会話が続かない……。

いや会話をする必要はないか。

彼女は俺から何か危害を加えない限り攻撃してくることはなさそうなので、黙って紫さんが帰って来るのを待っていた方が安全に終わりそうだ。

あと1つ気付いたけど俺っておとり役だよな……きつと。

「来る」

「え？」

「貴方、逃げた方がいいかもね」

つまりこの館の主がやってくると言うことか？

あ、俺妖力と魔力の境界まだ封じたままだった。これならただの間違って見られても仕方ないよな。

このままの方がいいか？

いや、餌にされる可能性もあるのでここは魔力と妖力を解放しておこう。

「!!」

何かが飛んで来る気配がしたのでそれを魔力で盾を作って防ぎ後方へ能力を使つて後退した。

これを行うことで魔法に集中できるので結構便利である。

「大丈夫ですか？パチュリー様」

「ええ。問題ないわよ」

さつき俺が立っていた所に銀髪のメイドが立っていた。

彼女がこちらの時を止めるメイド……か。

紫さんが帰つて来るまで持つかな……？

「その貴方はどうやってここに侵入してきたのかしら」

「……」

「紅魔館のどこかを破壊して侵入して来た形跡もないし、今ここに来なければ侵入されていたことにも気付けなかったわけだし」

どうやら紫さんと侵入してきたことはばれてなかったらしい。

ならばこちらの主がここに来るとしてもしばらくは時間がかかるのではないだろうか。

さつさと紫さん用事を済まして帰つて来てくれないかな？

「大人しくしてるからもう少しここに居てもいい？」

「駄目です。許可なくこの館に侵入してきた者は排除します」

「……けち」

「……………」

「いいじゃない。咲夜」

「……!?!」

図書館から出る扉からさらに違う声が聞こえると同時に巨大な妖力も感じた。

……まさか。

「侵入者でも、面白そうだから大目に見てあげても私はいいわよ」

紅い瞳に彼女の背と同じくらいの翼。

霊夢が言ってた黄色い髪で7色に光る翼を持っていないのできつと姉妹の姉の方だろう……。

少し微笑みながら紅い目で俺を見ていた……。

30話（後書き）

どう見ても2次設定な霊夢です。本当にありg（ry

31話（前書き）

レミィの口調が変かもね。

うー 日曜更新しなかったらこんなにギリギリにならなかったのに
I

31話

紫さんはやく帰って来ないかな……。

今吸血鬼らしき少女が紅い瞳でこっちを見ながら羽をバサバサさせている。正直言って羽を動かす意味がわからん。

どうやらまだ敵意とかそういうのはないと思ってもいいのだろうか……。

「ですがお嬢様！」

メイドさんが吸血鬼少女に何やら抗議しようとしているのか、どうしても侵入者の俺を倒したいらしい。

いや、殺したい。の間違いかな？さっきだってナイフ飛んできたし当たったら死ぬでしょ。

うーむ、この間に逃げてしまいたい。

紫さんはごっこ遊びじゃなくていいとは言ったものの逃げていいとは言っていないわけで、つまり戦いになっても逃げれないんだよね……。

妖怪になったから死にずらくはなっているだろうけれど、攻撃を食らったら痛いし……。

「咲夜。お茶の準備を」

「……わかりました」

そう言つてメイドさんはどこかへと消えた。
時間操作能力でも使つてどこかへ行つたのだらう。

「待たせたわね。折角こんなところまで来てくれたんだから、私の部屋にいらつしゃい」

「……」

来たくて来た分けではないのですが……。

彼女はそう言つたあと図書館を出て行つてしまったので、このままここに居ようかとも思つたが結局付いて行くことにした。

後でそうしたら弾幕を浴びさせられる気がしたからだ。

廊下に出ると紅い絨毯が引いてあり、長い道が続いていた。

これだけ大きいというのに絨毯にはゴミ1つ見当たらない。掃除が大変そうだな……。

「歩いて行くと面倒ね……貴方飛べるでしょう？」

「あ、ああ……」

「なら私に付いてきなさい」

そついうと彼女は羽を靡^{なび}かせて廊下を飛び始めた。

……そこまでしないとイケないくらいここ広いのか？

俺は魔力と妖力、どっちを使つて飛ぼうか少し悩んだが魔力を使つて飛ぶことにした。

そついえば彼女は俺が妖怪だつてこと知っているのかな？

力が強かったり妖気とかに敏感な奴ならきつとわかると思うけど、実際彼女はどんなんだろうか。

見た目ならただ羽の生えた少女。

見た目は。

きつと見かけによらず強いんだろうな……。

イメージでは接近戦が強い気がするな。吸血鬼って言つたら牙で噛

みついて来たり、爪で敵を引き裂いたりしそうなイメージがある（映画ではそうだった）

「ここよ」

なんてことを考えていたらどうやら目的の場所に着いたらしい。もう少し遠くてもよかったのに……。

扉を開けて彼女が先に入って行っただので俺も後に続いた。

部屋の中は……やはり紅い色が多いな。

この部屋は得に変わったところにならない普通の部屋だった。

またまたイメージでは部屋中が血まみれで人間の死体がゴロゴロ転がっているイメージがあったのだが、そうではないらしい。

ちなみにこれも映画で実際あった。

幻想郷の吸血鬼の認識を少し変えた方がいいかな。

彼女は部屋の真ん中あたりにあったテーブルのイスに座った。

その横にさっきのメイドさんもいた。

いつの間に……。

「座っていいわよ」

自分の目の前にあるイスを指さして彼女が言った。

何か仕掛けがあった時の為に微量の魔力を体に纏っておこう。

魔力消費は少し辛いけれど、命に係わる攻撃を仕掛けられていたら困るからな。

でもこんな微量な物で大丈夫かな……？

とりあえず、イスに座ってみる。

得になんともなかった。

「それでどうやって紅魔館ニルに来たのかと、何をしに来たのか教えてくれるかしら？」

「……………」

これは……………言っても問題ないよな？

「隙間移動で来た。何をしにって言われても俺は知らない」

「隙間移動？まさかあの妖怪が来ているの！？」

「多分あなたが考えている奴でいいんじゃない？……ん？」

話している途中に俺の少し上に小さく隙間が開いて紙がひらひらと落ちてきた。

「何？」

「……………」

俺は黙って紙を見てみる。

霧夜へ。用事は済んだから貴方も連れて帰ろうと思ったけれど、吸血鬼と仲良くやってそうに見えたのでおいて行くことにしました。戻ってこれるようになったらいつでもいいから戻って来なさい。いいわね？

「……………」

「それなんなのよ！」

見せたくもないので、俺は火の魔法で跡形もなく紙を燃やした。

「ちょっと！見せてくれてもいいじゃない！」

「……………嫌です」

手を横に振りながらそう言ってきた。
なんだか可愛く思えてきた。

「用事が終わって彼女は帰った見たいです」

「そうなの？私に何か用事あったわけじゃないのね」

「ええ。あなたには特に用事があったわけじゃないので」

「……さつき貴方何をしに来たか知らないって言わなかったかしら……」

「気のせいだ。それじゃ俺も帰っていいか？」

「待ちなさいよ。折角お茶入れたのに飲まないで帰る気？」

いつの間にかテーブルの上にお茶？らしき物が乗っかっている。
これを飲んでから帰らなきゃいけないのかな？

「そろそろ名前くらい教えてくれてもいいんじゃないかしら？」

「え？……綾瀬霧夜。一応妖怪」

「やっぱり妖怪だったのね。微量ながら妖力らしきものを感じてたけれど、貴方だったのね」

「で、あんたは？」

「私はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主よ」

「随分と小さい主様で」

「身長は関係ないでしょ！」

少し怒り気味の紅魔館の主さん。

そうさせたのは俺なんだけどね。それにしても、隣にいるメイドさんは何にもしゃべらないな……。

そういうメイドとかって言う職業（？）についている人から見たら常識なのかもしれないけれど、俺から見たらすごく違和感がある。

「レミリアさん。隣のメイドさんの名前は？」

「十六夜 咲夜です」

レミリアさんより先にメイドさんが答えてくれた。これで一応2人の名前を呼べるようになったんだな。

と、さつきから放置しているお茶を少し頂く。

……おいしいな。

「……ねえ咲夜」

「なんですか？お嬢様」

「彼の實力。少し見たいとは思わない？」

「……私はお嬢様に従います」

ん？

俺が和んでいる間がないやら不穏な空気が漂っている気がするよ……？

「というわけなの。それで咲夜と少し遊んでもらえるかしら？」

「嫌って言っても強制なんですね。わかります」

咲夜さんが両手に1本づつナイフを持っていて俺に向けて投げてきた。

仕事早いな……と思いつながら俺はそのナイフを人差し指と中指の間に挟めてその勢いを止める。

これは魔力を纏っているからできることであって、纏っていないければ血がでるところの騒ぎじゃないだろう。

「へえ……中々やるわね」

レミリアさんが言った。

いいね貴女は高みの見物ですか。

「返す」

そう言つて俺は咲夜さんに掴んでいたナイフを投げる。

それを咲夜さんは身を少し屈めてかわした。そして俺の横に魔法陣が現れてそこからナイフが飛んできた。ナイフ好きだな。

と横からのナイフをよけるのは面倒なので能力を発動させて少しナイフの軌道をそらす。

ナイフの飛んで来るスピードがあまり速くないので少しだけ余裕がある。

「！」

「あなた能力も持っているのね？」

「……」

戦闘中に部外者が話しかけてくるのを、返事する必要はないよな。俺はばら撒き弾をたくさん撃つて咲夜さんに被弾させようとしたが彼女がいきなり消えて、変わりに俺の周りにナイフがたくさん現れた。

「幻世『ザ・ワールド』」

……なるほど、スペルカードを使ったのね。

これはどうやってかわそうか。

全方向からナイフが迫ってくるので前方方向に大玉を撃つて前方のナイフを吹き飛ばし、横と後ろから迫ってくるナイフを能力で違う方向へとばらさせる。

「……やるじゃないの」

「お、久しぶりに声聞いた」

咲夜さんが俺に向かって久しぶりに話しかけてきたので思わず反応

してしまった。

「お嬢様。これくらいでいいですか？」

「ええ。満足よ。下がっていいわ」

ふう。どうやらこれで戦闘は終わっていいらしい。

どちらも怪我をしなくてよかった。

「!？」

「!!」

「!!!？」

と一息つこうとした瞬間に紅魔館のどこかからものすごい音が聞こえた。

え？何？

まさか紅魔館^ニって他に何かペット見たいな物を飼っていたりしたのか？

「ま、まさか……」

「私が見てきます！お嬢様！」

「咲夜!？」

咲夜さんはそう言つとレミリアさんの言うことを聞く間もなくどこかへと消えてしまった。

「咲夜!!」

レミリアさんはそう叫びながら廊下に出て行った。

……俺どうすりゃいいんだ？

31話(後書き)

Ten little Indians went out to dinner.

One choked his little self, and then there were nine.

Nine little Indians sat up very late.

One overslept himself, and then there were eight.

Eight little Indians travelling in the Devon.

One said he'd stay there, and then there were seven.

Seven little Indians chopping up sticks.

One chopped himself in half, and then there were six.

Six little Indians playing with a hive.

A bumble-bee stung one, and then there were five.

32話(前書き)

Five little Indians going in for law.

One got in chancery, and then there were four.

Four little Indians going out to sea.

A red herring swallowed one, and then there were three.

Three little Indians walking in the Zoo.

A big bear hugged one, and then there were two.

Two little Indians sitting in the sun.

One got frizzled up, and then there was one.

One got frizzled up, and then there was one.

He went out and hanged himself.

and then there were none.

32話

「……………」

咲夜さんがどこかへ消えて、レミリアさんもどこかへと向かって俺はただ茫然とその様子を見ていただけなのだが……………どうするべきなんだろうな……………。

少し考えればわかるが、これは今逃げれるチャンスである。

これを逃せばいつ帰ることができるようになるかわからない。
でも……………

「うーん。やっぱり放っておけないな」

彼女は俺が嫌いな吸血鬼みたいに見えないし、それに勝手に侵入した俺を許してくれる優しい人（人？）だからな……………。

それにさっきの音はただ事ではない音だったから人間である咲夜さんのことが少し心配だ。

まあ時を止めれるのだからやられるわけはないだろうけれど……………。

でもなんだか胸騒ぎがする。この際ばれてもいいから隙間移動で彼女たちがいるところに行こう。

「ねえ咲夜。さっき弾幕ごっこしてたのは誰なの？」
「……」

咲夜と悪魔の妹と呼ばれているフランドールは地下と紅魔館の間で争っていた。

弾幕ごっこと言うよりはただの殺し合いと言った方がいいかもしれない。

フランは先ほど感じた咲夜と戦っていた、紅魔館^{こくまかど}にはいないはずの妖力の正体について聞く。

「それは、お答えできませんわ」

「そう……なら、探すまでよ！」

「……っ！」

フランの放った弾幕を咲夜は時を止めてかわそうとするが、フランの前では意味をなさない。

フランの能力はありとあらゆるものを破壊する程度の能力。フランの前では咲夜の能力さえ壊されてしまうのだ。

「……あ」

空中から降ってくる弾幕を避けようとして後ろに下がった瞬間に咲夜の目の前にはフランの弾幕が迫っていた。

これはよけれないと思い、咲夜は思わず眼を閉じて……

「……？」

いつまでたっても衝撃が来ないので目を開けて見るとそこにはさっ

きまで戦っていた客人の姿が見えた。

さっきの物音がした所らへんに隙間移動して辺りを確認すると、少し遠くの方で争っている音が聞こえた。争っている音がする方向に急いで行くと咲夜さんと誰かが争っているいた。

見ると咲夜さんの目の前に弾幕が迫っていた。

咲夜さんは人間だからこのまま放っておいたら弾幕で怪我をしてしまうだろう。でも俺は妖怪だし、それに能力を使えば無傷で済むので能力で弾幕をこちらに引き寄せ空間に引きずり込んだ。

咲夜さんの近くに寄ると彼女は目を瞑ったまま動かない。意外と可愛いところがあるのかもしれない。

そして横を見ると、不気味な羽をはやし金髪の少女がいた。

彼女が……彼女が吸血鬼の妹。フランドールさんか……。

「お兄さんは誰？」

「ん？俺は綾瀬霧夜。ただの妖怪だ」

「へえ……ならさっきの妖気はお兄さんのかな？」

「そうじゃないか？」

後ろの咲夜さんを気にしつつフランドールにも気を付けなければ……さっきから殺気を飛ばしてきている。

俺が何をしたって言うのさ……そんなに殺気を飛ばさなくてもいいじゃないか。今会ったばかりなのだから……。

「フラン！霧夜！」

「お姉さま……」

「レミリアさん」

どうやらレミリアさんもここに到着したらしい。いつの間にか咲夜さんはレミリアさんの後ろに待機している。行動が早いな……さて、この子をどうするものか……きっと俺と弾幕ごっこしたいとかいいだすんだろっとな……。

「フラン部屋に戻りなさい」

「いやよ」

「どうして」

「お姉さまばかりずるい！この妖怪と弾幕ごっこしたならフランもしたい！」

なんという我儘……いや、仕方ないのか？

吸血鬼の妹は確か外に出してもらえないみたいだし、鬱憤が溜まっていてもしょうがないのではないだろうか。

でもなー。この子（子と言っても絶対俺より年上だけど）弾幕ごっこかなり強いらしいって、霊夢も言ってた……霊夢？

霊夢に勝てるように頑張っているのにこの子に負けるのならば、まだまだ俺は霊夢に勝てないのではないだろうか……。

「よし。フランドールさん。相手してあげるよ」

「本当！？やった！じゃあはやくやろっよー！」

「霧夜！？フランもやめなさい！」

何やらレミリアさんが戸惑っている。

別に弾幕ごっこくらいやって大丈夫じゃないのか？

「霧夜！」

レミリアさんが俺の方に寄ってきて俺に耳打ちする。

「やっぱり貴方は下がっていなさい。ここは私が何とかするわ」

「あれ？お姉さまが相手してくれるのかしら？」

「待ってくださいよ。フランドールさんが…「フランでいいわ」フランが勝負をしたいのは俺ですよ。だからレミリアさんは下がって
いてください」

「客人に怪我させるなんて、紅魔館の主としてさせれないわ」

レミリアさんはそう俺に言った。

でもな……それでフランが満足するとは思えないんだ……。今まで
の経験上絶対何か文句を言ってきたような気がする。

「もういいわ。2人で私に掛かってきなさいよ!!」

「「「!?!?!」」」

突然フランがそう言うって俺とレミリアさん、それと咲夜さんに向か
って大量の弾幕を撃ち始めた。

我慢の限界が来てたんだな……。

さて、どうしたものか……これくらいの弾幕なら避けれるしレミリ
アさんも余裕で避けれるだろう。

でも咲夜さん大丈夫かな……？

さっきも1人でフランの相手をしていたけれど、少し怪我してたよ
うにも見えたからフォローしに行きたいけれどそんな余裕もこっち
にはない。

「咲夜！」

「お嬢様！？！」

どうやらあつちにはレミリアさんがフォローしに行つた見たいだから大丈夫かな？

俺は前にいる敵に集中させてもらつとしよう！
フラン

「禁忌『レーヴァテイン』！」

フランのスペルカードらしい。手に巨大な炎の剣のようなものが握られている。

うーん、こつちも対抗するために隙間の中から剣を取り出そうか……。と思つて隙間を開こうとすると、なぜか発動した瞬間に閉じてしまった。

あれ？なんで？

「きゅっとしてどーん」

「はい……？」

「フランの能力はありとあらゆるものを破壊する程度の能力。貴方の能力だつて破壊される」

「なるほどね……」

「もう！お姉さま余計なこと言わないで！」

「私は咲夜を安全な所に連れてい行つてからこちらに戻るわ！」

「了解」

レミリアさんが説明してくれたあと、レミリアさんが咲夜さんを連れて行つた。もしかしたら、どこか歩けなくなるような怪我をしたのか？でもそうは見えないから、何か理由があるのかもしれない。さてさっきの能力のことだけれど、そんな能力があるっていう話を

どこかで聞いたことがあったかもしれないな。いや、無かったかも知れないけど。

それにしてもそれは厄介だな。俺の能力と隙間能力どちらも防がれてしまうということか。

あれ？もしかしてこれは弾幕を破壊されることがあるもあるかも知れないってこと？

勝てる分けがない。

でも、霊夢はこの子に勝つたらしいし（勝つたとは言っていないかもしれないけど、戦ったら勝てるだろう）どうにか策を立てれば、なんとかなる！

「いくよ？」

そういうとフランは手に持った剣を横に振った。

それはあまりにも巨大だったので廊下の壁を少し削っていく。

俺はとりあえずまともな策が思いつかないので、空中に飛んでよける。と下の方を剣が通り抜けていき、反対側の壁も破壊した。

そして空中に炎の残り火？みたいな物が細かい弾幕となって俺の方に向かって飛んできた。

よく考えていらっしやることで。

俺のスペルとは全く違うな。これからの参考にさせてもらおうとしよう。

一応魔力や妖力は破壊されていないので俺は空中で方向転換してよける。と同時にお返しとして大玉と中玉の弾幕を少々ばら撒いておく。

「ふふ。そんな程度の攻撃で私が当たるとでも思ったの？」

フランが余裕で弾幕をかわしていくが問題ない。別にこの程度の弾幕で倒すつもりじゃないしな。

狙いはその弾幕で彼女を廊下の端に移動させ追い詰めること。そうすれば俺の弾幕^{スベル}をかわすことができない。壁を破壊されて逃げられれば終わりだけれど、彼女は真っ向から向かって来てくれる気がする。

「妖魔『100年の靈魂紫雲』！」

前に靈夢と戦った時に使ったスベルカードだ。フランはどうするのだろうか。

少しゆっくりめに魂のような弾幕と紫色の弾幕がフランに迫って行く。

「へえ……レーヴァンティンだったら少し面倒だから私もスベルを変えるね。禁忌『恋の迷路』」

そういつてフランはスベルをかえた。最初は何も起こらずにただフランがその場に止まっているだけであつたが……。

一瞬にして俺の弾幕が蹴散らされた。どういうことが起こったのかよくわからないでいるとフランの大量の弾幕が目の前に迫って来ていた。

四方八方から俺に向かって迫ってきているというわけではない。つまりただ周りに大量の弾幕を放って来ているだけである。

……参った。これはかわせない。今すぐ俺の能力が使えるというなら多分かわせる。

一か八か能力発動！

「……どうしてあの弾幕をかわすことが出来たの？」

「……まさか、使えるとは思わなかったぜ」

どうしてかはわからないけれど、俺の能力を使うことはできたので
即座にフランの弾幕に指定して左右に逸らしてかわすことができた。

「もしかして、お兄さん能力2つ持っているの？」

「ああ。特殊な事情を持っているんでね」

「そうなんだ！ふふ！楽しいね！」

「楽しいか？当たったら痛いじゃないか」

「当たらなきゃいいんだよ！」

それは当たらなかったらどうということはないけどさ……。

「お兄さんは」

「ん？」

「中々強いから、これから本気で行くね？」

「まだ本気じゃなかったのかい！？」

おいおい……勘弁してくれよ。こっちは一応最強スペル楽に破られて
いるんだけど……。

「いくよ？禁忌『フォーオブアカインド』」

32話（後書き）

そういえば、10万アクセスありがとうございます。
来週の更新はテストがあるので更新できない可能性があります。

33話（前書き）

最近1話更新したら1万アクセス。
ありがとうございます。

33話

そう彼女がスペルを唱えた瞬間フ란の姿が消えてなくなった。

まさか姿を消すスペルカード!?　とも思ったがどうやら違うらしい。

というか、それよりも厄介だ。

俺はフ란がその場から消えたと思ったのでまさか、分散して散らばっているなんてことは予想していなかった。

「おいおい……そのスペルって……」

「……うん　4人に分身出来るんだよ!」「……」

4人に分身したフ란が声を合わせて俺の質問に答えてくれる。

……これってやっぱり全員やらなきゃいけないのかな?　それにしても人数多すぎるだろ……せめて2人くらいで勘弁してもらいたい。こっちは最強スペル破られてるし……って言ってもきつとあつちは攻撃やめてくれないんだろうな……。　なんとなく雰囲気でわかるよ。

物は試し。　1回無駄だとは思っけれと言ってみよう。

「なあ。俺今持つてる最強のスペル敗れたから降参したいんだけど」

「……え?　何言ってるのかな?　これから本番だよ?」「……」

「ですよね……」

やっぱり言うこと聞いてくれない……どうしたものか。

さっきのスペルを避けた時にわかったけれど俺の能力の1つ、次元

に引きずり込む程度の能力はフランのあらとあらるものを破壊する程度の能力を無効にした。

ということは俺の次元に引きずり込む程度の能力はもしかしたら目に見えていない、力……つまり能力や魔力妖力の力も引きずり込むことができるのではないだろうか。

まあただの仮定なんだけれど。

フランは4人に分身してからまだこちらには何もして来ていない。

こちらが何かするのを待っているのか……？

だとしたらチャンスじゃないか。

能力指定をフラン4人に設定してフランを1カ所に集める。

「……！？」

フラン達は驚いて他の場所に移動しようとしているけれど、無駄だ。俺の能力はコントロールして引きずり込む穴を指先程度にしているから指定している相手が次元の何処かに引きずり込まれていくことはない。

でも引き寄せる力は星を動かせることのできる程の力。

俺はそれをほとんど最大の力で動かしているので例え吸血鬼であろうともその力から逃げることはできない。

「せい！」

俺は指定した穴がある場所に弾幕を放つ。

スペルカードを使っているわけではないので威力はそんなに強くはない。

フラン達は穴のある地点に全員背中合わせに集まっていた。

これで1人と戦うのと変わらなくなるかな……。

「お兄さんの能力。甘く見てたよ」

「そうか。大人しく降参してくれると俺はうれしいんだけど！」

俺とフランが会話している間にも弾幕の撃ちあいはやめたりしない。つてかフラン俺の弾を笑顔ではじかないでくれよ……自信なくすぜ。

「そうだね。次のスペルでお兄さんが耐えきつたらお兄さんの勝ちでいいよ」

「本当か！」

「本当だってば……ただし……」

そういいながらフランは4人から1人に戻った。

そして俺もフランに対して発動していた能力をひとまず消す。

俺の能力は他の人たちも同じだとは思うけれど力を強くするとその分消費と制限が厳しい。

さっきフランに対して使っていたのはかなり力を強くしていたので能力の指定できる穴の数があれ1個だけだったけれど、力を抑えればさっきやったように複数作することもできる。

難しいものだ。これからもっとコントロールうまくしなきゃな。

「コンテニユーは出来ないのさ！ Q E D 『495年の波紋』！」

フランのラストカード発動。

俺の周りに小さな弾幕が発射され、その弾幕がはじけて波紋のように広がっていく。

一見避けるのが難しく感じるが速さが遅いので多分楽に避けられるだろう……数は多いけど。

これは避けるだけなら簡単だな。

と思っていた俺が馬鹿だった。

だんだんとフランの弾幕の波紋が現れるスピードが上がっていき、数も最初の頃とは段違いになっていた。

しかもフランの最初にだした条件は耐えきることであり、俺が攻撃することはある意味ルール違反なので攻撃はできない。

それと俺の能力を使って弾を左右にわけさせようとも思ったが、このスperlフランの最強スperlかどうかはわからないけれど強力すぎて動かすことが難しい。

集中すれば左右に避けさせかわすことも出来るのだけれどかわしたすぐ目の前に、弾幕が迫って来ているので能力でかわしていくよりは普通に避けた方がいいと判断した。

俺の力で星も動かせる程力があるらしいけれど、対象を複数にする力が弱ってしまうようでそんなに複数に対しては効果がないようだ。

「!? しま……」

少し油断というかフランのいる位置を確認していたら横の弾幕が体に当たって吹き飛ばされた。

い、痛い……ま、まさかこんなに威力が強いとは思わなかった……。

「……」

えーと。

詰みました。

もうあと1秒もあれば当たりそうな距離に弾幕が左右から迫って来てます。

これはもう駄目だな。

咄嗟に能力を発動させたけれど（穴は弾幕の後ろに指定して弾速を遅くしている）少し弾幕の着弾を遅くするだけだろう。

もう力が限界だ……。

「紅符『不夜城レッド』！」

俺に弾幕が着弾する寸前横から小さい影が俺の目の前に出てきて、スペルカードを発動し弾幕を吹き飛ばしてくれた。因みに俺の目の前は紅い色、一色に染められていた。

「レミリアさん！」

「危なかったわね。フラン？ まだ満足しないのかしら？」

「お姉様……」

「まだやりたいって言うのなら私が相手するわ。これ以上客人に怪我させるわけにもいかないしね」

「……もう満足した。今日はもういい」

「そう。ならよかった。あと数時間もしたら夕食だからフランも来るわよね？」

「当たり前よ」

そういうとフランは地下に続く道をゆっくりと戻って行った。

「立てる？」

「あ……はい」

弾幕を食らったあと座り込んだままだったな。

レミリアさんが差し出してくれた手に感謝しながら立ち上がる。

身長的には小学生か中学生に見えるけれど吸血鬼な彼女は力持ちなのかな。

さっきも俺の目の前に入ってきてくれた時も横からもの凄いスピードで来てくれたし、吸血鬼は身体能力が高いのだろうか。

レミリアさんって……カッコいいな！

「そうそう。霧夜を夕食に招待したいんだけど、いいかしら？」
「え？夕食にですか？」

「ええ。何か用事がないならどうかしら」

どうしようかな……ご馳走になるっても悪いし、何より紫さんに心配を掛けてしまう気もする……。

「私の妹のことで貴方に迷惑を掛けてしまったし、一応そのお詫びも込めてつてことなただけ……」

「いや、別にそんなこと気にしてくれなくてもいいですから。でもご馳走になります」

「本当！？　じゃ、じゃあ咲夜に今日の夕食が増えたことを伝えて来るから貴方は適当な場所で寛くわいでくれて構わないわ！」

そついうとレミリアさんは凄い勢いでどこかへ向かった。

紫さんには隙間を通して伝えればいいし、と言うより今伝えよう。

隙間の能力をフランに壊されることもなくなったし、つなげることくらい出来るだろう。

隙間の位置をコントロールして紫さんの目の前に開く。

ただし俺は隙間の中には入らない。

これを使えば電話見たいな感じで使えるのかを試したいという気持ちも合ったし、戻るのだから紫さんの所に行くのが少々面倒だったからだ。

「紫さん聞こえます？」

「ええ。聞こえるわよ」

どうやら会話は成立するみたいだ。

「俺レミリアさんの所で夕食に招待されたんですけど」

「いつてらっしゃい」

「え……はい」

「明日の昼までには帰って来なさいよ」

「どういうことですか？　夕食頂いた後はすぐに帰ろうと思ったんですけど」

「多分あの吸血鬼が考えることだから貴方を紅魔館そこに泊めることを勧めてくるはずよ。ゆつくりしてくるといいわ」

「はあ……わかりました」

「それと貴方が起こす異変を決めたから、もう悩む必要はないわよ」

「え……？　了解しました」

「あら順応早いわね。もう少し戸惑うとも思っただけけれど」

「紫さんなら出来ないことはないと思っただけで」

「……そんなに私ばかりに頼っていたらその内困るわよ？」

「そんな時はそんな時で」

「じゃあ私は寝るから。またね霧夜」

「はい」

そう言っただけ俺は隙間を閉じた。

それにしても異変が思いついたって言ってたけれど、まだ異変を起こしても困るんだよね……。

だってまだ霊夢と戦っても勝てない気もするし、今の實力だったら即倒されてお終いで紫さんにも申し訳ないしな。

そこらへんは紫さんと相談すればいいか。

ってそういえば、俺どこに行けばいいんだ？

夕食に招待してくれるってのは嬉しいことなんだけれど、場所を知らないし……。

どうすればいいんだ？

……図書館に行けばあの魔女がいるし案内とかしてくれないかな。

と淡い期待を持ったので、図書館に行くことにした。

行く所がないという理由もあるのだけれどね。

「それでまた来たと？」

「そういう感じですね」

現在魔女さんがいる図書館に行ったらなぜか呆れ顔で言われた。
俺何か変なこと言ったかな？

「レミイの考えそんなことだわ……。まあ後で私も行くことになる
だろうから案内してあげるわ」

「ありがとうございます。えーと名前まだ聞いてなかった気がする
ので教えてくれないか？」

「パチュリー・ノーレッジ。貴方は？」

「綾瀬霧夜。好きに呼んでくれ」

「わかったわ。私のことは名前で呼んでくれて構わない」

「おう」

そついうとパチュリーはまた本を黙々と読み始めた。

別に会話してほしいというわけではないのだけれど、1人何も
していないと暇だよな……。

「そこら辺の本読んで見てもいいか？」

「いいわよ。でも危険な物もあるから私の目の届く範囲にいて」
「わかった」

ということなので1番近いこの本棚でも見てみるか……。

1冊ばらばら見て閉じてまた1冊見てという作業を繰り返している
と……

「あれ？貴方は誰ですか？」
「ん？」

後ろから声を掛けられた。

振り返ると小さい悪魔見たいな子がいた。
小さいと言ってもそんなに小さくはないけれど。

「俺は綾瀬霧夜。ちょっとしたことがあって紅魔館（三）の主に（夕食に）
招待してもらったんだ」

「そうなんですか。私は小悪魔。ここの図書館の司書をやってます」
「司書？」

「はい。パチュリー様。頼まれてた資料届けに来ました」

「ありがとう。そこに置いというて」

「はい」

「そろそろレミイの所に行くとしましようか」

「あ、わかりました」

俺は持っていた本を元の場所に戻し、いつの間にか図書館から出て
いるパチュリーの後を追った。

33話（後書き）

レミリアは内心「決まった……！」とか思ってた

34話（前書き）

文字数少なくて申し訳ない

34話

パチュリーのあとを追って図書館からでて歩くこと数分。
他の部屋へ続く扉より少しだけ大きい扉が見えてきた。

その扉の向こうに行くとレミリアさんとフラン、それと咲夜さんがいた。

……人数ってこれしかないのか？
それとも俺だけの為にそうしてくれたのだろうか……。
もし俺の為だけだったら申し訳ないな……。

「あら、パチュリーの所に居たの」

「はい。場所案内してもらおうと思って」

「そういえば場所の説明してなかったわね。悪かったわ」

「いやいや気にしないでくださいよ」

「わかったわ。それと席は好きな所に座ってもらって構わないわ」

と、言われてもこのテーブルやらでかい。

どれくらいでかいかというと、横に人が10人くらい並べるくらいでかい。

ここには俺とレミリアさんフランにパチュリーと咲夜さんしかいないので、とても広々と使えそうだ。

……咲夜さんはレミリアさんの横に立っているままで動こうとしない。

やっぱりメイドさんは主人が食べ終わるまで食べてはいけないんだとか決まりがあるのだろうか……。

「咲夜さんは一緒に食べれないんですか？」
「私は主人が食べ終わるまでは食べません」

やっぱりそうなのか。

折角一緒にいるのだから、一緒に食べればいいのにな……。

「咲夜が気になるの？」

「まあ……その折角ですし……」

「そう。咲夜、命令よ席に着きなさい」

「で、ですが！」

「いい？命令よ？言うことを聞きなさい？」

「……はい」

レミリアさんの命令を受けて咲夜さんがしぶしぶ席に座った。
って彼女が座っているのに俺が座ってないじゃないか……。

場所が広すぎて困ったがとりあえずレミリアさんの前に座ることにした。

俺が席に着くと隣にフランがやってきて俺の隣に座った。

あらためてテーブルの上を見ると色々な料理が乗っていた。

……一部の物と思われるものもあるが、気にしないことにしよう。
吸血鬼の食糧なのだから当然といえば当然だし、妖怪だから食べる物は人であっても仕方ない。今俺が人食べたら美味しく感じてしまうのだろうか……。

そんなことはないと思いたいけど。

普通の人が食べるような物もあるので、得に困ることもないんだけど。

妖怪になったとは言っても流石に元は人間なわけで、人間を食べたとは思わない。

並んでいた食べ物は何かよくわからない物が多かったが、かなりおいしいものばかりだった。

これを作っているのは誰かと聞いたら全部咲夜さんだというから驚きだ。

途中フランが俺に色々食べ物をお勧めしてくるのでもらっていたが、人肉をお勧めされた時だけは遠慮させてもらった。

人肉とか怖いわ……かゆうま？

パチュリーは小食のようであまり食べてはいなかった。というよりほとんど手をつけてなかった。

魔法使いとかなら食事を取らなくても、生きていける魔法があったはずだからその影響なのだろうか。

あと飲み物が血液だった時は驚いた。

咲夜さんは飲んでなかったからおかしいとは思っていたけれど、何も疑わずに飲んでみたら変な味がしたので中を見ると真っ赤な物が入っていた。

うん……飲む前に気付けたよって感じだけれど周りの料理がおいしくて一々気にしてはなかったんだよ。

これは何？ とレミリアさんに聞くとケロっとした感じで血よ？

と答えられて一瞬吐き出さなくなったけど我慢した。

もう……俺妖怪だしね……。

食事が終わって俺が帰ると言ったら紫さんが言っていた通りに引き留められた。

夜も遅いから泊まって行かないかと。

俺は隙間移動があるから遅かろうが、なんだろうが別にすぐに帰れ

るので断つてもいいのだけれど、紫さんにもゆっくりして来なさいと言われてるのでお言葉に甘えることにした。

そういうとレミリアさんが咲夜さんに部屋の案内をさせると言っていてどこかへ行ってしまった。

パチュリーはいつの間にかいなくなっていた。多分図書館に戻って行ったのではないだろうか。

フランはなぜか俺の背中に張り付いている。

……深く考えることはしないでおこう。

それで案内してもらった部屋に着くと咲夜さんは仕事に戻ると言っていてどこかへ行った。

「で、フランは何でここにいるんだ？」

背中に張り付いていたままのフランは俺が使用を許された部屋のベッドで転がっていた。

「え？ お兄さんの所にいちや駄目なの？」

「いや……駄目ってわけじゃないけど……」

まあ放っておけばその内飽きて自分の部屋に戻るだろう。

この時間ってレミリアさんは何しているのだろうか。

やっぱり夜の方が力強くなったりするのかな？

「フラン」

「なーに？」

「やっぱり吸血鬼って夜になると力が強くなったりするの？」

「うん。昼間よりは力を使いやすくなるよ」

「へえ……」

つまり今フランと戦ったりしたら昼間の時よりも、ボコボコにされ

るってことなんだな？

レミリアさんも強くなってるんだろうな……。

「ねえお兄さん」

「なんだ？」

いつの間にか俺の前に来ていたフランが俺の頬に手を当てながらこ
う言った。

「血吸つてもいい？」

「駄目だ！！」

「えーおねがーい」

「そんな目をうるうるさせても嫌だ！」

「うー」

何を言い出すかと思つたら血を吸わせて……人間以外の血を吸
つても大丈夫なのか？

それにしてもフランは夜になつても元気だな……いや夜だからこそ
元気なのか？

「ずっとここに居ても暇だな」

「そうだね」

「紅魔館（まじ）の中でも出歩くか。案内頼んでもいいか？」

「うん！ 行こう！」

俺がそういうとフランは俺の手を引いて部屋を飛び出した。
元気いいね。

ぐいぐいと引っ張ってくるフランの力に抵抗せずに進んで行く。
目的地などは聞いていないのでどこに行くのかは知らないし、道も
長いので部屋に戻るとしてもフランの案内が必要だな。

「美鈴のどこに行こう！」

「誰？」

「紅魔館の門番！」

そういえば俺は紫さんの隙間移動で来たから門なんて見ていなかったな。

そうなのか。門番なんていたんだな。知らなかった。

あれ？さっき食事していた時もないかったような……やっぱり咲夜さんみたいに食事は主人のが終わってから……って感じなのだろうか。

「……ここから行くのは遠いから窓から空を飛んでもいい？」

「ああ。構わないよ」

フランが窓を開けて空に飛びでた。

俺の手を引いたまま空に飛んで行ったので、少しフランにタイミングを合わせるが難しかった。

「美鈴〜！」

「フラン様！？」

中華系の服装をした女性が紅魔館の門の前に立っていた。

その人に向かってフランは体当たりしていた。

ぐえー！という声が聞こえたのは気のせいかな？

「……フラン様そちらの方は？」

「えーとね……お兄さんだよ！」

「えー」

何……名前覚えてくれてなかったのね……。

「綾瀬霧夜です。ちょっとした経緯でレミリアさんに招待してもらったんです」

「そうなんですか。私は紅　美鈴紅魔館の門番をやらせてもらってます」

「へえ……ずっとここに立っているんですか？」

「そうです」

「それは大変そう……ですね」

「？　どうかしました？」

「ちよっと、用事が出来てしまったようです」

さつき美鈴と話している時に紅魔館の屋上くらいからとても大きい妖気を感じた。

これは俺にだけ向けて放ったのだろうか。背中がかなりゾクッと来た。

きつとレミリアさんだろう。何か用事でもあるのかと疑問に思いながら俺は紅魔館の屋上へと向かおうとしたらフランに止められた。

「気を付けてね？」

「ああ、心配してくれてありがとうな」

最初俺を虐めていたのは誰だとは思ったが一応お礼を言って、俺は妖気の気配を感じた方向へ向かった。

35話（前書き）

最近友人が家に帰るのを邪魔するの。
こっちは時間ないというのに……。

35話

紅魔館の上空に飛んでいくと紅魔館の最上階あたり、レミリアさんの部屋があつたくらいの高さの所にベランダらしきものがあり、そこにレミリアさんはいた。

「……何か用ですか？」

「あの微量の妖気で私の位置がわかるなんてやるわね」

「吸血鬼の妖気と普通の妖怪の妖気の差を比べないでくださいよ」

あれで微量の妖気とかどの口が言うのだから……やっぱり感覚とか他の妖怪達とは違うのかね……？

レミリアさんはベランダらしき所にある椅子に座りながらお茶？

見たいなものを飲んでいる。

しばらく何も言わずに黙っていたら彼女の妖気が段々と高まって気がする。

もしかして……

「こんなに月も紅いのに、静かな夜ね」

「……」

ふと上にある月を見ると本当に月が紅色に染まっていた。なぜ？レミリアさんが紅い瞳をこちらに向けながら微笑んで来るが、怪しさしか感じられない。なんというか、今にも飛びかかって着そうというか身構えておいても損はなさそうだ……。

どうして幻想郷にはこういう戦闘が好きな人たちが多いんだか……とか言ってる俺も霊夢に勝ちたいとか思っているし、人のことは言えないな。

さつきよりも妖気が高まっている。確か吸血鬼の活動時間は主に夜だったから、昼間の時よりも強いはずだ……。って今フランと戦ったら俺昼よりボコボコにされるってことじゃないか？

……気にしないことにしよう。

あれ？ 昼間にレミリアの妹にも勝てない俺が夜のレミリアさん（姉）に勝てるわけはないか？

「どうしたのかしら？ 大丈夫少し遊ぶだけだから、安心するとい
い」

「全然安心できないわ！！」

どこをどうやったら安心できるって言うことになるんだよ！
どっちにしてもやられるってことじゃないか！

冗談じゃない。こちらとて簡単にやられて……いや、負けてたまる
か！

「貴方は接近戦と、遠距離戦。どっちが得意かしら？」

「……どっちでも行けますが」

「そう。なら……」

レミリアさんが立ち上がり手に槍のようなものが現れた。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

やばい……俺もはやく隙間から剣だして応戦しなければ、あつと言
う間にやられてしまう。

「！」

レミリアさんの妖氣が一気に高まった！ 来る！
空中で横に最高スピードで逃げる。

「遅い」

「！？」

逃げた瞬間にレミリアさんに追いつかれていた。何これ無理だろ。
俺の速さと彼女の速さは多分倍以上あるだろうし、何より攻撃が当たらない。

横に逃げている途中に隙間から剣を取り出して彼女に斬り付けているが全て防がれている。さらにこっちは彼女の槍にさつきから何回も刺されている。

痛いけど、すぐ治るし気にしてたら負けるから気にしないことにはしているけれど、これじゃあどうやっても勝てない。

空中で斬りあいが続いているうちに疑問が出て来た。レミリアさんに攻撃が当たりそうになると、なぜか俺の体は少しの間動かなくなるというか、鈍ると言った方がいいのかもしれないけど当てられないわけがわからない。どうやって攻撃を当てればいいんだよ。

こっちの攻撃が当たりそうになると体の動きが鈍って隙ができ、そこでダメージを食らう。

どうすればいいのかな……。

考えていると彼女は俺から数メートル距離を取った。

「ふふ。不思議そうな顔しているけれど、それが貴方の運命よ」
「どういうことだ？」

レミリアさんはいきなり俺に話かけてきた。

運命……？ まさか

「そう。気が付いたようね？」

「貴方の能力は運命を操る程度の能力だっけ？」

「正解。よくわかったわね」

なるほど。そこまでヒントって言うか答えを教えてくれれば十分だ！
俺の能力でその能力を次元に引きずり込むだけだ！

……っ！ 気付かれないように能力を封じ込めることに成功したとはいえ、なんだこれ……もの凄い力を持つてかれる。

これ以上他のことに能力を使うのは無理だな。この状態でレミリアさんと戦わなければいけないのか……さっきの状況よりは、まあマシな方か。

俺は反撃するために、空中で方向転換して彼女がいる方へと狙いを定めて飛んでいく。

「ふふ」

レミリアさんは余裕の笑みで俺を見てくるが、見てるがいい。今は俺の攻撃が当たるのだから。

「！？」

「ち……」

相手を殺す気などないので肩を狙ったが、当たる寸前に回避されてしまった。途中でばれてしまったのか？ それとも当たる瞬間に感ずいて逃げたのか。後者だった場合反応スピードが速すぎることになるが……それは流石にないと思いたい。というかそうだったらもう接近戦で攻撃当てることがほぼ無理になるような気がする。

「なんで私の能力が……」

「俺の能力で封じさせてもらいました」

「……やるじゃない。でも、ここから貴方は私に触れることも出来ずに終わるわ」

「それも運命だというのか？」

「予言よ」

つまりそれは外れることがあるんだな。

じゃあ早速レミリアさんに触れに行くか！ 彼女は私に触れることなく終わるって言ったんだから、触れさえしたらその予言は外れたことになる。

でもこれやつてもあんまり意味がないよな。普通に弾幕張りながら、接近していくことにしよう。

ヒュン！

俺がそう思った時に俺の数センチ横を何かが横切った。

そして後ろを見ると地上にさっきまで彼女が持っていた槍が突き刺さっていた。何だこれ……。

「私のこの武器。本当はこうやって使うものなの」

「……つまり投擲用というわけか？」

「その通り。まだまだあるから、油断したら駄目よ？」

そう言い終わった頃にはもう次の槍がレミリアさんの手に握られていた。まさかこんなことになるなんてね……正直勝てる気がさらになくなったよ。でもこんなんじゃないや紫さんを助けることなんて出来ないし、何より……

こんなところで負けたくないな！

空中で移動し始めるとさっきまで居た場所を槍が通過した。あの槍速さはあるけれど、空中で移動し続けていたら当たらなさそうだな。俺は空中で弾幕を張りながら彼女の周りを周る。こうすれば、槍の攻撃に当たる確率は減るし隙を見て俺が相手に攻撃を当てることも

可能かもしれない。

でもレミリアさんがただじっとしてくれているわけもなく、彼女も空中で弾幕を張りながら移動してされに俺に向けて槍を放ってくる。そんなに消費して大丈夫か？　とも思っただけれど吸血鬼なら大丈夫なんだろうという勝手な予測で気にしないことにした。

「っ！」

「今だ！」

俺が放った弾幕がたまたまレミリアさんの脚に当たり空中でバランスを崩した。そこを狙って剣で（剣に弾幕を纏わせているので、傷付ける心配はほとんどない）斬る！

俺が急速度で向かっていることに気付いた彼女は新たなスペルを俺が触れる瞬間に唱えた。

「紅魔『スカーレットデビル』」

目の前がいきなり紅色に染まった。レミリアさんに触れる直前に彼女が唱えたスペルを聞いた瞬間俺は紅色の何かに阻まれて、その場でその技をモロに食らってしまったらしい。

こんな間近で食らうスペルが有ったなんて……油断してたかな……。俺はそのスペルの発動が終わった瞬間にまた斬りかかるつもりだったが、体の力が抜けて紅魔館の屋上に激突しその場で停止した。

「……止めよ^{とど}」

「まだ……やるのかよ」

再び彼女の手には槍が握られている。これはかわせない……。レミリアさんが槍を投げるモーションに入り投げる瞬間。俺の目の前に誰かがやってきた。

「禁忌『レーヴァテイン』！」

俺の目の前に来たレミリアさんの妹フランは俺に当たるはずだった槍を防いでくれたらしい。よくあの速さの物をはじけるな……。

「フラン！？」

「お姉さま。忘れているかもしれないけれど、お兄さんはお客様じやなかったっけ？」

「そう……ね」

「ならもういいんじゃない？ 勝敗は決まったようなものだしね」

……フランが助けってくれなかったらやられてました。はい。感謝します。

大分ダメージから回復できてきたようで、体を起こすことは出来るようになった。

「大丈夫？」

「なんとか」

フランが手を差し伸べてくれたので手に？まって立ち上がろうとしたら……。

「うお！」

「わ！？」

俺がバランスを取れなくなってフランを押し倒すような形に倒れ込んでしまった。

……あれ？ これってもの凄く気まずい状況じゃないかな……？

「お兄さんだいたーん」

「なんでやねん！ ああ……もう何とかするしかないか……」

俺はレミリアさんの能力を封じ込める為に使っていた能力を解除して、自分が起きれるような位置に穴の設定をして（大きさは指が通らないくらい）起き上る。

「なんだ。立てるじゃん」

「……無理してるんだよ」

「そうなの？ じゃあ咲夜に手当してもらおう？」

「いや……咲夜さんには迷惑掛けられないから……」

「いえ。迷惑ではありません」

「え？」

俺がその声を認識したときには、俺の傷があつたところに手当が施されており、俺とフランの目の前には咲夜さんがいた。

そつえば、彼女の能力は時を操るんだつたつけ？ だから今認識するのが遅れたのだろう。

「もー！ 咲夜なんでいつも行動が早いの！」

「えーと何か問題がありましたか？ 妹様」

「あるよ！ 大有りだよ！ お兄さんに私がかつこよく命令する（咲夜に）姿を見せたかつたのに！」

「そ、それは……」

フランさんやそれはなんなのさ。命令する姿を見せたかつたて。咲夜さんは困った笑みをしながらフランの話を聞いている。メイドさんは大変だな……。

「フラン。咲夜さん困ってるからそこらへんにしておきなよ。咲夜

さん手当ありがとうございます」

「いえ。これも我が主の命令ですから」

「あ……」

そういえばレミリアさんは？　と思って上空を見上げてもしなくて、辺りを見回しても姿が見えなかった。

「お嬢様はお部屋にお戻りになられました」

「そう……ですか」

「じゃあ！　今日は私と一緒に寝よう！」

そう言ってフランは俺の手を引いて空に飛び始めた。

「ちょっと待て！　どうやったら俺がお前と寝ることになるんだよ！」

「知らない」

「待てゴラァ！」

と言いつつも俺は逃げる事が出来ない（主に体の限界手的な意味で）のでフランに従うことになってしまった……。

フランに連れて来られたのは地下室（フランの部屋）だった。何をされるのか最初はちよつとびくびくしていたが、要求されたことが膝枕というもの。

別にそれくらいならしてあげても全然問題なかったののでしてあげていると、フランの羽が下に垂れたと思ったたらフランは寝ていた。

おい吸血鬼の活動時間は夜じゃないのか！ と心の中で突っ込みを入れつつ見守ること数時間。

すぐに朝がやってきた。と言つても地下室に日の光なんて入って来ないわけで、教えてくれたのは咲夜さんだった。

俺はすぐに帰ろうかと一瞬思つたけれど、レミリアさんに挨拶してから帰ることにした。

昨日はあんなこともあつたけれど、お世話になつたわけだし。

と咲夜さんに言うとう自室に行つてよいということだった。フランはまだ寝ていたので置いて行こうと思つたけれど、俺の服を掴んで離さなかつたので仕方なく連れて行くことにした。

膝枕状態からだとしても姫様抱つこになつてしまつのは仕方ないと思う。うん。仕方ないよ。

咲夜さんの案内でレミリアさんの自室に入ると彼女は紅茶（血）を飲んでいた。なぜわかつたかと言うと色と臭いの……。

「昨日はごめんなさい。私も熱くなりすぎていたわ」

「いやいや大丈夫ですよ。傷も昨日のうちに治つてますし」

「そうそうお姉さまが気にすることなんてないよ！」

「つてフラン？」

「えへへー」

いつから起きていたのかフランは目を開けていた。

「寝たふりしてたのか？」
「うん」

それが普通と言わんばかりに答えるフラン。でも流石に俺の手から降りた。

とフランが何かをレミリアさんに耳打ちしている。どうかしたのか？そして2人から何やら怪しいオーラが……。

「ねえお兄さん」
「な、なんだ？」

少々身構えながら俺は話を聞く。そして2人が段々と俺に近付いてくる。

「少しの間屈んでくれないかな？」
「？ まあ……いいか」

俺はこの時重大なことを忘れていたのである。
この2人が吸血鬼であるということ。
あと、俺は油断していたのかもしれない。妖怪である俺は吸血鬼に血を吸われないだなんて。

「かぶ」
「はむ」
「……」

チクリと首筋に痛み。どうやら瞬きした瞬間を2人に狙われて噛みつかれたらしい。

……俺は吸血鬼の2人をあんまり好きにはなれないような気がした。

35話（後書き）

8月には完結する予定とあくまで予定を言ってみる。

36話（前書き）

今回の話知らないなw

36話

紅魔館の出来事があってから数か月経った。

いや。早すぎるだろうって思うかもしれないけれど、俺にとってはもう数十年経っているんだよ。

隙間の中で時間の境界を操って修行したりしてたらもう凄い日数経ったりしちゃって……。

ちゃんと時々隙間の外に出てチルノとかおっさんのところ行ったり、偶に霊夢や魔理沙の所に遊びに行ったりもした。

紅魔館に居た時よりはかなり強くなったと思う。力の使い方（新たにわかった能力を弄ったりすること）もさらにうまくなったし、妖力や魔力も増えた。

そしてスペルカードの種類も増えたしね。少しは霊夢に勝てる見込みが出て来たって感じかな？

そういえば、俺なんで霊夢に勝ちたいってこんなに思ってるんだっけ？

いつもなら自分から戦闘しようだなんて思わないわけだし……こんなことを考えるのが今更かよって言われればそれまでなんだけれど……なんでなんだろうな。妖怪になって考え方も変わってしまったているのだろうか。でもレミリアさんとかにはあんまり倒したいとかって思わないし……。

幻想郷最強って言われているって聞いてしまったからだろうか。最強って聞くと倒してみたい気も……いや、違うな。

俺は霊夢を倒して紫を助けられるようになってるって証明したいだけなんだ。

あの人は絶対俺を頼ってはくれない。だから彼女を倒せばそういうこともしてくれるんじゃないかってね。
まあそれは倒せたとした時の話だけだ。

「霧夜。そろそろいいんじゃないかしら？」

「そうかな？ まだ勝てる気がしないよ」

「大丈夫。貴方ならそこそこ行けるわ」

「勝てるとは言ってくれないのね紫」

「だって霊夢は私ですら敵わない相手なんですから」

「そうですかい」

数年間隙間で過ごしているうちに紫さんと呼ばないで紫って呼び捨てするようになって来た。

まだ偶に紫さんって言うこともあるけれど。

さっきの紫の言っていることは、そろそろ異変を起こして、霊夢と戦ってもいいんじゃないか？ と聞いてきたのである。

数十年前にそれを聞いたときには驚いたよ（数十年というのは霧夜の感覚）。そんなことを思いつけるなんて思わなかった。普通は思いつかないと思う。

内容は宇宙にある星の軌道を無理矢理ずらすということ。しかもその動かす星の数が数百とかなり多い。

それをして何が起こるのかと訊くと、妖怪の活動が何やら変わった、気候が少し変になったりするらしい。

ちなみに星の軌道は異変を終わらせる時にちゃんとやる予定。うまく星の軌道を弄ると俺の力も少し上がったたりするらしい。

全部紫に説明してもらったけれど、全く理解出来ない内容だった。でも隣で藍が「なるほど。流石紫様」とか言っていた……俺って頭弱いのかな？ 時間できたらまた勉強し直したりした方がいいのかな？ その時はそんな時考えればいいや。

とりあえず霊夢に勝つことだけを考えよう。

「言っておくけど、今から準備して数週間かかるわよ」

「え？」

何それ……ということは、まだまだ修行する時間があるってことじゃないか。

「早速準備始めましょう！」

「そうね。じゃあ今日の夜から始めましょうか」

「わかった！」

何故夜からやるのかはきつと星が見やすいからだと考えて、黙っていた。これをなんで夜なんだ？ とか聞いたらきつとそんなこともわからないの？ って言われる気がするから黙っていた。

それにしてもまだ昼を少し過ぎたくらいなので、まだまだ時間があるな。

きつと夜に力たくさん使うだろうし、今日は隙間の中で色々するのはやめておくかな。

どうしようかな。隙間移動すれば人里まですぐに着くから行くのも悪くはないけれど、最近行ったばかりだしな。違う場所に行こうかな。

博麗神社は今行くと後々気まずくなりそうだし……紅魔館は行きたくないし、家でゆっくりしているのって言うのもな……。

魔法の森にでも行って見るか。あそこは魔力を高めてくれたりするし（そんな数時間では高くない）のんびり過ごすにはいいかもしれない。

というわけで移動！

今日も魔法の森はジメジメしていて茸の胞子がたくさん飛んでいます。

普通の人間や力の弱い妖怪などはここにはほとんどいないので、結構ゆっくり過ぎせる。なぜか俺はこの空気を吸っていても大丈夫なので快適である。

ここは最初俺が幻想郷に紫さんに落とされて初めて来た所だったはず。ここから始まったんだよ……今の俺。

紫が俺を幻想郷に連れてきた理由星を壊す程の能力があるからという理由だったけれど、今ならもうその心配もないんだよな。

ちゃんと力の制御出来るようになったし、暴走する心配もほとんどないからな。

それにしても、魔法の森は相変わらず静か……「ドオオオン!!」じゃないね。何？ 妖怪茸でも出たか？

ここに居ても暇だから見に行ってみようかな？ 面倒に巻き込まれたら嫌だけど、好奇心には勝てないや。ことわざに好奇心は猫をも殺すつてあるけれど、俺は妖怪だから死なないもんね。いや、死ぬかもしれないけれど、少しくらいのことじゃあ死ねないし。

つてそんなこと言っている暇があったら見に行けつてな。もし誰かが妖怪に襲われていたりしたら大変だし。でもこんな所に人間なんてこないしな。少し力の強い妖怪とかが喧嘩でもしているのかな？

音の方に近付いて行くと森の木が横に倒されているのが見えた。

「これは……弾幕ごっこなのか？」

弾幕ごっこってこんなに自然壊されるようなものだったけ？

もしかして本当に人が妖怪に追いかけられてたりするのかな？ 少し急いで行ってみよう！

予想通りというか……普通に人が妖怪に追いかけていた。

多分妖怪の方はここが危険な場所だからそれを知らせようとして人間を追いかけているのだろうけれど、人間（男）の方は妖怪の多分見た目（人の身長の3倍くらいある）が怖くて逃げているのである。

なぜ妖怪が人間を襲ってないか判断しているかと言うと、幻想郷の妖怪は基本的に里の人間は襲わないし、襲うとしても弾幕を放つはずだ。でも、あの妖怪は弾幕を放たないで追いかけているだけだからきつと優しい妖怪なのだろう。

……ここに俺が飛びこんだら空気読めない奴になるのかな……？
まあ話しかけてみるか。

俺は空に飛んで妖怪の近くに行った。

「なあお前あの人間襲ってるのか？」

「ん！？ お前誰だ！？」

「そんなことどうでもいいからさ。答えてよ」

「俺はあいつにここから出て行くように言おうとしただけだ！ なのになぜか逃げられる！」

「やっぱりか。なら俺があいつを説得してやるからお前は止まりな
「な、なぜ……」

何か後ろで言ってたけれど無視して人間の方へ向かった。

「おいその」

「ひいひいひい！！ って人！？」

「あー。まーそうだ。で？　なんで逃げてる？」

妖怪って言ったら色々と面倒なことになりそうだから人間ってことにしておこう。

「ぜえ……ぜえ」

「あ、走ったままじゃしゃべり辛いよね」

俺は人間を抱えてく空中に浮かせる。

「うわ！？」

「で、まあ話聞いてくれ」

「あ、ああ」

「あの妖怪はお前を助けようとして話しかけてきたみたいだが？」

「そ、そうなのか？　私はてつきり襲われるのかと……」

「それは勘違いだ。ここが危険だからあの妖怪が教えようとしてくれてたんだ。お礼言つてきな！」

「う、うわあああああああ！！？」

俺は人間を妖怪の方へと投げる。

……妖怪になってから俺乱暴になったかな？　まあ気にしないことにしよう。

「うおつと！？」

妖怪が人間をちゃんと受け取っていたので問題ないな。

なんかこの後面倒なことになりそうだから隙間移動で家に戻っちゃおう。

家に戻ったら紫が起きていた。こんな時間なのに珍しいな。

「どうしたの？」

「もう準備はじめましょうか」

「あ……はい」

しばらくは準備で時間がつぶれそうだ。

37話（前書き）

今回は会話が多く、字が少ない感じですが、色々忙しいんだよね。この頃。

37話

準備するのに何日もかった。

星の軌道をもし少しでも違う方向にさせてしまつたら他の星を壊すかもしれないという可能性があるので、細心の注意を払いながら準備を進めて行った。

少しずつ幻想郷に影響が出て来たな。と思いながら霊夢の様子を伺いつつ準備を進めていった。

霊夢はいつもの様子で特に普段の生活とは変わりはない感じだが。

……異変が起こつたら気付いてくれるのか不安になつてくるのは俺だけなのだろうか。

紫も藍も特に気にしていないみたいで、俺だけ不安になつている感じがして馬鹿らしくなってくる。

ちなみに、準備はもうほとんど終わつていて霊夢さえ気づけば今にでも異変開始つて感じなんだけれどな……。

妖怪の山の妖怪達も色々と変わつてきている。本人達は気付いてないみたいだけれど。

自分たちの力があがつていたり、活動時間が若干変わっているのに全然気づかない。これはいつになったら始まるのだろう。

俺の修行はもうすることがなくて、準備万端つて感じなんだけれど……。

これ以上無理に力を高めたりしようとする逆と逆に体に負担をかけすぎていけないって、紫が言っていたので素直に従っておく。

まあ、気長に待つとするか。

「霧夜。藍。お茶でも飲んで居ましょうか」

「はい」

「そうしましょう」

とのんびりお茶でも飲んで待ってればいいんだ。

どうせ俺は妖怪だから日に日に弱くなったりとかしないし、逆に強くなっていくんだっけか？ どっちでもいいけれど、俺が不利になることはない。多分。

博麗神社。

「おーい！ 霊夢！」

「何よ魔理沙！ そんなに大声で叫ばなくても聞こえるわよ」

「ごめんごめん。でも知らせたいことがあつてさ」

「……？」

霊夢は魔理沙の言っているの意味がよくわからなかったので、とりあえずは彼女の話聞くことにした。

「最近さ。妖怪たちの様子が変わんだぜ」

「変って言われても何が変わなのかよくわからないんだけど。妖怪が

何かしたとしてもいつものことだし、放っておいても大丈夫なんじゃない？ それとも異変になりそうな感じなの？」

「んー。異変って程まではいかないと思うけれど、行動とかがおかしくなってるんだ」

「はあ？」

「いつもは夜に活動する奴らが昼に行動したり、昼に活動するやつが夜に活動するようになったり」

「気分的にじゃない？」

「そんな気まぐれな奴らじゃないと思うけど」

「知らないわよ……いいじゃない。特に人里に迷惑を掛けてるわけでもないし、異変になるようなことじゃないと思う」

「それもそうか」

魔理沙は納得して霊夢の横に座る。

霊夢はお茶を飲みながらのんびりと空を見ている。

「私にもお茶くれよ」

「中にあるから自分で取って来なさいよ」

「霊夢が入れたお茶が飲みたいんだぜ」

「自分で取って来い」

「……ちえー」

魔理沙はしぶしぶ中に入っていきお茶を入れに行った。霊夢は心の中であげるだけありがたいと思いなさいと思っていた。

魔理沙がいない間、また空を見上げていたら今度は最近幻想郷に移住してきたもう1人の巫女がやって来るのが見えた。

「霊夢さーん！」

「あら、あんたが博麗神社に来るなんて珍しいじゃない」

「ええと今日は緊急の用事で来たんです！」

「緊急？　どうかしたの？」

「最近山の妖怪の様子がおかしいということで、神奈子様と色々と捜査していたのですが……」

早苗が話しているとお茶を入れ終わった魔理沙が戻って来た。

「ん？　お前も来てたのか？」

「はい。ちょっと伝えたいことがあって先ほどここに来ました」

「私も聞いてていいか？」

「是非聞いていてください」

魔理沙が途中で話に加わったので早苗は改めて最初から話始めることに。

「最近山の妖怪のことで神奈子様と調査をしていました」

「ふむふむ」

「それで妖怪達の動きが通常の時とは違うことがわかったのです！」

「ほらな！　私が言った通りだっただろ？」

「だから何だつて言うのよ。それが私達に関係のあることなの？」

「大有りなんです！　今はまだただ通常の活動とは違う行動をとっているだけですが、放っておくと妖力が高まっていき、その内人里も襲いに掛かる可能性があるらしいです」

「どういうこと？　なんで妖怪の妖力が高まって行くの？」

「うーん。私はそこまではわからなかったな……」

早苗の話を聞いて霊夢は疑問を聞き、魔理沙は自身が気付けなかったことに気付いた早苗に関心する。

「実際これがわかったのは神奈子様と諏訪子様なんですけどね。なぜ妖力が高まっていくなのかは、確か星の動きが関係しているって言

ってました」

「星？」

「星って……あの空に浮かんでる？」

「はい。星の軌道がいつもとは違う軌道で動いているのが原因。らしいですけど、私にはよくわかりませんでした」

「星ね……全然気付かなかったわ」

「私もだぜ」

「それでどうするんですか？」

「どうするって……」

「言われてもねえ？」

そこで霊夢と魔理沙が一旦声を置き。

「解決するしかないでしょ」

「解決させるに決まってるんだぜ」

ほぼ同時に宣言したのだ。

「そろそろ気付いたみたいね」

「え？」

紫と藍とお茶しながら（異変起こしてる途中だっていうのにのんび

り過ぎすぎだな）過ぎしていたところ、紫がいきなりこんなことを言った。

「気付いたって霊夢が？」

「ええ。それとあと2人いるわ」

「え？」

1人は魔理沙かな？ という予想は出来るがもう1人が予想できない。誰なんだろうか。

「それは貴方が戦うときに確認しなさい」

「はい」

……できれば霊夢と1対1で戦いたかったけれど仕方ないか。あの巫女人気あるしな。

それにしても3対1か。かなりきつい戦いになりそうだな……。

霊夢にだって勝てるかどうか怪しいっていうのに、霊夢と互角くらいで戦える魔理沙までいるなんてね……。正直言ってまた無理じゃないか……？

「さて霊夢も動き出したみたいだし、貴方もどこかに行きなさい」

「はい。行ってきますー」

「霧夜気を付けてくれよ？ くれぐれも無理するなよ？」

「わかってるって。死なない程度に頑張るさ」

「むっ……」

本当に藍は俺のことを心配しすぎだ。

別に心配されるのが嫌だって言うわけではない。むしろうれしいくらいだけれど、前魔法が使えなくなった時弾幕ごっこをしたあとから、藍は俺のことをよく心配するようになってくれたと思う。

藍は優しいからな！。

さて、どこらへんにいようかな。すぐに見つかるような所にいるんだったら面白くないから、隠れていよう。周りに弾幕の罟とか張ってたら面白そうだな。

魔法の森。夜の上空。

霊夢、魔理沙、早苗は空を飛んでいた。
今回の騒動を起こした犯人を捜して。

実際は行き当たりばったりで怪しそうな者たちを次々に倒して行っているだけだが。

そんな時霊夢と魔理沙が突然止まった。早苗も驚いてすぐに止まる。

「ど、どうしたんですか？」

「出てきなさい」

「出てきな」

霊夢と魔理沙がそう言った瞬間弾幕が横から出てくる。もちろんそ

んな奇襲などは霊夢達には効かないが。
そして、

「あらら、ばれちゃった」

そう言いながら、彼は空間に隙間を開けて出て来たのである。

37話（後書き）

次の更新ができるかが微妙です。
なぜなら勉強しなきゃいけないことができたから。

38話（前書き）

今回は闘いだけど、短いよ。ごめんよ

38話

霊夢達の様子を俺は隙間から見物していた。

3人というのは霊夢に魔理沙、そして早苗さんだった。

予想外……といえばそうだけれど、別にこうなっても不思議ではない。

彼女だって巫女さんだし（今のいままで忘れていたが）、こういう仕事をしてもおかしくはないだろう。

途中の關係ない妖怪と戦っている彼女達の様子を見ていたが……なんとというか、鬼畜？

容赦してないし、絶対あれ殺す気満々の弾幕だよ。妖怪はちゃんと生きてたから安心だけれど、すまん關係のない妖怪達よ。俺の所為で色々と迷惑をかけてしまったようだな。

で、現在その3人が目の前にいるわけだ。

「あんた、私に迷惑が掛かるようなことはするなって忠告したはずだけれど？」

「……いきなり犯人扱いだよ。ま、合ってるからいいけど」

「まさかこんな形で戦うことになるなんてな」

魔理沙が俺に対して言った。

俺も出来ることなら1対1で戦ってほしかった。勝てないから。

「貴方はこの前の……！？」

早苗さんが俺の姿を見て驚く。

あの時は人間状態だったし、会ったのも結構前だから忘れられているかと思っていたが違ったらしい。

「それで？ 私があんたを倒したらこの異変は治るの？」

「勿論。俺は霊夢と戦いたくて異変を起こしたんだから」

「そんなことしないで、普通に戦うっていう選択肢はなかったの？」

「こっちの方が面白いからって紫が」

「……」

「……」

「……」

あ、あれ？ 俺なんか変なこと言っちゃった？

「あんたアイツの言うことならなんでも聞くのね」

「なんでもってわけじゃないんだけど……」

「はいはい。悪いけどさっさと終わらせてもらっわ！」

「！」

霊夢がそう言ったあといきなりお札が俺に向かって投げられた。不意打ちは駄目だったんじゃないのかよ！

と言ってもこの程度なら軽く避けれるのだけれど。

「私もいることを忘れちゃ駄目だぜ」

「あ……」

後ろに下がりながら避けていると横から魔理沙の弾幕が向かってきた。

レーザー系とミサイル見たいなものが飛んで来る。レーザーは服にかするくらいで避けて、ミサイルは同じくらいの強さの弾幕で相殺。そして霊夢に向かって太めのレーザーを放つ。

「前よりはかなり強くなってるわね」

と言いながら余裕で結界らしきもので俺のレーザーを防ぐ。本当に勝てるかね？

「秘術『一子相伝の弾幕』！」

ちょ！ いきなりスペルカードかよ！

少し遠目の位置からの発動だけれど、密度が馬鹿みたいに濃い。小玉がたくさん集まって星型のように見える。

あれは遠くに逃げながら弱い玉を相殺していく方がよさそうだ。スペルカードを発動させてもいいけれど、3人相手だから、まだ使いたくない。

ちなみに能力は今も星の動きを少しだけ操っているのであんまり使えない。

力が弱いのでよければ10個くらい穴を設置出来るが、スペルカードとかを防げるくらいの力を使うならば2個くらいが限界であろう。まあ2個あれば十分大丈夫なんだけれど。

「魔符『スターダストレヴァリエ』！」

んな！ 魔理沙までスペルカードを発動してきやがった！ これじやあ道が制限されてさらに弾幕をよけずらくなる！

もうすぐそこまで早苗さんの弾幕も迫って来ているのに……能力使ってもこれなら苦勞しそうだから、俺も使うか！

「境界『魔力と霊力の狭間』」

俺の周りに線が引かれそこから弾幕を1発も通さなくなる。

「な！？」

「え！？」

ちなみに妖力の境界は張っていないので妖怪には使えない。だから、
霊夢達用に作ったスペルカードだ。

制限時間はたったの20秒だ。今霊夢も札を打ち込んできているが
意味はない。

でも俺が妖力で弾幕を撃とうが関係ないのでこっちは攻撃し放題だ。
ずっとこうしてれば勝てるんだけど、制限時間をつけなければい
けないから仕方がない。

終了まで3、2、1。今！

俺はスペルが消える瞬間に周りに大玉弾幕を放つ。

「はあ！」

霊夢は自分の方に来た球を避け、魔理沙は自分の前の弾幕を破壊し
て早苗さんのフォローしに行った。

やはり3人同時だとやりづらい。もしもの時を想定して紫と藍VS
俺で戦ったことはあるけれど、3人同時ということはないのだ。

「光霊『神霊宝珠』！」

俺の弾幕を防ぎ終わった霊夢が俺に向かってスペルカードを発動さ
せた。

だからそんなにはやく使っているのかよ……。光の弾が俺に向かっ
てやってくる。

「炎&妖『ラバースミスティック』！」

霊夢のスペルに対して俺がスペルを発動させなかったら防ぐことなんて出来ないの、仕方がなく俺もスペルを発動させた。

霊夢の光の弾を全て相殺し、俺の妖力と魔力の弾が1発ずつ残っていたのが霊夢に向かって行く。

それを霊夢はちよつと横にずれただけでかわした。

「……強くなつたなんてものじゃないわね」

「よく言うぜ。全然本気なんて出してないくせに」

「あら？ 言っておくけれど、私は真面目にやってるわよ？」

「と……」

「私達が相手にされてない気がするんだぜ」

霊夢と話していたら後ろから魔理沙と早苗さんが弾幕を撃ってきた。

「おいおい。嫉妬かい？」

「そうだぜ！」

「ま、魔理沙さん……」

そんなに自信持っていていわれるとこつちも何て言っていていいか困る。いまさらだけど、夜にこんなに弾幕ごっこやって大丈夫かな？ 近所迷惑になってないといいけれど。

「そんなに霊夢と話してるのが楽しいのか？」

「いんや？ 霊夢はこの中（俺を含めた）で1番強いから注意しているだけさ」

「実際は私の方が強かったりするんだぜ」

「へー」

これはただの負けず嫌いかな？

注意はしておかなきゃ。幻想郷住民で注意しなくていい奴なんかい

ない気もするけれど。

「油断するなよ？ 私はきつとお前が思っているよりも強い」

「油断なんてしないさ。特に今なんて3人も相手にしてるんだからな」

「恋符『マスタースパーク』！！」

ほら来た。この前霊夢と魔理沙が戦っているときに見せて貰ったスペルの1つだ。

マスタースパークという名のこのスペルは魔理沙のレーザーを極太にしたようなものだ。

まあ、このスペルの対処はもう考えてある。

穴を俺の両方に設置し対象をレーザーへ。これでこの攻撃は防げる。

「な！？」

「悪い。能力で防いじゃった」

この方法が使えるのは魔理沙の今のレーザーだけ。

真正面から戦うなんてことは俺には出来ないから、かわすことに専念させてもらった。

全ての攻撃をこれで防げればいいのだけれど、霊夢の細かいお札の弾幕や魔理沙のミサイルなどは避けるの1苦労する。

一気にその対象全てを引きずり込まなければならぬし、今の俺の状態だと使っても少し穴の方へ軌道をずらすのが限界な気がする。やってみてもいいけど失敗したときが怖いのでやらないでおこう。

「参ったな……私の得意の攻撃がこうも簡単に防がれるとは……」

とかいいつつこの人も笑顔を絶やさない。なんでそんなに自信持てるのか疑問だ。

さてこっちも余裕なんてものは無くなってきたので、本気で攻撃を始めさせてもらおうかな。

「！」

俺の手から魔法陣が出て周り一帯にレーザーを放出する。あんまり力を使いたくないから前に固まって居てくれればいいのに。

と俺のレーザーを3人とも簡単に避ける。

いや早苗さんにちよつと掠ったな。それだけか……3人同時に相手にするつもりでやってたら勝てないな。絶対。

仕方ないな……この手だけは使いたくなかったんだけど、1人1人集中的に攻撃させてもらうか。

「！？」

早苗さんに向かってレーザーと小玉弾幕を放つ。これくらいなら簡単に防げるだろうな。

「妖魔『100年の靈魂紫雲』！」

魂の形をした弾幕と紫色の弾幕がさらに弾幕の密度を高める。

これで簡単にはよけきれないだろう。

でも、流石は幻想郷の人。

何かのスペル（遠くて何を言っているか聞こえなかった）を唱えて俺の弾幕を防いだ。

まあここまでは想定内だからいい。これで決める！

「え……！？」

俺は自身の力と能力の力で早苗さんの目の前まで最高速度で移動。

彼女は何が起きているのか思考が追いつかないでいるらしい（5、60メートルくらい離れていた所から2秒程で自分の目の前に敵がいたからまあわからなくもないか）。

俺は容赦なく弾幕を放つ準備をする。

手をかざして1秒と立たないうちに魔法陣があらわれそこからレーザー（マスタースパークの3分の1くらいの大きさ）を放つ。

とりあえず弾幕で死ぬことはないらしいし、それに地面に落ちる寸前には隙間で拾うつもりだったし。

でも

「やっぱり魔理沙は速いな……」

「まあな！」

魔理沙は早苗さんを抱えて安全圏まで一気に運んでいた。あの1瞬で。

「早苗。やっぱりお前は遠くに行つてな。こいつ意外に強いぜ」

「……わかりました。2共気を付けてください」

「わかった」

「任せなさい」

空を飛びながら早苗さんはここから離れて行った。うーむ一応戦力は減ったとはいえ、この子ら2人つてまだまだキツイぞ。

「でも、負けるわけにはいかないんだよな」

「生憎こっちも負けるわけにはいかないのよ！」

「恋心『ダブルスパーク』！」

「！」

俺の後ろからマスタースパークが2本横切って行った。まさか2本

だせるとは……とは言えなぜかはずれたので安心出来るか？
このまま横から迫ってくるなんてオチは嫌だぞ？ 絶対上か下に霊夢待つてるでしょ。

「散霊『夢想封印 寂』！！」

は……？

霊夢の奴俺と同じこのレーザーの間にいやがった！
しかもそこからかなり細かい弾幕を撃って来てるし！
この狭さでそんな弾幕避けれるか！

「妖魔『ヴァルタリーパープル』！」

紫色の弾幕を大量に放つ。ちなみに威力は普段の3倍程度なのだが……
……霊夢の弾幕の威力とあまり変わらないようだ。

若干こちらの弾が押しているようにも見えるが、あちら方が弾数が多いのでどうしても押されてしまうらしい。

と、魔理沙のレーザーが途切れた。

よし！ スペルの発動時間が終わっただけ。俺はとりあえず霊夢との撃ちあいを一旦避けるために登り……

「私がいるのを忘れているわけじゃないよな？ 魔砲『ファイナルスパーク』！！」

上にいる俺に向けて魔理沙はマスタースパークを放ってきた。しかも普通のマスタースパークよりも威力が高そうだ。

「炎&風『ウイニングメテオ』！！」

今度は真っ向勝負。負けてたまるかあああ！！

炎の塊にさらに風の力を加えて、威力を増幅させ相手の弾幕を撃ち破る！

俺が魔理沙に攻撃することに集中していると後ろから……

「神霊『夢想封印 瞬』！」

ちよ！ それってかなりスピードの速い弾幕じゃねえか！

俺はそれを避ける為に能力を発動させたがもうあと数メートルで当たる距離に来ていた。

やばい……詰んだ？

目の前のスペルから逃げる為にはこのまま押し切るしかない。でもそれだと確実に霊夢の1撃が当たる。

逆に霊夢の1撃を避ける為に魔理沙の弾幕に対抗している俺の弾幕を消すとその瞬間に魔理沙のレーザーが当たる。

駄目だこりゃ。

ドーン！！

「やったかしら？」

「どうだろうな。前のあいっだったらこれで終わりだと思うぜ」

「そうね……今ならもう少し粘って来そうね」

「……境界『光と闇の均衡』！！」

光の色と闇の色をしたレーザーを魔理沙達に放ちながら細かい弾幕をかなり放つ。そしてさらに外側から隙間を出して細かい弾幕を出す。

ちなみにスペル名は紫のを参考にさせてもらっている。

「恋符『ノンディレクショナルレーザー』！」

「大結界『博麗弾幕結界』！」

魔理沙のレーザーで俺のレーザーを相殺し、霊夢が細かい弾を防ぐと言った感じだろう。

2人で一緒にこなればなんとかなるかもしれないのに……！
それに俺の強力なスペルは残されることあと1つ……。これで決まらなかったら負けるな。

「境界『幻影と現の狭間』」

俺はラストスペルになるだろうカードを表示するのであった。

38話（後書き）

ラストだけ次にどーん

39話（前書き）

戦闘が……あっさり終わっております

39話

がやがやと夜の博麗神社に幻想郷の妖怪達が集まってくる。
なぜかと言うと、宴会を開いているからだ。
俺は博麗神社にある木の下で座っている。
どうしてこうなった？

「境界『幻影と現の狭間』」

俺がこのスペルを発動した瞬間霊夢と魔理沙の対応はかなり速かった。
時間が長引けば、長引くほど不利になるのがわかってたかのように。
多分あれは直感だろうけれどね。

「『夢想天生』！！」

「魔砲『ファイナルマスタースパーク』！！」

2人の最強（？）スペルに俺の最強スペルは弾幕を見られることなく
敢え無く散った。

一応説明するならば、魔理沙のマスパ（今まで見た中で最強）が俺
の弾幕を全て吹き飛ばし、さらに俺へとダメージを与える。

そして横から霊夢のスペルが飛んできてダメージをおう。

ここで俺が力尽きて空中から落ちているところで記憶がない。

どうしてこうなった？

俺があの一瞬間負けたということとはわかっているけれど、ここに誰が
どうやって運んで来てくれたのかわからない。

「目が覚めたようね」

「霊夢？」

声が霊夢の声に聞こえたのでそちらの方へ見ると霊夢が俺のことを
見下ろしていた。

「もう。こんなことは2度とやらないでよね。面倒だから」

「あ……ああ」

そういうと霊夢はよろしい。といった感じで笑顔になって微笑んだ。
ん？ やけに機嫌がいい気がするな。何かいいことでもあったのだ
ろうか。

「今日は久しぶりの宴会よ！ 貴方も楽しんで行ってね！」

「お、おう……って異変を起こした本人が博麗神社に堂々といてい
いのかよ」

「だって貴方のおかげで宴会が開けたようなものなのよ？ 感謝してるわ（今回のほとんどは早苗が用意してくれたし）」
「……そーなのかー」

鼻歌を歌いながら霊夢は他の人たち方へと向かった。

そういえば、俺が位置ずらしていた星の軌道は大丈夫か！？ 気絶していた時にコントロールを失って変な方向に行ったりとかしてないよな？

「そこらへんは大丈夫だから気にしないでいいわよ」

ひゅんと音がして隙間が開かれ、紫が出て来た。なんで思考がばれている？

「口から言葉出てたわよ？ それで思考を読まれているなんて言われても困るわ」

「なんだってー。それで何で大丈夫って言えるんです？」

「ちゃんと貴方が意識を失ったら軌道に戻すように仕組ませましたから」

「……何その最初から俺が勝てないことを予測していたような言い方は……」

「博麗の巫女に勝てるなんてことは滅多にないのよ。もちろん私も勝てないし」

「……うー」

「そんな顔しないで、貴方も楽しきなさいな。折角の宴会なのに楽しまないと損するわよ？」

そういつて紫は俺に手に持ったお酒を見せた。

「そういえば、俺ってまだお酒飲んだことないんだよね」

「あら？ そんなの？ なら初体験じゃない。ほらほら飲んで飲んで」

紫が隙間からコップをだしてそこにお酒を注いでいく。

一瞬酒は20歳になってからじゃなきゃ飲めないんじゃないかって思ってた自分はもう数百歳だったということを思い出した。何勘違いしてるんだか……

そうだったら飲まないではいられない。前の世界に居た時に飲んでみたいなとずっと思っていたんだ。

あっちでは酒を一気飲みしたりすると急性アルコール中毒だかになったりするだろうけど、今じゃ妖怪になったんだし耐性も出てくるだろう。

「ありがとう」

紫からコップを貰って酒を口に含んだ瞬間、俺の意識はブラックアウトした……。

ふらつと彼がお酒飲んだ瞬間に体を倒した。

最初は初めて飲んでくらつと来たのかと思ったけれど違うみたいね。完全に意識がなくなっているみたい。

彼はお酒に弱いみたい。残念ね。折角彼とゆっくり飲もうと思ったのに。

彼が気を失って倒れているので、膝枕でもしてあげようかしら。意識もないみたいだから放っておくのも可哀そうだしね。私が1人でお酒を飲んでいると霊夢と魔理沙がやってきた。

「……そいつは？」

「お酒が合わなかったみたい。倒れちゃったわ」

「お前本当にこいつお気に入りだよな」

「そうね。かわいいもの」

「カッコいいじゃなくてかわいいなんだな」

「ええ」

そういいながら彼の頭をなでてやる。

そうすると彼はなぜだか嬉しそうな顔をする。本当は起きているんじゃないのかしら……。

「……ゆか……りい……」

「……………」

「あははは!!」

魔理沙は声を出して笑った。霊夢はどうでもよかったのかまた違う場所へ向かっていった。

甘えんぼうね。膝枕をしている彼を少し起こしてやり、少し抱きしめてあげる。

「悪いけれど、今日は家に戻るわ」

「おう。お前も大変だな」

「好きでやっているからいいのよ」

そう言つて隙間を開いて家に戻る。今日は藍と橙も宴会に連れて行ったから戻つて来ることはないと思う。

「紫……？」

「あら起きたの？」

霧夜は私の手から離れ（支えていただけ）て立とうとするけれど、まだ足が震えてくらくらしているようだ。

「大丈夫？ 無理しないでいいわよ？」

「はい……」

私がそう言つと、彼は下に座つた。私は霧夜を彼の部屋に連れて行つたので、下には丁度ベッドが敷いてあつた。面倒だからって片づけてなかったのね。人のことがいえる立場じゃなけれど……。

彼が座っているの、私も彼の前に座ることにした。なんとなく、今日は彼の近くに居ようと思つたのだ。

俺が布団の上に座っていると紫も俺の前に座つた。

今日は彼女は俺の近くにいてくれるみたいだ。

それにしても、ゆっくりと過ごすのはかなり久しぶりだと思う。最

近は星のことやら修行のことやらでのんびりする暇もなかったしな。それは紫も同じだと思っけど。

「今日は少し暑いわね」

そう言っただけは数歩歩けば届く距離にある扇子を隙間を使って取った。

「それくらい歩いて取ればいいじゃん」

「面倒ですもの」

怠け者め……いくら能力が便利だからってそれくらい自分でやればいいのに、って言っても能力も自分の力だから自分でやっているということになるか。

なんとなく、紫に甘えなくなった。それもいきなり。

俺は目の前にいる紫に向かって倒れ込む。太ももあたりに頭を乗せる感じで。

「あらあら？ どうしたのかしら？」

「何か甘えたい気分……」

「まだ酔っているのかしら？ まあどっちでもいいわ」

そう言っただけは紫は俺の頭をなで始める。ちなみに俺の視線は紫を見上げる感じになっている。

「まるで子供ね」

「……言い返せないのがつらい」

「霊夢に勝てなかったわね」

「見てたの？」

「ええ勿論。私の好きな人が戦っているんですもの。見ないわけな

「いじゃない」

「そりやどうも」

好きというのは、1人の男性としてではなく普通に好きな人（妖怪）
という意味であろ。と特に気にはしなかったのだが……。

「……少しくらい動揺しなさいよ」

「え……？」

な、なんだ？ この動揺しなさいということは……。

もしかしてその反応を楽しもうとかそういうことを思っていたのか？
でも紫ちよつよ頼が赤いようにも見えるし（気のせいかもしれない
けれど）もしかして告白だったのか！？

ちよつと体制を変えようと体を動かそうと思ったら頭が少し痛むの
で、能力を使って（引きずり込む方）空中に引き寄せ、紫の正面の
所に座った。

「貴方だつて能力使ったじゃない」

「これは仕方なくだよ……ってそれよりも！」

俺が紫に向き合つと紫は持っていた扇子を元の場所に置いて改めて
こちらを見る。

「さっき言ったことは本気よ？ 結構前からだけれど、私貴方が好
きななのよ？ 気付いてなかった？」

「え？ え？ 気付いてなかったし、それ……え？」

「大丈夫？ 深呼吸して落ち着きなさい」

「すーはー。落ちつかない。でもなんとか理解出来た、今の状況」
「それはよかったわ」

つまり紫が俺のことを好きっていうのは恋愛的な意味だったということだな。

……結構前っていつからだっただろう。

「あのさ、紫」

「な、何かしら？」

俺は能力を発動させて紫をこっちにゆっくりと引き寄せて、抱きしめる。

「こういうことしても、いいのかい？」

「いつもしてたじゃない。私が」

そう言っている紫の頭を今度は俺がなでる。俺が撫でられることはよくあるけれど、紫をこんな風にするのは初めてだ。

「……悪い気分じゃないわね」

「そりゃよかった」

「いや、訂正するわ。すごくいい」

そう言っただけで俺に体をさらに預けてくる紫。分かってたけど改めて紫って可愛いよな！　いつもは美人さんって感じだけで、今はものすごく可愛く見える。

「ねえ……霧夜は私のことどう思ってるの？」

「え！？　それって、言わなきゃ駄目か！？」

「言わなくてもいいけど……言っただけいい」

うー。俺こんな状況に陥ったことなんて人生で初めてだからこういう時にどういう対応すればいいのか凄く迷う。

普通なら俺も好きだとか言うべきなんだろうけれど……。何かそれは言いたくない。

チラッと紫の方を見ると俺を見上げていて、その視線から期待とドキドキしている感じが伝わってくる。

と紫を見ていたら身体が自然に動いてチュッと俺の唇と紫の唇が合わさって……。……

「!？」

「!？」

「ご、ごめん!! いや……。えっと! その! 意識してやったわけじゃなくて、身体が自然と動いちゃったとうかなんというかな?」

「え……。? 無意識だったの?」

「っ!!」

俺は我慢が出来なくなってもう1度紫の唇自分のを今度は意識してする(さっきのもしかしたら意識的にやっていたのかもしれないけれど)。

「き、霧夜!？」

「ごめん紫。俺お前の気持ち全然気付かなかった。でも、今なら言える。好きだ!」

俺がそう言ったら紫は少しの間茫然としたあとに俺を布団に押し倒した。いや俺がその衝撃に耐えられなかったただけかな。
俺の上に紫が乗っているとう感じになっている。

「そう言ってくれて嬉しいわ。霧夜」

紫さんはそういうと俺を見ながら微笑んだ。

「相談なんだけれど、貴方も八雲の姓を受け継いで欲しいんだけど……」

「話一気に飛んだな!!」

「だって……ずっと前からそうしたいって思ってたから」

「……分かったよ。俺は今日から八雲霧夜になるよ」

全く。いつからそんなことを考えていたのやら……。でも悪い気もしないし、良しとしよう。

「今日は私もここで寝てもいいわよね？」

「ああ。拒否する気もないし、むしろ大歓迎ってとこかな」

「お邪魔します」

上に乗っていた紫が横に移動して布団の中に入って行った。って俺もまだ寝る気じゃなかったから布団の中には入ってなかったんだよね。

「不思議……」

「どうした？」

「この前までこうしてもそんなに緊張しなかったのに、今凄く緊張してるわ」

「そうなのか」

「貴方は大丈夫なのね……」

「むしろ安心しているって感じかな。紫がこんなに近くにいるんだしね」

そう言っただけで紫を自分の方向に引き寄せる。

「ふふふ。いいわねこういう感じも」

「そうだな。明日は昼まで寝る」
「はいはい」

俺は紫をぎゅっと1回抱きしめてから、横にずれて手を握りながら寝た……。

39話（後書き）

次回、ラスト

40話（前書き）

ついに最後です。

今まで読んでくださった皆様ありがとうございました。

40話

俺が八雲の姓を貰ってから、3ヶ月くらい経った。

今になってやっと妖怪になったという実感がわいてきた。

最近は忙しくて考えてることも少なかったから、改めて時間が出来たからっていう所為もあるかもしれないけれど。

妖怪になってからこれほどゆっくりと過ごしているのは初めてではないだろうか。

霊夢と戦ったり異変の準備してまた戦ったりして、うん。まったりしているのって初めてだ。

と言ってもちゃんと弾幕ごっこやったりもしているから怠けているわけではないんだよ？ でも仕事とかはしてないから怠けているって言われればそれまでかもしれないけれど。

あれから霊夢とは1対1で戦ったりしている。でも20回くらい戦ってまだ2回くらいしか勝ったことがない。つまり、あの時に1対1で戦っても勝てなかった可能性の方が高いってことだね。

魔理沙とも偶に会うときに喧嘩というか挑発されて弾幕ごっこすることもあった。勝てないけれど。

俺はきつとパワーでごり押しされると弱いだろう。ファイナルマスタースパークなんて発動された時は消し炭になるかと思った(その時は防御系のスペルを発動させていたが、なんなく突破された)。最近よく会うと言えばその2人だ。勿論紫とは毎日会っているよ？

同じ家に住んで居るんだから当然と言われればそうだけれど。

藍ともよく話をしたりするけれど橙とはあんまり話することがない。というより会うことが少ないと言った方がいいかもしれない。

あれから紅魔館に1回だけ行った。

なぜかと言うと図書館の本に興味を持って見せて貰うため。

その時はレミリアさんもフランも弾幕ごっこは仕掛けてこなかった。むしろ歓迎してくれたと言ってもいい。

パチュリーさんとも仲良くなれたしね。

と今俺は何をやっているかというところ、部屋から外を見てばかりとしている。

これを他の人から見られたらどこの巫女よ！　って言われてもおかしくないだろう。

だって博麗の巫女さんはいっつも俺がいくとお茶飲みながら空見てばかりんってしているんだもん。

その時に隙間を使つてうしろから手を出して脅かしてやろうとか思つてもすぐに見切られてしまう。流石は博麗の巫女、油断していてもそういうのは感ずいてしまうようだ。

「霧夜」

「およ、藍か」

俺がばかりんと空を見上げているといつの間にか隣に藍がやって来ていた。

参ったな。来たことに全然気付かなかったよ。これは俺は奇襲とかされてら1発でやられちゃいそうだな。

「どうかしたのか？」

「いや、人里の結界がどうなっているか調査しに行こうと思つてな。そのついでに買い物も済ませてしまおうかと」

「ああ。行く途中の場所に俺がいただけか」

「まあそういうことだな」

人里か。

藍なら行くのにもあんまり時間はかからないだろうけれど、俺の能力というか隙間の方を使った方が早く行けるであろう。

「もしよかったら俺の隙間で行くか？」

「いいのか？」

「ああ。俺も気晴らし出かけようと思っていたからな」

「そういうことなら、頼むよ」

「任せておけて」

俺は隙間を開いて人里へと繋げる。隙間を開くと先に藍が入っていた。

俺のことを信用してかどうかはわからないけれど、そんなに先に入って行って大丈夫なのか？ もし行き場所が違う場所だったらという可能性を考えた方がいいと思うのだが。

ま、ちゃんと人里に繋がっていたからいいんだけれどね。

人里に着くと藍は結界を調べて、買い物に行くから先に帰っていてもいいからな。と言って人里の方へと行った。

で、俺は特に何かすることなんてことはなかったもので、何も考えなしに空へ飛びあがった。

今の俺って人間だった頃とは考えられないくらいおかしいよな。

なぜかと言うと普通に空飛んでるし、弾幕ごっこかっという人だった時には考えられもなかった遊びをしているのだから。

ふと思ったけど弾幕ごっこって遊びなんだよな……恐ろしい。

と適当に空を飛んでいるとお気に入りの木が見えてきた。何がお気に入るかと言うとそこから見る景色が綺麗という理由もあるが、そこから他の妖怪や魔法使いが弾幕ごっこしているのを眺めたりすることが出来るからだ。

結構高い位置にあるお気に入りの木の1番上に着地してみる。そこ

でバランスをとって片足だけで立ってみた。

今は綺麗な景色が見えるだけで、どこかで弾幕ごっこをやっている姿は見ることは出来ない。

最近視力を良くする魔法を覚えたので、ここから結構な範囲の戦いを見ることが出来る。と言ってもいつもの視力の2倍しか見えないので、あんまり変わらない。

そういうえば、俺の姓が八雲に変わったことはあまり知られていない。

実際に知っているとえば霊夢と魔理沙、それと冥界の人たちくらいだろう。

人里のおっちゃんとかになら言ってもいいんだけど、言うとなんだか話が変わな方向に行きそうだからやめておいている。

それと人里の人達に言つと、あまり良い風には思われないうちでもないからってことで普通にあつちではまだ綾瀬だ。

ま、霧夜って呼ばれているからあんまり意味ないけれどね。

それにしても景色だけ眺め続けていてもあんまり楽しくはない。

どうしようかな……。また隙間移動でもしてどこかに行つて見ようかな？

「あたい最強！」

「お？」

いきなり俺の後ろから声が聞こえた。

やっぱり俺って駄目だな……。全然気配に気付けなかった。

「チルノか」

「そういうあんたは霧夜ね！？」

いや、初対面じゃないんだから疑問形で言わないでよ。

「そうだよ。何しているんだこんな所で。いつもは湖の近くにいるじゃないか」

「どこへ行くこうとあたいの勝手よ!」

「そりゃそうだけどさ……」

「というわけで、あたいは行くわ」

「あ、ああいつてらっしやい」

そっとうとチルノはどこかへとふわふわと飛んで行った。一体なんだったのだろうか。

ここにいるだけで話かけられたのは意外に今のが初めてだな。

さて、俺はどこへ行くのかな。

あの後適当に彷徨ったあと博麗神社に行くことにした。

弾幕ごっこをしたいと思ったわけではないけれど、なんとなく行くことにしたのだ。

ちなみに今日はお賽銭を持って来てはいない。

「いつも通りというか、なんというか」

霊夢はいつも通り神社の部屋の中にいた。

でも今日は横になって寝ている。

「お、お前も来たのか」

「魔理沙」

俺が若干空に浮かんで霊夢の様子を見ていると後ろから魔理沙がやってきた。

「あちゃー。霊夢の奴寝てるよ」

「見事に寝てるな」

霊夢に何か用事があったのだろうか。

魔理沙は霊夢に近付くと頬をふにふにと突つつき始めた。

「はは！ 柔らかい！」

「おいおい……」

そんなことしてたら起きた時に何されるかわかったもんじゃ……

「！？ 魔理沙……！」

「うおっと」

ほらそういうことを考えていると霊夢が起き上ってきた。

そしていきなり魔理沙に向かって弾幕を放ちはじめた。

「行き成り弾幕ごっこかよ」

「そんなこと言ってる余裕が、わっ！」

空中に飛び出しながら魔理沙が言った。

霊夢は追いかけてくる様子がないようで、いつもの位置に移動して

いた。

「全く人が気持ちよく寝ていたのに何するのかしら」
「ちよつとした冗談なんだぜ」

そう言つて魔理沙は霊夢の隣に座つた。

「あら、あんたも来てたのね」

「今頃かよ……」

「悪い？」

「別に……悪いやっぱ俺は今日帰るわ」

「そう。じゃあね」

「ああ」

堂々で2人の前で隙間を開く。

「やっぱりその能力つて反則だよな」

「まあな」

「結局お前何しに来たんだ？」

「特に用事あつたわけじゃないさ」

そついつて俺は隙間の中に入って家に戻つた。

そしてさっきと同じように空を見上げてぼうつとすることにした。

「霧夜」

「なんだ紫」

1日経ってまた俺が空を見上げていると紫が隣に来ていた。

「宝船の噂って知ってる？」

「宝船？」

それはお宝を乗せている船ってやつかな？

でも幻想郷には海なんて物はないから船なんてないし。

「ええ。ほら、空見て」

言われた通りに空を見るが……何もない。

「何もないじゃん」

「どこ見てるのよ。あっちよ」

指を差された方を見ると雲の上に何かが浮いているのが見えた。

「おいおい。ありやなんですか？」

「あれが噂の船よ。どうするの？」

俺の方を見ながら紫はにやにやしていた。

そんな紫の頭をぽんぽんと軽く叩いてから俺は庭の方へと歩く。

「本当に幻想郷っていい所だよな」

「それはそうよ。私が作ったんだから」

「はいはい。じゃ行つて来ますわ」

「お土産宜しくね」

「了解！」

そう言つて俺は空を飛んで船を追いかける。
隙間の能力を使つたら面白くないしな。

きつと俺はこれから永遠に幻想郷で過ごすだろう。

いつもの平和な時間も好きだし、弾幕を撃ちあつて戦うのも好きだ。
でもいつかは終わりが来てしまう。

だから出来るだけ長くこの時間が続くように、俺は願ひながらゆっくりと空を飛ぶ船を追いかけたのだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8236o/>

東方流星録

2011年8月2日02時24分発行